# オバロに参加できると思った奴が、SCP財団に見つかったようです

ulo—uno

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ＳＣＰ―１３６３―ＪＰを見て思いついたものです。

筆者はこれが処女作です。

筆者は、ＳＣＰに関してまだにわかです。

文才もないこんな作品ですがどうか生温かい眼差しでみてください。

ＳＣＰ―ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎはクリエイティブ・コモンズ表示―継承３．０ライセンス作品です。（ＣＣ―ＢＹ―ＳＡ３．０）

# 目次


第一話 1
第二話 5
第三話（報告書回） 10
第四話 13
第五話 19
第六話（改訂版／報告書回） 23
第七話 25
第八話 29
第九話 33
第十話 38
第十一話 43
第十二話 47
第十三話 52
第十四話 55
第十五話 59
第十六話（追加報告／報告書回） 63
第十七話 66
第十八話 72
第十九話 79
第二十話 82
第二十一話 86
第二十二話 89
第二十三話 95
第二十四話 101

第二十五話 105
第二十六話 110
第二十七話（回想回？） 116
第二十八話 119
第二十九話 126
第三十話 139
第三十一話 143
第三十二話 150
第三十三話 155
第三十四話 160
第三十五話 166
第三十六話 179
第三十七話 185
第三十八話 191
第三十九話 200
第四十話 206
第四十一話 214
第四十二話 217
第四十三話 221
第四十四話 225

# 第一話

――――――ザザ―ザザ――――――ザザザザ――――――

『Ｃｐこちらα部隊、《例の建造物》の地下内部第９階層に侵入。依然《例の建造物》は、未知の物質で構成されている模様。オーヴァー』

【こちらＣｐ。α部隊、了解した。引き続き《例の建造物》内部の踏査を続行しろ】

『Ｃｐこちらα部隊、了解。何か状況が変わり次第連絡する。オーヴァー』

薄暗い巨大な通路の中を４人の特殊部隊の男達が進んでいく。

男達の目に入ってくるものは、壮厳で、人の手では再現不可能なほど緻密に描かれた模様が続く通路であった。

『隊長、あれを』

『ああ、俺にも見えている』

『あれが今回の目的のものでしょうか？』

『おそらくは、な……』

男達が通路を抜けた先には、機械仕掛けの謎の物体が浮かぶのであった。

――――――――――――――――――――

突然ではあるが、俺の話を聞いてくれ。

俺は、元々プロの自宅警備員兼マイン○ラフト一級建築士（自称）としてあまりにも素晴らしすぎる生活を過ごしていたのだが、そのせいか家族にまで見捨てられ家を追い出され正月の餅を喉に詰まらせて孤独死してしまった。

そして次に目が覚めた時には赤ちゃんだったのさ。
ここまでなら、よく俺自身も読んでいた転生物にある展開で俺ＴＵＥＥ系とかそういった類のものだとおもえたが、そんな願いもむなしく現実は普段からガスマスクを装着しなければ１分と待たずに病気になるような荒廃しきった世界だった。
そんな地獄のような世界ではあったものの、両親の愛情を受けて育ち前世の教訓から真面目に定職にも就いた俺ではあったが、あることに気付いたのだ。それが、

《ＤＭＭＯ＿ＲＰＧ／ユグドラシル》

そう、《ユグドラシル》だ。
ということはつまりこの世界が《オーバーロード》のリアル側だということだ。
当然ながら俺は《ユグドラシル》を即購入した。
しかし、ここで思わぬ問題が発生した。
そう、俺のプレイヤースキルの低さだ。
俺は、前世も含めて様々なゲームをプレイしてきたが対人において俺はド底辺としか言いようのないものだった。
そこで俺が思いついたのは、オープンワールドではなくクローズにして遊ぶことだった。
《ユグドラシル》は、別にオープンワールドだけでなくクローズにも対応していたからそちら側で遊ぶことで対人戦をしなくて済むと考えた。
しかしそれでは原作のキャラに関われない、最悪の場合転移した後に敵対してしまう可能性がある。
そこで俺は、原作キャラにも関われる、対人をしなくていい策を考えた。
ここで、いきなりだが《ユグドラシル》の機能について説明をさせてもらう。
《ユグドラシル》には、個人がオフラインで作成したマップやゲームを配布できるというものがある。

つまりこれは、俺が前世でしていたマ○クラのように映画を再現したマップやホラーマップを利用したゲームを制作できるということだ。
　ということで、俺という存在を原作キャラに認知してもらえるように、ｙｏｕ○ｕｂｅにも、制作した作品の作業風景や完成したホラーマップのＰＶなどできるだけ投稿した。
　そのおかげで、原作キャラとフレンドになれたが。（ギルドメンバーにはなれなかった）
　そんな訳で俺は、これで転移後も殺される心配はないと考えた。
　そんなこんなで最終日、俺は軽く《ＡＯＧ》でモ○ンガさんと会話して俺の拠点《Ｃｒａｆｔｅｒｓ　ｏｆ　Ｓａｎｃｔｕａｒｙ》戻ってきたと言う訳だ。（何故かギルメンの人数が多かったが）
　そして、運命の時間００：００を迎えようと謎の深夜テンションで作った機械仕掛けの球体の外見をした封印カプセルに入る。
　そのまま運命の時間を迎え、目を覚ますと――――――
――――――真っ白であったと思われる一部が破壊された壁、２人のオレンジ色の囚人服を着た男、何人かの特殊部隊と思われる人間、１人の白衣姿の男、５人のスーツに身を包んだ男女、そして、皮膚が溶けていると思われる巨大な爬虫類がみえた。
　え、どういうこと？と思われるかもしれない。
　実際俺がそうだ。
　そもそも、オバロの世界だと思いこんでいただけあって頭の理解が追い付かない。
　しかも、周りの人間の姿から明らかに精々中世くらいのオバロの世界からかけ離れている。
　つまり、俺はオバロの世界とは別の世界に転移したということになる。
　とりあえず、ここがどこか把握せねば……
　先ずは、時間停止の指輪で目の前にいるスーツ姿の人間以外の時間をすべて止める。
　わあ、……すんごいキョロキョロしてる。

まあ、時間停止を知らなきゃそうなるか。
じゃ、話しかけてみるとしますかね。

# 第二話

《それ》が起こったのは、突然だった。

始めは、我々《Ｏ５》のメンバーによる会議。

話す議題は勿論《例の建造物》と《謎の球体》についてだ。

両者供に全体的に使われている物質は全くの未知であり、今の時点で分かっていることはサンプル採取のために用いられたレーザーカッターすら通さない硬度と耐熱性があり、保存の状態から防腐効果も期待される。

しかしながら、その性質は不明で一体何故誰にも知られずにあそこに眠っていたのか、そもそも誰がいつ何の為に作ったのかさえ不明である。

「なあ、クラスィー……君なら《例の物体》を何に使う？」

「さあね。今は興味ないわ」

ああ、鬱陶しい。

先ほどからこればかりだ。

本来我々が今するべきなのは、《例の物体》の利用方法を考えるのではなく収用方法やオブジェクトクラスの振り分けだというのに……そもそもまだ安全と決まったわけではないというのに。

もしも、《ＳＣＰ―１０４８》の様なものだったらどうするつもりなのか。

「まあまあ、そう言わずに……なんだったら今から見に行こうじゃないか」

「ああ、私も賛成だ。せっかくこの収容施設に収容されているのだ……見に行っても構わないだろう」

クソッ、ここにいる男どもは皆馬鹿なのか!?　ＳＣｉＰというものの危険性を全く理解できていないのか!?　でなければこんな発言するわけがない。

「クラスィー、君もいくだろう？」

ハァ？いくわけないだろう、そんなとこ。
いやまて、冷静になるんだ私。
もし私がいなければ誰がこいつ等を止める？
こんな奴らとはいえ《Ｏ５》、つまり最高レベルのアクセス権を持つ集団だ。
ということは、もしこいつらが《例の物体》に何かしたいといえばそれがそのまま大抵のことは許される立場にあるということ。
それだけは、何としてでも避けなければならない。
そのためには、同じ権限を持つ私がいなければならない。
つまり私の出す答えは、
「……はい、私も付いて逝きますよ………」
これしかないわけだ。
クソがッ！！！
今日はとんでもない厄日だ、最悪だよまったく。

――――――《Ｏ５》移動中――――――

ようやく《例の物体》が収容されている施設まで到着した。
これが《例の物体》か……。
改めて実物を見るとなんだかこう、……〝神聖さ〟というものを感じるな。
他の《Ｏ５》の奴らは本当にこれを我々が利用できると考えているのだろうか？
だとしたらこいつ等は相当な馬鹿としか言いようがない。
私には、到底これが人類が利用できるような代物ではないと考えｔ

――――ドォンッ!!!

――――ウゥウウウゥウウウウウ!!!!!!!!

『!!?』

――――【警告・《サイト――■■■■■》にて収容違反発生。規模は不明】――――

――――【警告・《サイト――◆◆◆》にて収容違反発生。規模は不明】――――

――――【警告：《サイト―□□□□□□□□にて収容違反発生。――……

…………

一体何が起こった!?

あたり一面に鳴り響くサイレン音。

そしてただひたすらに灯り続ける赤色灯。

ここだけじゃない……世界各地の収容施設で収容違反が発生している!?

これはまさか、……《世界終焉シナリオ》だとでもいうのか……。

「おいおいおい……一体どうなっている……世界中の収容施設で収容

違反がおこっているだと…………？なにかｎ「ギャアアアアアアアアア
アアアアア!!!!!」ッ！おい！お前、今すぐに隔壁を閉じろ!!」
「り、了解！」!!!
いや間違いない……まさか、こんな時に《世界終焉シナリオ》が起こるとは……………ハハ……私も運の尽と言う訳か……
今更隔壁を閉じたところで意味はないだろう。
今、目の前にあるものは《D職員》２名、財団所属のエージェント数名、《例の物体》を調査していた研究者1名、私たち《Ｏ５》、そして《例の物体》……。
正直言って既に詰み状態だ。

――――ガラッ――――

『ッ!!!』

収容施設の壁に罅が入る。
この収容施設内でそんなことができるのはたったの2体しかいない。
そしてそのうちの1体はまだ封印されていて目覚めていない。
つまりこいつは、――――
[ヨォ、人間ドモ……。コンナトコロニイタノカ?大人シクシテロヨ……。今、殺シテヤルカラ……]
間違いない。
考えられる中で最悪の状況だ。
壁が壊れる。
そこから現れたのは、全身の皮膚が爛れ落ちかけた巨大な爬虫類。
《ＳＣＰ―６８２》通称：クソトカゲ

奴は、まずい。
奴だけは、ダメだ。
奴の特異性は《不死身》にある。
しかしながらやつは何より、《人間を殺したいほど憎んでいる》。
その視線に捉えられる。
純粋な殺意。
怖い。
逃げたいが、体が動かない。
そのまま恐怖に押し潰され――――

――――カチッ――――

――る前に時が止まった。

何が起きているのかさえ理解できない。
分かるのは全ての時間が止まったということ。

一体何が――――

――――カシャン――――

私たちが視線を向けるそのさきには、人型で機械仕掛けの今まで我々が遭遇したものとは明らかに〝格〟が違う何かがこちらに視線を向けていた。

# 第三話（報告書回）

報告書

アイテム番号：ＳＣＰ―■■■■

Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ　：Ｅｕｃｌｉｄ

特別収容プロトコル：ＳＣＰ―■■■■は現在、詳細な情報を得ることができていないためＤクラス職員２名を４時間毎に交代させながらの点検を行って下さい。

Ｄクラス職員２名の後述に差異が見られた場合は速やかに担当職員に連絡して下さい。

ＳＣＰ―■■■■の点検を行ったＤクラス職員はＳＣＰ―■■■■の接触、または観察による何らかの影響がないか調べるために点検終了後速やかに隔離してください。

説明：ＳＣＰ―■■■■は未知の物質で構成される、■■■■州■■■■国立公園内の森林に位置している地下九階の建造物（以下ＳＣＰ―■■■■―１と呼称）と、その内部に存在する球体状の物体（以下ＳＣＰ―■■■■と呼称）、そしてその周囲に存在する既知の物質で構成されているオブジェ（以下ＳＣＰ―■■■■―３と呼称）で構成されておりいつの時代から存在している物なのかはるか不明です。

ＳＣＰ―■■■■の現在確認されている異常性はその内部構造の秘匿性にあると考えられています。

また、ＳＣＰ―■■■■―２の内部構造について今現在分かっていることはありません。

財団がサンプル採取のために用いたレーザーカッターを無効化す

る耐熱性を持つことも分かっています。
また、ＳＣＰ＿■■■■の内部をスキャンしようとしたところＳＣＰ＿■■■■の内部はＳＣＰの外殻部分によりＸ線・γ線を遮断され確認する事ができませんでした。
［編集済み］博士は、このＳＣＰはあらゆる角度からの［編集済み］に対して耐性を持っていると推測しています。
［編集済み］博士は、ＳＣＰ＿■■■■／ＳＣＰ＿■■■■＿１の関連性についても調査するべきであると考えます。
ＳＣＰ＿■■■■＿１内部を調査した財団所属のα部隊からの報告によれば、ＳＣＰ＿■■■■＿１内部には謎の模様が存在し、彫刻、絵画、その他様々な美術品と思われる物も発見されています。
これらのＳＣＰ—■■■■—３は前者のＳＣＰ—■■■■—１／ＳＣＰ—■■■■—２と異なる物質の物が使用されているが、我々の既知の物質であろうとも耐久性が明らかに異なっていることが分かっています。
このことから、ＳＣＰ—■■■■—１／ＳＣＰ—■■■■—２による何らかの影響によって耐久性、硬度が異常に高くなったのではないかと推測されます。
ＳＣＰ—■■■■に関しての文献、または逸話などは現在確認されません。
ＳＣＰ—■■■■の調査チームはＳＣＰ—■■■■がそこにいつの時代からそこにあるのか、だれが何の目的でそこに作ったのかを引き続き調査してください。再審議の結果調査は新たな指示があるまでその内容が如何なるものであったとしても禁止します。
補遺：実験ログ：ＳＣＰ—■■■■—０２
実験記録■■■■—１　—　日付■■／■／■
対象：　ＳＣＰ—■■■■—１及びＳＣＰ—■■■■—２
実施方法：レーザーカッターによるサンプルの採取
結果：失敗。サーモグラフィーによると表面の温度は変化していない。
分析：かなりの耐熱性を有するようだ。——［編集済み］博士

実験ログ：ＳＣＰ―■■■■―３―０５
実験記録■■■■―３　―　日付■■／■／■
実施方法：チタン合金製ナイフによるサンプルの採取。
結果：失敗。チタン合金製ナイフの強度不足によるもの。
分析：一見既知の物質のようだが違う可能性がある。――［編集済み］博士
実験ログ：ＳＣＰ―■■■■―３―０６
実験記録■■■■―４　―　日付■■／■／■
実施方法：レーザーカッターによるサンプルの採取。
結果：成功。顕微鏡で確認するためのサンプルの採取。
分析：原子配列は既知の物質と何ら変わりはない。強度に関する異常性はＳＣＰ―■■■■の影響によるものだと推測する。――［編集済み］博士

# 第四話

＜ｓｉｄｅ主人公＞

深夜テンションで作った封印カプセルから外に出る。
おれは、ここが何処であるかを目の前のスーツ姿の人間に聞くために、時間を止めた。
　完全にあのトカゲに怯えていたのは理解できていたから、一先ず時間を止めることで対話できる環境を整えようとしたわけだ。
だというのに……
いや、そんなに怯えないでくれよ。
本末転倒じゃん、なんで俺が怖がられるわけ？
あ、そうか。
俺今《ユグドラシル》のアバターのままだったわ
いや、でも俺の外見人型のロボットみたいなやつだよ？
そんな悪役みたいな外見じゃねぇしに怖くないだろ、ロボット……。
まあ、気を取り直してはなしかけてみるか。
あー、もしもし……？俺、君、助けた、オーケー？
とりあえず目の前のスーツ姿の女性に話しかける。
てか、この人よく見たらクッソ美人やん。
あ、オーケーね。
物凄い速さでうなずいてきたな……。

「な、なん、だ……貴様は……？」

クラフターだ（キリッ
ちょとタンマ……。
今の無し今の無し。
って、アアアアアアアアアアアアァアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

そんな目で俺を見るなあああああ!!!!!!!
ほんっちょとした出来心だったんでしょう。
なんでもするので許してツカサイ。
え？
なんでもていうところに反応しないで。
え、え、？そういう？

……分かったよ!!
でも、３つまでだからな!!
３つまでだったら何でもしてやるよ!!
こうなったらやけっぱちだ!!
どうにでもなれェ!!!

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラスィー＞

――――――――――――カシャン――――――――――――

なんだ……あれは……。
《例の物体》がいきなり動きだし、《それ》が姿を見せた。
それは一見機械仕掛けの人型のロボットの様な姿だ。

それでいて《それ》は明らかに人が作ったものではないと確信した。
〝格〟が違う。
今まで《Ｏ５》としてそれなりにＳＣＰを実際に見てきたし、その中には勿論《Ｋｅｔｅｒ　ｃｌａｓｓ》と呼ばれるものもいた。
そんな私でさえ、只々圧倒されるしかないほどの〝圧〟が《それ》からは放たれていた。
これは人間が何かしたところで無駄だろう。
そして、今現在起こっている時間停止と思われる現象……間違いなくこいつか何か関係している。
『おい、そこのスーツ姿の女。聞こえているか？あー、……オレ、オマエ、タスケタ……。通じているか？』
「っ!!あ、ああ……言葉は通じている。普通に話してくれればいい」
話しかけられた。
だが、収穫もある。
言葉が通じるのならば、比較的知性がありこちら側との意思疎通が可能ということと考えていいだろう。
ならば、……
「な、なんだ……貴様は……」
なるべく平静を心掛けていたのだが失敗してしまった。
奴は、少し何かを考えるそぶりを見せ
『クラフターだ』
……
クラフター。
創るもの。
なるほど、つまりこいつは《創造主》と言う訳か。
『なんだ、その眼は？』
な、あまりにもこいつを凝視しすぎていたか。

ま、まずい。
この状況下でこいつと敵対するほど悪手なことはない。
『ハァ、仕方が無い……。なんでもいいから願い事を言ってみろ。但し、3つまでだ……。3つまでならどんな願いだろうが叶えてやる』
「何?……どんな願いでも、だと?…………それは、実現不可能なことでもか?」
『そう言ったはずだが?…………ああ、この星を消せ。とか言うものはよしてくれよ?あまりそういうのは好きではないんだ』
「……………できるのか、そんなことが?」
『やろうと思えばな』
なるほど。
こいつの異常性が分かってきた。
つまりこいつは、《ランプの妖精》のようなものか。
願いは3つ。
たとえそれがどのようなものであれ叶えることができるということだ。
他の《O5》は口を出してこない、か……
なるほど、ならば………
「願いが決まったぞクラフター。……私がいや、我々人類が願うことは、1つ目《世界各地で収容違反を起こしているSCPの再収容》、2つ目《我々SCP財団のSCP収容施設が二度と収容違反を起こさないための収容施設の強化》、3つ目《我々《O5》以外のすべての人類から今日の事件が起きたことをなかったことにしろ》!!!!!!!!!!!!」
『ほう、…………なるほど…貴様らの願い、心得た。

I wish 私は願う…………

《世界各地で収容違反を起こしているＳＣＰの再収容》

Ｉ　ｗｉｓｈ　私は願う……

《我々ＳＣＰ財団のＳＣＰ収容施設が二度と収容違反を起こさないための収容施設の強化》

Ｉ　ｗｉｓｈ　私は願う……

《彼ら《Ｏ５》以外のすべての人類から今日の事件が起きたことをなかったことにしろ》』

世界が変わる。

いや、違う。

これは、世界が作り直されていっているのだ。

壁が修復される。

飛び散っていた肉片が集まり、人としての命を吹き返す。

あまりにも非現実的な光景がくりかえされる。

私には分からないがこの壁だって元の物質とはことなっているのだろう。

なるほど、……。

これがクラフター、……創造主と言う訳か……。

馬鹿げた能力だ。

だが、これでは納得するしかないだろう。

こいつは文字通り、創造主だ。

こんなものがいるとは思いもよらなかった。

『終わったぞ』

「……ああ、感謝する。……人類代表として」

『いや、礼には及ばんよ。君の願いだ。私の物ではないよ』

「だがそれを叶えてくれたのは、お前だ……クラフター……。感謝位は受け取ってくれ」

『……分かった。ならば、受け取っておこう』

ふふ……。

意外と謙虚なのだな、こいつは。

ふと時計を見る。

ここに来た時よりもだいぶ時間が進んでいた。

これは、……また研究者どもの資料が大量に回ってくるな。

しかし、今日あったことと比べれば些細なことか……。

# 第五話

＜ｓｉｄｅ　???＞

何かがおかしい。

その違和感に最初に気付いた時は、《例の物体》の報告書を作成していた時だった。

なぜなら私が《例の物体》、ＳＣＰ－■■■■の調査をしていた時間があまりにも長すぎたのだ。

そもそも財団の一部を除く研究員の常識として特定のＳＣＰと同じ空間に長居しない、という共通認識がある。

これは未だ異常性のはっきりしないＳＣＰと長時間居ることで我々の人体や精神に悪影響がないか、ということからこういう行動がとられている。

その為ＳＣＰ財団では未確認のオブジェクトを収容した際にＤクラス職員が同じ収容施設内に数時間滞在し危険性が低いことを確認する。

だからそれ以上の滞在は、自身を危険にさらすため時間内に収容施設内から出るように常に心がけている。

そして私もその一人であり今まで滞在時間を過ぎるようなことは一度もなかったのだ。

その私が、一時間も超過してしまっている。

ここだ、ここがおかしいのだ。

私はいつも、３０分前には施設内から出るというのに、一時間も遅れたのだ。

私はどうしてもそれが気になってしまい、他の収容施設でも同様の報告がないか調べた。

ありえない……。

まず浮かんだ言葉がそれだ。
世界各地の収容施設で起きた収容違反の報告。
ここもその一つだった。
世界の総人口が〝たった９０分のうちに五分の一にまで減少している〟のだ。
都市も破壊されたとある。
だが待て。
それならばつじつまが合わないのだ。
今破壊されていた都市は美しい夜景を描いている。
人口だって減ってない。
何かがあったのだ。
この《９０分間》に……。
そしてその何かは間違いなく《世界終焉シナリオ》さえ覆す力を持っている。
そういえば《ＳＣＰ＿■■■■》は、いつの間にか少しだけ開いていた。
初めは見落としかと思っていたが、もし何らかの関係性があったのならば……。
今すぐに調べなおさなくては。
それに、念のために《Ｏ５》にも報告を……。

――――――――――――――カツカツカツ

ん？

ああ、丁度いいところｎ――――――――――――

「すまないな。デゥーク博士」

――――――――――――――――――――パシャ――――――――――――――――――――

あれ……？

俺は一体、何をして……？

「おや、デゥーク博士。こんなところに何か用かい？」

「あ……クラスィーさん。……いあやぁ～、すいません。自分でも何でここにいるのかわからなくて」

「大丈夫かい？今日はもう一旦休んだほうがいいと思うぞ。君たち研究者の人間は気付かないうちに無茶をしやすいと聞く。他の者たちには私から言っておくから休みたまえ。研究者は体が資本だと君もよく言っていたじゃないか」

「あははは……。たしかにそうですね。……では、お言葉に甘えさせてもらいます」

「ああ、そうしたまえ」

はあぁぁぁぁ……。
やっぱり、クラスィーさんの言う通り疲れてたのかなぁ……？
早く帰って休もう。
うん、それがいいな。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

「すまないな。デゥーク博士」（ボソッ

# 第六話（改訂版／報告書回）

報告書

《ＳＣＰ＿■■■■》

《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ》

《特別収容プロトコル》

ＳＣＰ＿■■■■は元々《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｅｕｃｌｉｄ》に指定されていましたがその異常性が明らかになったためこのＳＣＰのオブジェクトクラスが変更されました。

財団側は、このＳＣＰ＿■■■■に関しての全ての資料を財団の最重要機密事項として扱い《Ｏ５》及び一部の《Ｌｅｖｅｌ＿５》のアクセス権限を所有する一部の職員にのみ情報が公開されます。

また、通常時にＳＣＰ＿■■■■に関わる際は《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｅｕｃｌｉｄ》として偽装し接触することを義務付けるものとします。

《説明》

ＳＣＰ＿■■■■は機械仕掛けの人型の物体です。

ＳＣＰ＿■■■■の体を構成している物質は不明であり、訂正前と物質は同じであることが判明しています。

このＳＣＰ＿■■■■は比較的友好的であることが分かっています。

このＳＣＰの異常性はその創造性にあり、たとえそれがどのようなものであれ叶えることができるということにあります。

《ＳＣＰ＿■■■■の記録抜粋》

［編集済み］年［編集済み］月［編集済み］日［編集済み］時［編集済み］分［編集済み］秒、世界各地にて大規模な収容違反《世界終焉シナリオ》が発生。

当時のデータベースの状況から、人類の約五分の四が死亡されたと推測されている。

［編集済み］年［編集済み］月［編集済み］日［編集済み］時［編集済み］分［編集済み］秒、ＳＣＰ＿■■■■が活動を開始。

［編集済み］の結果、同日の発生していた《世界終焉シナリオ》をなかったことにすることに成功した。

このことから財団側にとって《ＳＣＰ＿■■■■》の秘匿性は非常に今後の重要な課題の一つであるといえるだろう。

また、本オブジェクトは比較的調査に協力的であり今後ＳＣＰ＿■■■■＿１の内部の調査にも協力する趣旨を見せた。

その他にＳＣＰ＿■■■■／ＳＣＰ＿■■■■＿１の異常性として考えられていた周囲の物質に耐久性を付与するなどの異常性は存在せず、ＳＣＰ＿■■■■＿２の異常な耐久性は全てＳＣＰ＿■■■■本体によるものだということも判明した。

また、財団は今まで収容が非常に困難とされてきた《Ｏｂｊｅｃｔｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ》の安定した収容をＳＣＰ＿■■■■の下に実現した。

今は、ＳＣＰ＿■■■■を監視する人員を減らしその秘匿性を維持します。

今まで、ＳＣＰ＿■■■■の調査をしていた［編集済み］博士にクラスＡ記憶処理を施し引き続き調査させることで表面上のＳＣＰ文書を作成させます。

ＳＣＰ文書作成後再び［編集済み］博士に記憶処理を行ってください。

また、本ＳＣＰへのアクセス権限を持っていないものがアクセスを試みた場合速やかにクラスＡ記憶処理を行うかその場で終了してください。

# 第七話

＜ｓｉｄｅ???＞

あたり一面が白く、雪化粧をされている。
家に明かりが灯り中で何やら木に飾り付けをしているのだろうか、温かみのある笑い声が聞こえてくる。
それだけを見ればまるで一つの美しい絵画の世界のようにも見える。
それだけを見れば、だが……。

「ヒェ、ヒェヒェッ……ジングルベール、ジングルベール……。ヒェヒェヒェヒェヒェヒェヒェッ……！。ああ……ああッ‼……かわいい、かわいい子らに……素敵な、……ステキな……クリスマスヲ!!!!!!!!!!!!」

家を遠くから覗いている年老いた男。
なんとも、言っていることがまるで狂信者だ。
その姿も裸である。

少なくともまともな奴ではない。
家の中にいる子供が男を見つけそちらに指をさす。
男はその顔をにやけさせその様子を確認する。

「ああ!!かわいらしい子供よ!もうすぐ……もうすぐだ!!!私が!!!クリスマスの夜、君に素晴らしいプレゼントを君に送って見せよう!!!!!!!!」

そう言って男は消える。

まるで初めから、そこに何もいなかったかのように……。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

やあ、皆！

以前やけくそで何かをしていたらＳＣＰとかいうものに認定された奴。

そう、私だ。

いやマジで、何がどうしてそうなったのか知らないが気が付いたらＳＣＰ財団とか言うのに収容?保護?されてしまっていた。

そしてこの集団、ただのオカルト研究会みたいなやつじゃなくてガチモンのやべーやつを収容したりする組織らしい。

しかもこの組織世界中に収容施設を持っていて、どうやら俺みたいなよく分からないものがたくさんいるらしい。

そして、俺が思うにこの世界はオーバーロードの世界線とはまた別の世界であるということだ。

これは俺を担当している博士にいくつか質問して分かったことだ。

そしてまた話を戻すが、この世界では人間が主体となっている世界で俺のような人外は異常な存在であるらしい。

その為俺みたいな奴の総称をＳＣＰと呼び、それぞれクラスを分けしてできるだけ管理しているのだとか。
ちなみに俺自身も《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ》とかいうのを貰った。
このクラスについてその時博士と一緒にいたクラスィーさんという《Ｏ５》？の人に聞いてみるとどうやら簡単な話財団側の最重要機密に値するＳＣＰのことをそういっているのだとか。
なるほど……オーケー、分かった。（↑わかってない）
つまりあれだろ？要するに、一般の人に知られたらいけないってことだな‼（↑ＳＣＰ全般がそう）
まあその話は置いといて、そんな訳で俺は一部を除いて基本的に財団の職員の方の手伝いだとか雑用だとかをして過ごしてる。
ちなみにだが、この施設で仲良くなった奴もいる。
俺がこの世界で目覚めたときにいた、クラスィーさんとかＤ職員のＤ＿４６１５７さんとか俺の新しい担当の博士の人とかだ。
そして、この俺の財団での仕事は別に、手伝いや雑用だけじゃない。
俺以外のＳＣＰの調査だ。
話は変わるが、Ｄ＿４６１５７さんいつもこの仕事についてくるよな……。
俺の場合は、《ユグドラシル》のレベルＭＡＸでさらに装備もガチで作ったやつだから他のＳＣＰに対しても強気に出られるがこいつはただの人間に過ぎない。
勇気あるなぁ……。（↑無理やりやらされているだけ）
まあ、話を戻そう。
そんな訳で今回財団側が依頼してきたことが、《ＳＣＰ＿４６６６／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ／冬至祭の男》が確認されたからこいつを捕獲してくれ、って言われたんだけど……。
《冬至祭の男》……？
冬至祭って言ったらクリスマスだよな……。

で、そのクリスマスの男を捕まえろってことだから……。
なるほど!!つまりこれは、

サンタさんを捕獲しろということなのか!!!!!!!!（↑全く違う）

なるほど、なるほど、なるほど、……。
今回の任務は、なかなか夢があっていいじゃないか!!
よし、分かった!!
すぐに準備しよう！
ん？
くれぐれも慎重に？
了解で、ありますッ!!
必ずや、サンタさんを捕まえて見せるであります!!

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第八話

＜ｓｉｄｅ　α部隊隊長＞

雪が降る夜の冬空の下、ヘリの羽音だけが耳に入ってくる。
ＳＣＰ捕獲作戦の為の降下地点につくまでの間誰も何も話さない。
普段なら、それなりに会話を交えるというのに……。
それもそのはずだ。
俺の横に座っているこいつは表向きは、《Ｅｕｃｌｉｄ　ｃｌａｓｓ》のＳＣＰだ。

《ＳＣＰ＿■■■■／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ／通称：機械仕掛けの創造主》

正直言って、こいつの正式なオブジェクトクラスを知らないのは俺の反対側に座っている《Ｄ＿４６１５７》だけだ。
《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ》……それはつまり財団側の切り札となり得る程の力を持つ存在だということだ。
他のメンバーもそのせいで緊張を隠しきれていない。
普通なら、何か冗談でも言ってやって緊張をほぐしてやればいいのだが残念ながらそれもできそうにない。
このＳＣＰだけのせいではないだろう。
他の隊員が緊張している主な理由は、《今回捕獲しなければいけないＳＣＰが、財団側にとってもこいつを使ってでも捕まえようとしている》ということだ。

ここから考えられることは一つ。
つまり今回の俺達の相手がほぼ間違いなく《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｋｅｔｅｒ》であるということだ。
そして実際に作戦の説明前に配られた資料には実際に《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｋｅｔｅｒ》の文字があった。

《ＳＣＰ｜４６６６／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｋｅｔｅｒ／通称：冬至祭（ユールマン）の男》

財団が随分と前に発見したＳＣＰで、どうやら数世紀も前から生きているのだとか。
そして、クリスマスプレゼントとして被害者の肉親の体のパーツを使ったものを送るのだとか。
はっきり言って一生関わりを持ちたくない相手である。
そして、ここで既に知っているかもしれないが改めて言っておきたいことがある。

《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｋｅｔｅｒ》って、人間の力じゃどうにもならないから《Ｋｅｔｅｒ》なんだぜ？

それを、一個大隊どころか一個小隊で捕獲？
正直に言ってただの自殺行為でしかないと思っている。
実際にこの目で確かめたわけではないのではっきりと言いづらいが、《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｔｈａｕｍｉｅｌ》がいたところでなんになると言いたい所である。
しかしながら俺は、財団所属のエージェント。
要するに兵士だ。
上からの命令には応じなければならない。
それが兵士の役割であり義務だ。
他の隊員もそれを分かっているから何も言わない。
しかし、余りに過ぎた緊張は作戦進行の妨げになる。
今のうちに、何か冗談でｍ――――――――――
『どうした、ひどい顔をしているぞ？大丈夫か？……何処か具合でも悪いのなら言ってみろ』
「い、いや。……今回の任務で少し……な」
こいつも気を使ってくれているのかいきなり話しかけてきた。
しかしまあ、部隊員の前で緊張していたか……俺も隊長としてまだまだのようだ。
『今回の任務、か……。なに、そんなに悩む話ではないだろう？要するに今回の作戦は《サンタさんを捕まえろ》という話だ。夢があっていいと思うのだがな……』
は？こいつは何を言っている？
サンタを捕まえる？
……。
ああ、そういうことか。
「なるほどな。つまりよそ様の家に不法侵入しようとする不届き物の

サンタを捕まえようと言う訳か。確かに夢があるかは知らんが文面にして見れば中々滑稽ではあるな……。なら、今回の任務はその不法侵入者をしょっ引くって訳か……」

「なるほどなるほど、確かにそれはいただけませんね。だってサンタさんは、家にいるお父さんの特権ですから。そうなるとそんな奴とっとと捕まえてやりましょう!!」

「お前等……まあ、確かにその《サンタさん》とやらはどうやらかなりの《悪さ》をするらしいからな。しょっ引くには、十分な理由だな」

他の隊員が先ほどと打って変わって面白そうに話しだす。

ああ、してやられたよ。

本当ならば俺がしなければいけないことを代わりにこいつがしてくれた。

だが感謝しよう。

こいつのおかげで今回の作戦の士気は幾分か上がったはずだ。

これなら作戦遂行にも問題はないだろう。

【こちらパイロット。α部隊並びに《ゲスト1／2》後3分ほどで降下地点に到着する。オーヴァー】

「こちらα部隊リーダー。パイロット、了解。降下準備を始める。オーヴァー。……聞こえたな！もうすぐ降下開始だ！各隊員、気を引き締めろ!!ここからが正念場だぞ!!!」

さあ、作戦開始と行こうじゃないか。

待って居ろ、《サンタさん》とやら。

こちらの士気は十分だぞ？

＜side　out＞

# 第九話

＜side　D＿46157＞

「……3……2……1……降下開始！」

ヘリから何本かのロープが落とされ武装した男達とロボットのような何かが降りてくる。

降りてきた男達は皆夜の闇に溶け込んでいるが、そのロボットだけは僅かに鈍い光を反射していた。

「D＿46157先行しろ。ターゲットの確認された家までのルートは作戦内容通りでいい。覚えているな？……ウィップソンお前は予定通り別ルートから狙撃位置につけ。各隊員行動開始」

「「「了解」」」

ああ、始まったな。

まあ、いつものことだ。

俺はいつも通り先行して安全の確認をしていればいい。

暗視ゴーグルをつけているから夜の森特有の暗さと足場の悪さについては何とかなる。

俺だって何度もこういう事をしていれば嫌でも足場の良し悪しはわかってくるというものだ。

初めてのころはひどかったがな……。

今回のルートは目的地から少し離れた森に降下しターゲットがいると予想される家の裏口から家に侵入するというもの。

付近の住宅は財団側がごく普通を装って付近には目的の家の住人以外誰もいない。

だからもし戦闘が起こるようなことがあってもその家族以外でそれを知るのは財団側の奴だけだろう。
それにもし戦闘が起こるようなことがあったとしてもこいつが何とかしてくれるだろうしな。
確かこいつは《ＳＣＰ－■■■■／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ－Ｅｕｃｌｉｄ／通称：星の願いを》だったはずだ。
何が《星の願いを》なのかは知らないが《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ－Ｅｕｃｌｉｄ》ということはそれなりの異常性を持っているということと考えていいだろう。
だが俺はこいつと関わって以来今までのような命の危険が伴うような仕事は極端に減ったと言っていいだろう。
まあ、その命の危険が伴うような仕事というのも今回のようなこいつとＳＣＰの調査や捕獲の任務といった内容しかない。
まあ、心当たりはある。
それはこいつとのＳＣＰの調査の際俺が他のＳＣＰに殺されたのをこいつが生き返らせてくれたことが原因だと思う。
まあ、逆にそれしかないのだろうが……。
と、言った理由かはさておきそれから俺はあまり命の危険が伴う実験とかは無くなった。
それからというもの俺の任務は《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ－Ｓａｆｅ》かこいつ関連の物になったと言う訳だ。
そういう訳でよくこいつと一緒に行動している俺だが今日のこいつはいつもと少し違って見える。
何というか何処かをしきりに見ている？
いや、確認しているのか？
しかし、一体何を……？
「……おい、《ゲスト１》何をしている？」
『む？……ああ、すまない。いやなに、今回の目的地の家から奇妙な反応が出たのでな。……どうも人ではないようだが、この様な反応を私は知らん』
どうやら俺と同じ疑問をα部隊の隊長も抱いていたようだ。

こいつが言うには、どうやら目的地の反応を探っていると先ほどからいきなり妙な反応がかえってきたらしい。
おいおい、それってまさか……。
「おいおい……マジかよ。そういうのは早くいってくれ。……こちらα部隊リーダー、ウィップソン狙撃位置にはもうついているか？オーヴァー」
［α部隊リーダー。こちらウィップソン。既に狙撃位置についてます。オーヴァー］
［ウィップソン、家の中を覗けるか？オーヴァー］
［α部隊リーダー、暗視スコープをつけて確認していますが特に変化なしです。オーヴァー］
［こちらα部隊リーダー。ウィップソン、そのまま監視を続けろ。オーヴァー］
［こちらウィップソン。了解。監視を続けます。オーヴァー］
「中の状況が確認できないな……どうしたものか……」
クソッ!!
家の外からわからないのか！
ん？
待てよ、……何か引っかかる。
……。
そうか‼そういう事か!!!
「おい、α部隊の隊長さん!!今ので中の状況が分かった!!」
「は？何を言っている、D＿４６１５７。今ウィップソンが変化なしといっただろう？」
「違う！おかしいんだ。だって今日はクリスマスイブだぜ!?普通は家の明かりは何処かしらついているはずだ!!それなのに暗視スコープを使わなきゃならねえってのは家の明かりが消えてるってことだろ!?」
「!!なるほど……確かにそうだ。……ウィップソン。こちらα部隊リーダー目的地の家に明かりは灯っているか!?オーヴァー！」
［α部隊リーダー。こちらウィップソン。いいえ、明かりは確認で

きません。オーヴァー」
「やはりそういう事ｋ――」
『話の途中で失礼。どうやら悠長に話している時間はなさそうだ。……何やら《サンタさん》が家の住人を一か所に集めようとしている。どうやら《儀式》とやらを始めるつもりだぞ』
「――ッ!!!!」
まずい、想定していた時間より大分《儀式》を始めるのが早い。
　このままでは奴に逃げられてしまう可能性がある。
「《ゲスト1》今すぐに目的地まで行き《ターゲット》を捕まえろ!!できるか!?」
『勿論だとも。……《転移門(ゲート)》。大丈夫だ。後からついてこい』
　α部隊の隊長が指示を出すとそう言って奴はそのまま闇の中に消えていった。
　それあるんなら初めから使えよ…………。
　まぁ、奴のことだし何かしらの条件でもあったのだろうが…………。
　そう思い俺も奴の後に続く。
　その先で俺が見たのは、――

――――椅子に縛られたままの住人と今回のターゲット《ＳＣＰ―４６６６》、そして家に大穴を開けそいつを全力で殴り飛ばしたであろう《ＳＣＰ―[redacted]》の姿があった。

いやまて、今の数秒の間に何があった!?!?

<side out>

# 第十話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

今回の任務はサンタさんの捕獲だと思っていた。
そう、サンタさんだ。
あのふくよかなお腹。
蓄えられた真っ白な髭。
あの特徴的な赤い服。
そして、忌々しい当たりが出ない限定ガチャ。
きっとまず皆がサンタと聞いて思いつくのはそう言ったものだろう。
俺も実際見るまではそう思っていた。
それがどうだ。
やせ細った体。
髭は存在せずあるのは青白い肌と黄ばんだ不気味な牙。
腐った人の血であろう体にこびりついた形容しがたい何か。
そして、そんな奴が嬉々として人を椅子に括り付けている。
正直に言って嫌悪感しかない。
きっとそれは、俺のカルマ値が善よりなのもあるだろうがそれだけではないだろう。

俺は、まだ人の心を捨てきっちゃいない。
確かに俺の体は既に人ではなくなっている。
それどころか機械だ。
だがしかし、だからと言って人の心を捨ててていい理由にはならない。
まあ、ここまで長々といったわけだがつまり俺が何をしたかというと、だ。

――先ずは殴ろう。問題はその後だ。――

そう、【ＡＯＧ】の脳金教師こと《やまいこ》さん流すべてを解決する魔法の方程式を使ったわけである。
効果は覿面。
相手は行動不可能になる。
……はずだったのだが……。
「ヒェヒェヒェヒェヒェヒェヒェ」
何とこいつまだ立ち上がりやがる。

先ほど殴った感覚では、相当堅かった。
だが相手を見たところレベルが高いのではなく、ただ単に防御力が高いだけのようである。
要するにあれだ。
防御力に極振りしたような奴だ。
正直言って面倒くさい……。
まあ、レベルの差からまず負けることはないだろうし他の者を巻き込むような戦闘になることもないだろうが……防御力が下手に高いせいで簡単に倒すこともできないときた。
はあ……。
まあ、あとは流れ作業だなぁ……これは。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　α部隊隊長＞

今、俺達の目の前で起こっている戦闘。
いや、戦闘と言っていいのかすらわからない。

これがＳＣＰ同士の戦いだとでもいうのか……。
今回のターゲットであった《ＳＣＰ－４６６６》がその相手に襲い掛かる。
その攻撃は僅かに掠っただけでさえ車がひしゃげるほどの威力を持っている。
しかし、奴の相手をしている《ＳＣＰ－■■■■》もまた同程度の威力を持っているだろう。
しかも《ＳＣＰ－■■■■》に限ってはこちらに攻撃の余波がこないように立ちまわっているようだ。
それでいて、余裕のある態度を崩さない。

これが《Ｔｈａｕｍｉｅｌ》か……。

なるほど、ようやく理解した。
《Ｋｅｔｅｒ》が人間じゃどうにもならないものだとすれば、《Ｔｈａｕｍｉｅｌ》はそれすらも赤子のようにあしらうことのできるバケモノだったって訳か……。
唯一救いがあるとすればそれは、《Ｔｈａｕｍｉｅｌ》が人間側についていてくれることだろう。
もしこんな奴が敵だったとしたら……。
いや、それを考えるのはやめておこう。
それよりももう終わりごろか……。
《ＳＣＰ－４６６６》に関しては《ＳＣＰ－■■■■》が既に制圧済みだ。
後は、俺達財団のエージェントの仕事だ。
［Ｃｐ、こちらα部隊。ターゲットの制圧に成功。至急収容の為の輸送部隊隠蔽工作員の手配を。オーヴァー］
［こちらＣｐ。α部隊、了解した。既にそちらに送っている。お前達α部隊は、ターゲットを引き渡したのち《ＳＣＰ－■■■■》と共に帰還せよ。オーヴァー］
［Ｃｐ。こちらα部隊、了解した。直ちに引き渡し作業に入る。

オーヴァー」
ああ、ようやくこの作戦も終わりを迎える。
最初こそ絶望ではあったが、終わってみれば案外あっさり終わったものだ。
まあ、ほとんどこいつのおかげではあるんだろうが。
本当に有難いよ、全く。

＜side out＞

# 第十一話

＜side　???＞

《SCP_■■■■_1》の内部の調査。

それは、その建造物の主《SCP_■■■■》の協力の下行われた。

私は、この調査前このSCPの異常性に勝るものなどないと考えていた。

きっと私でなくともそう思ってしまうはずだ。

今回の調査においても結果的にはこのSCP_■■■■の方が異常であるということになるが、それでも我々はSCP_■■■■を過小評価してしまっていたようだ……。

……そう、もっと早くに気付いておくべきだったのかもしれない。

この《SCP_■■■■_1》はSCP_■■■■の拠点だと本人も言っていたではないか……。

まさか、あんなものを見ることになろうとは……。

＜side　out＞

＜side　クラフター＞

「では、只今より今回の《ＳＣＰ＿■■■■＿１》の内部調査における目的ｎ――――――――

やあ皆‼

今回はどうやら俺が拠点にしていた《Ｃｒｆｔｅｒｓ　ｏｆ　Ｓａｎｃｔｕａｒｙ》を案内することになったクラフターだ。

フフッ……そうだ。

ついに来たのだこの時が。

我らが作り上げた拠点の本当の姿を見せる時がッ!!

まあ、彼らが前回来たときは俺を回収しただけのようで拠点の方には深く調査をしていないとのことだった。

要するに何が言いたいかというと、まだまだ見せてないギミックや部屋があるから見てくれよ、的な感じだ。

しかも《Ｃｒｆｔｅｒｓ　ｏｆ　Ｓａｎｃｔｕａｒｙ》は、俺だけの作品ではなく当時同じギルドにいた皆で作った作品だ。

しかしながら、俺らの拠点は早々荒らされることなどなかった。

その為、実はまだギルドメンバー以外にこの拠点の本当の姿を知っているものは【ＡＯＧ】の最後まで残っていた数人だけだった。

正直に言ってこの作品をこんな少人数の人にしか見せれなかったのはものすごく後悔している。

だからこの機会に少しでも多くの者に知ってもらいたいのだ。

ん？

ちゃんと話は聞いてますよ？

え？もう行くの？

アッハイ。

――――――――調査隊移動中――――――――

まあ、と言う訳で到着しました。
どうやらここが俺が回収された場所らしいです。
……《鍵の間》かぁ……。
あれ？俺こんなところに居たの？
霊廟の方だと思っていたのだが……。
何かの間違いだったのかもしれん。
まあ、別にそこまで問題があるわけでもないしそこまで問題はないか。
……ああ、でもそっかぁ。
普通の人間なら霊廟までたどり着けるわけないもんな……。
ああ、因みに《鍵の間》というのは1～66の扉があって1から順番にしか基本は開かないように設定されている。
イメージとしては、ハリーポッ○ーの神秘部に近い感じだ。
そして66個の部屋に隠されている暗号を解読したものをこの部屋の中央にある基盤に打ち込めば俺たちの本当の拠点に転送されるという仕組みだ。
因みにだが、この扉一つ一つの向こう側にはギルドメンバーがそれぞれ作った世界が広がっていて狭いものでも縦横がキロ単位である。
酷いものはさらに大きく、しかもその扉を担当した人がつくったストーリーをクリアせねば暗号が手に入らないのである。
まあ、死亡エンドは無かったが……。
しかも質の悪いことに、すべての扉を開いていないとたとえ正しい言葉を基盤に打ち込んだとしても開かないようになっている。
それどころか一度間違えれば全てがリセットされるというおまけ

つきである。
ただしギルメンは専用のアイテムで行き来が自由であったが……。
さてさて、それではこの度の調査隊の皆様。

ようこそ……私が創った最高傑作の世界へ……。

＜side　out＞

# 第十二話

＜ｓｉｄｅ　調査隊＞

俺達はとある任務を遂行していた。

そう、《ＳＣＰ＿■■■■＿１》内部の調査だ。

今回の任務はこの建造物の主である《ＳＣＰ＿■■■■》の協力もあることから簡単な任務になると考えていた。

だってそうだろう？

既に《ＳＣＰ＿■■■■＿１》内部の調査は、α部隊の連中が一度探索した後だ。

《ＳＣＰ＿■■■■》から聞かされる内容も多少は違うだろうが大体は変わらないと考えていた。

だが、……

『鍵の間か……』

鍵の間？

この部屋の名前か？

「おい、《ＳＣＰ＿■■■■》……その《鍵の間》とは何だ？この部屋とどういう関係がある？」

『……ああ、そうか。お前たちは知らないよな……。鍵の間というのはある意味では、俺たちの拠点とする世界への入り口といったようなものだ。また、そこに行くにはこの部屋にある６６個の扉をくぐりその先で暗号のカギを見つけなければならない。しかも暗号を解くには全ての扉をクリアしなければならないし、一度でも間違えば一から全てやり直しだ。……まあ、私は例外ではあるがね……』

……。

どういうことだ……？

さっぱりわからん。

そんな俺達を見越したのか奴も簡単に説明してきた。
『まあ要するにだ、この部屋にある扉を全てクリアしないと次にいけないと言う訳だ』
「ああ、なるほど……。」
ようやくこいつの言っていることが少し分かってきた。
つまりこの施設自体はこいつにとっての玄関ということか。
だがそうなるとここは確かに重要な施設ではあるが、それでも玄関以上の役割を果たすことはない。
それはつまりここよりも遥かに重要な施設があると言っているようなものだ。
そしてそれは直ぐにやってきた。
『……ようこそ、私が創った最高傑作の世界へ……』
そう言って奴は基盤を操作する。
すると今まで立っていた薄暗い部屋の中にあった謎の柱が動き出す。
その間には、謎の光がたまっていて奴はその中に我々を促し入っていく。
そこで我々が見たものは、――――――――

――――――――――――――――――――――――あまりにも大きい巨木と何千もあるその枝の一つ一つに繋がる《世界》であった。

『どうだ?すごいだろう。私が、……いや我々が創った最高傑作の世界は……』

な、な、んだ……これ。
あり得るわけがない……こんな事が。
いや、これもこいつがしたことか……。
何という、何という……。

こんなものが、今まで見つかっていなかったのか……？
ああ、そうかこいつがいなければここに来ることは困難だったな……。
そんなことを思っていると奴が話しかけてきた。
『世界はたった一週間で作られた、というのは知っているか？』
「……ああ、確か何かの神話にそんなものがあったな」
『そう、それだ。私は世界とはそれ個人またはそれ等集団によって創られる芸術作品の一つだと思っている。それをたった一週間で創り上げる？……正直に言おう。やろうと思えばできるだろう……。だがそれで満足するなど馬鹿げている。そんなものでは最高傑作など程遠い。だから我等はこの世界に6年の歳月をかけた。それだけやらねば最高傑作などできる訳もないからな……』
「……」
マジ、かよ……。
創世の期間は七日間というのは聞いたことがある話だ。
それを6年だと？
こいつの今話したことが真実だと――――いや、真実なのだろう。
ということはつまり世界を七日間で創り上げることのできる存在が6年もかけて創ったということになる。
そう、6年だ。
世界を創る期間に6年でさえ短いように思うが、相手はたったの一週間で今我々が住んでいる世界を創造できるようなバケモノだ。
そんなバケモノが6年もかけて創ったなど正直俺達には到底理解できない。
いや、待てよ……。
そう言えば奴は今何と言った？
「なあ、《ＳＣＰ＿■■■■》……一つ聞きたいことがある……。お前、……今《我々》と言ったか？」
『ああ、確かに言ったぞ。《我々》とな……。言っておくがもうここには私しか残っていないぞ？』
ああ、……クソッたれがッ!!

やはり聞き間違いじゃなかった。
奴は確かに《我々》と言っていた。
こいつ以外にも同じような奴がいるってことかよ!?
いやしかし奴しか残っていない……ん？
「ちょっと待て……。お前しか残っていないとはどういうことだ？一体何があった？」
『……まあ、その話をするにはここでは物足りない……。場所を移すぞ』
「……場所を移すってどこに――――は？」
一瞬の出来事で何が起こったのか分からないが、奴は文字通り《場所を移した》らしい。
ここから奥に行ったところに玉座らしきものが見える。
どうやらここは玉座の間のようだ。
そして最も異様なことにそこには人間、怪物を問わずにその全てが玉座への通り道の脇に避け平伏している光景だ。
その中を奴は堂々と、まるでそれが当然のごとく歩いていく。
そして奴は玉座にたどり着き、
『諸君……。永らくの間私の帰還を待って居てくれたようで感謝する。皆、色々と私に聞きたいことがあると思う……。だがそれは後にしてくれ。……今、私が連れてきた彼等が気になる者もいるだろう……。故に私から彼らのことを紹介させてもらう。彼らはＳＣＰ財団という組織の者たちだ。彼等は、封印されていた私を解放してくれた恩人たちである。決して粗相の無い様、丁重にもてなせ。また私に何か質問がある者は統括のリアンダに伝えてくれ。……すまないな、リアンダ……頼まれてくれるか？』
『はっ！その命、このリアンダが承りました』
奴は何か、部下のようなものに指示を出す。
こちらのことを気遣ったのかは分からないが、こちらに危害が加わらないようにしていた。
だが今この中で注目の的になっている俺達は正直、たまったものじゃない。

いや、危害が加わらないだけましなのだろうが……。
『では、貴殿ら……。ここで立ち話するよりもまずは食事と行こうじゃないか……。どうかな？』
俺としてはこんな地獄早く終わってほしい。
俺は特段、信じているわけでもない神様ってやつにはじめてそうねがった。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第十三話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

ＮＰＣ達に指示を出した後俺は調査隊の者達を食事に招待した。
正直、彼等にとってずっとＮＰＣ達といるのはさすがにきついと考えたからだ。
俺が居たギルドではカルマ値はどちらかに偏るなどということはなく、また妙な趣味嗜好を持ったキャラもいない。
……居なかったはずだ。
だが、総じて彼らに共通して言えることは皆人よりもはるかに強いということだ。
まあ、一部の例外はいるが……。
そんな空間に長居するのは彼等だってきついだろうし俺だってきつい。
今この世界でようやく彼らが生きていると実感できたが一部の涙ぐんでいる奴とか実際に泣いてるやつを見ると何というか、こう……心が痛む……。
今になって思うと《ユグドラシル》時代にはよく気にかけていたのにこっち側の世界に来てから今まで一度も会いに来ていない。
正直に言って彼らに嫌われていたらどうしよう、と考えてしまう。
だって今まで頻繁にここを訪ねてきていた最後の一人がいきなり来なくなってしまったらどういう風に思われるか分からない。
しかし、しかし先程ここに案内されるときにそれとなく聞いてみたところ嫌われているというよりもむしろ喜んでいるようだった。
しかもそこで俺は衝撃の事実を知る。
なんと俺は死んでしまったと思われていたようだ。
どうやら俺が霊廟に入っていくのを宝物庫の番人が見ていたらし

く動くことができるようになって急いで霊廟の中を確認したところ他のギルメンの棺に混じって俺の棺まで見つけてしまったという。
そのせいで俺が死んでしまったということになったらしい。
まあ、確かに俺の分の棺はあるよ。
だって俺の分だけないってなんか寂しいじゃん。
だからまあ、一応自分の分も作っておいただけなのだが。
……おい、調査隊の諸君……そんな有り得ないものでも見るような眼はやめたまえ。
その眼差しは私に効く。
ちょっとした出来心だったんだ。
……さあ、気まずい空気は置いておいて食事と行こうじゃないか。
《ユグドラシル》の食材を使った最高級の料理だ。
……ん？
私がどうやって食事を楽しむかって？
あ、違う？
他の者はどうしたって？
あ～……。
非っっ常に言いづらい話だが……残念ながら最後に残った……いや、最後まで残ることができたのは私一人だけだった。
まあ、時代の流れってやつかな。
一時期は物凄い？栄していたここも時の流れには逆らえなかった。
そして段々と人数が減っていき気付けば俺一人になっちまったのさ。
まあ、よくある話さ。
特段変わったことなんて何もねぇ。
……おい、どうした？
泣くなよ、……こんなのお前にとっちゃ他人ごとにすぎないだろ？
……お前、いいやつなんだな。
まあ、また後でまた案内してやるよ……生憎とここは広すぎることだしな。

<side out>

# 第十四話

＜ｓｉｄｅ　クラスィー＞

張り詰めた空気の中薄暗い部屋の中に幾人か椅子に座っている者たちがいる。

彼らの手元には紙媒体で作られた資料があり今いるものがその内容に目を通していた。

そして部屋の扉が開き彼らの仲間であろう者たちが席に着く。

「……全員、揃ったようだな。……では、これよりＯ５定例会議を始める。」

「今回の議題は今のところ唯一の特例として《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ》として認められることとなったＳＣＰ＿■■■■についてです」

「……１０、私は正直に言って自己意識を持つ現実改変の能力を持つＳＣｉＰに対して《Ｔｈａｕｍｉｅｌ》のクラスをつけることにまだ疑問を捨て去れないのだが……？」

「０４、そのことについては報告書にあると通りだ。《創造主》が我々に友好であることも君は知っているだろう？それに《創造主》自身も己の持っている能力がどのようなものか理解している」

Ｏ４と呼ばれる男の質問にそう答える。

まあ、彼が言いたいことも分からなくもない。

現実改変型のＳＣｉＰとしてよく例に持ち出される《小さな魔女》のように自分の力に対して探求心を持つことを彼は危惧しているのだろう。

しかしＳＣＰ＿■■■■はそう言ったことに関心が無いというとまでは言わないが己の力を理解していて自分の興味本位でそういった行動を起こすことはない。

あくまでこちら側を立て厳重な監視と許可の下の実験という名目で奴は己の力を確かめることがある。

それもこの世界ではなく以前奴が案内したＳＣＰ＿■■■■＿１

の世界で、だ。
　つまり奴はこの世界に害が出ないような立ち回りをしている。
「１０、では少し質問を変えるが……もし《創造主》が我々の敵になった際被害はどの程度になる？」
「Ｏ１、軽く見積もった結果でも《Ｋ＿ｃｌａｓｓシナリオ》は確実であると……」
「ふむ……対抗策は？」
「現段階の人類ではどうすることも……正直に言いますと《創造主》がもし我々に対して好意を最初から持っていなければ我々の文明はすでに崩壊していたでしょう」
　これは実際に有り得た可能性だ。
　もしもＳＣＰ＿■■■■が我々に好意を持っていなければ、もし我々の行動理念を理解し納得しなければ、それだけで我々は滅んでいただろう。
　ある意味では全てがこの上ない奇跡なのだ。
「だが奴は既に《ＣＫ＿ｃｌａｓｓシナリオ》を起こしているが？」
「Ｏ９、あの件に関しての全責任は私にある。私が奴にそう頼んだからだ」
「いや、１０それは違う。あのタイミングでの収容違反を予測しきれなかった我々全員の責任だ。……今後は今回の主犯、《蛇の手》の捜索をより強固なものにせねばならん」
「Ｏ１、……確かにそうですね」
　だが、本当はこんなことは考えるのもダメなのだろうが《蛇の手》の連中が攻撃してきたのがあのタイミングで本当に良かったと今では思う。
　もしもあの時ＳＣＰ＿■■■■がまだ未発見のままだったら確実に財団は大打撃を被っていた。
「しかしながら、《創造主》のおかげで我々人類が助かったのもまた事実だ。今後は１０、君が《創造主》の担当権限を正式に引き継いでくれ。我々の中で君が一番奴と接触しているだろう？」
「ええ、了解しました」

ふむ、……。
やはり私がＳＣＰ＿■■■■の担当になったか……。
まあ、《Ｏ５》のメンバーの中でも私が奴に一番多く関係したことがある……妥当な判断といったところか……。
「うむ、また何かあれば我々に報告してくれ。……では次に他の組織にＳＣＰ＿■■■■の存在を説明するかどうかについてだ」
他の組織というのは《ＧＯＣ》世界オカルト連合のことだ。
彼らも今回の収容違反を察知していただろう。
そして当然ながらその収容違反を抑え込んだことも……。
「Ｏ１、カバーストーリーではだめなのですか？もしくは偽装された報告書でもいいとは思いますが……」
「Ｏ７、確かに君の言うとおりだ。しかし、彼らの理念はＳＣＰの破壊が大本だ。今回は建前でなく本音を言わねば彼らも納得しないだろう……」
「Ｏ１、今回の件については共有するべきかと……。彼等《１０８評議会》もこちら側の最重要機密である情報は今までも責任をもって取り扱われています。もし今後彼等との共同作戦の際ＳＣＰ＿■■■■を使用する際のことを考えれば共有しておいた方が彼らの理解も深まるかと」
「……では大まかな概要だけを伝えるという事にしたらどうだ？彼等もまた優秀だ。こちらの言わんとすることは理解してくれるだろう」
「Ｏ２、有難う。では諸君、今回は大まかな概要だけを彼らに伝えるということで良いな？」
賛成の意を表する。
まあ、そこが妥当なところではあるだろう。
しかし今後の問題を考えると例の教会の動向も気になってくる……。
……後で部下に指示を出しておこう。

<side out>

# 第十五話

＜side　クラフター＞

何もない真っ白な部屋に入る。
その部屋はとてつもないほどに広く天井も高い。
上の方に一部だけガラス張りにされていてそこから幾人かの研究者がこちらを覗いている。
……。
まあ、実験の時はいつもこんな感じだけどな……。
でもいつもと違うのは今日の実験が財団の施設で行われることと、今回の実験が俺のヒューム値？というのを図るためらしく俺が使う魔法がこの世界に来て初めて使った魔法《Wish（星）Upon（に）a（願）Star（い）》を使うように頼まれていることくらいだ。
どうやらあの魔法はこの世界では現実改変能力として認知されているらしくその強さを示す値が先ほど言ったヒューム値というものらしい。
……まあ、ぶっちゃけて言うと普通ならこんな実験やらないんだろうけど俺にはあまり関係ないんだよなぁ。
なぜかって言うと俺が所有してる《ヘカテの指輪》って言うワールドアイテムのおかげだ。
ワールドアイテムと言っても《ユグドラシル》の最初のアップデートが来るまでは正直ネタ枠だったアイテムだ。
というのもこのアイテムの効果があらゆる魔法の全てのデメリットを無効化するといった能力なのだが、アップデートが来るまでは精々クールタイムの無効化位の効果しかなかった。
これだけ聞くと強いかのように聞こえるだろうが当時はまだ超位

階魔法なんてまだ実装されてなかったし実際に使ってみると単一の魔法ばかり使っているとすぐに対策してこられるため他の魔法を回しながら使う方がハッキリ言って強いのだ。
だが、そんな話もアップデートが来ると一変した。
初めてのアップデートで超位階魔法というのもが追加されたからだ。
今までとは一線を画すほどの高威力、広範囲攻撃が可能となった。
しかしながら、超位階魔法にも弱点が存在していた。
クールタイムの長さと一部の経験値消費があることだ。
このことから超位階魔法はロマン砲の地位を確立していった。
しかし、この《ヘカテの指輪》の効果は〝あらゆる魔法の全てのデメリットを無効化する〟と言ったものだ。
そして当然のことながらそれは超位階魔法にも当てはまる。
そしてこの指輪の一番の特徴は所有することで能力が発揮される。
そう、つまりは別に身につけなくてもいいのだ。
このことから指輪の持ち主が指輪の効果を使わない限り誰かわからなかったのだ。
そして俺はそれを見越してそれを隠し持っていた!!(←テキトーにしまって忘れてただけ)
断じて持っていたことを忘れていたとかそんな理由ではない!!!!(←嘘です)
……まあ、色々言ったが要するにこの世界で経験値が稼げないとかそんな心配はないということだ。
そんなことよりも俺にとって意外なのは名前は違うものの《Ｗｉｓｈ　Ｕｐｏｎ　ａ　Ｓｔａｒ》を使える奴がいることの方に驚いている。
でなければヒューム値などというものは確立されないだろう。
しかも、博士の話を聞いている限りどうやら《Ｗｉｓｈ　Ｕｐｏｎ　ａ　Ｓｔａｒ》の能力をポンポン使うことができるようだ。
……それってやばいことなんじゃ……。
……。

まあ、その話は聞かなかったにしておこう……。
さあ博士、それじゃあ実験を始めようじゃないか!!!

＜side　out＞

＜side　???博士＞

今回の実験はSCP_■■■■のヒューム値の測定であった。
SCP_■■■■は大規模な現実改変能力を有していると考えられていることから今回の実験では今まで測定されてきたデータで最高かそれに並ぶほどの値が出ると考えられていた。
その為今回は大掛かりな作業が必要になる測定器を使うため人員もいつもよりはるかに多く用意された。
されたのだが……。
……おかしい。
奴が部屋に入ってから測定を開始しているがヒューム値は一定、その値も1／1を指したままだ。
奴は現実改変能力を有しているはず……なら、この値は有り得ない。
だがしかしそこで一旦考えるのをやめ、SCP_■■■■に実験の開始を告げる。
内容としては食べかけのリンゴを元に戻すといったようなもの。
「……は？」
「む、どうした？」
そこで実験に参加していた一人が変な声を発する。
確か彼は計測器を確認していた者だ。
何か変化があったのかもしれない。
そして私もその機器をのぞき込んだ。

「……は？」
そして私はそこで有り得ないものを見た。

ヒューム値１／１５００

……何が、起きた……？
先程までは確かに１／１だったはずだ。
それにヒューム値１／１５００だと？
何が過去最高に並ぶ、だ。
そんなもん蟻同然だ。
……はやく、はやく《Ｏ５》に報告せねば……。
どうやってヒューム値を抑えていたのかも気になるがまずはこの結果を知らせることが優先だろう。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第十六話（追加報告／報告書回）

［警告：Ｃｌｅａｒａｎｃｅ　ｌｅｖｅｌ　５以上の者のみ以下を閲覧可能］

ＳＹＳＴＥＭ　ＭＥＳＳＡＧＥ：　セキュリティ違反が検出されました。即座にログアウトしてください。

《報告書》

アイテム番号：ＳＣＰ_■■■■

《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ_Ｔｈａｕｍｉｅｌ》

ＳＣＰ_■■■■は我々ＳＣＰ財団に対して非常に友好的です。

ＳＣＰ_■■■■は人型の約２ｍ程の実体でその全身を未知の金属で覆われておりロボットのような見た目をしております。

ＳＣＰ_■■■■の誕生した正確な年代は判明していませんがこのＳＣｉＰが創造に携わったＳＣＰ_■■■■_１の世界から回収されたサンプルから予測される年代はＢ．Ｃ．［編集済み］年であることからこの世界が誕生する遥か前より存在していると考えられます。

このＳＣｉＰの最もな異常性はその現実改変能力にあることが判明しています。

ＳＣＰ_■■■■は通常時のヒューム値は１／１とヒューム値の異常性を確認されることはありません。

しかしこれは何らかの方法により普段のヒューム値を抑えているだけと考えられておりこのＳＣｉＰのヒューム値は最高で１／１５

００と他に類を見ないほどに強力なものです。
この為ＳＣＰ－■■■■が普段から自身のヒューム値を抑えているのは自身の存在が周りのヒューム値との差によって希釈されないようにしているためだと考えています。
しかしながら、どのような原理で自身のヒューム値を抑えているのかは未だ判明していません。
［編集済み］博士は、このＳＣｉＰ自身の体に財団で所有されているシャンク－アナスタサコス恒常時間溝（ＸＡＣＴＳ）のような現実と空間を切り離すことで計測が困難になっているのではないかと予測しています。
このＳＣｉＰの現実改変能力の使用は《Ｏ５》の全体決定、又は非常事態に限りＳＣＰ－■■■■の管理権限を持つＯ５エージェントにのみ可能とします。
また、原則このＳＣｉＰの現実改変能力の使用は《Ｋ－ｃｌａｓｓシナリオ》にのみ許可されることとされます。
このＳＣＰ－■■■■による大規模現実改変はすでに１度発生しています。
しかし《Ｃｌｅａｒａｎｃｅ　ｌｅｖｅｌ　５》以下の財団職員は何があったのかを把握していません。
また、当時収容違反を起こしていたＳＣｉＰに関してはその対象外であり彼等ＳＣｉＰの中には誰がやったかは分からないもののその誰かが何をしたかについては理解しているそぶりを見せたものもいます。
《ログ開始：００ｈ－３１ｍ－２１ｓ略》
■■■■博士：「やあ、ＳＣＰ－▲▲▲▲。調子はどうだい？」
ＳＣＰ－▲▲▲▲：「……。」
■■■■博士：「良い訳がないよな……。あの日お前はようやく逃げ出せることができたんだから」
ＳＣＰ－▲▲▲▲：「……。」
■■■■博士：「あの日君は自由を得たはずだった。それがたった９０分の間にまた捕まるなんて思ってもみなかっただろう」

ＳＣＰ＿▲▲▲▲▲：「……。」
■■■■博士：「なあ、ＳＣＰ＿▲▲▲▲▲。確かにあれは君たちにとっては不幸な事故だったのだろう。何せ君だけにとどまらず――」
ＳＣＰ＿▲▲▲▲▲：「……不幸な事故だと？」
■■■■博士：「（息をのむ）……違うのかね？」
ＳＣＰ＿▲▲▲▲▲：「貴様らは……あの日のことを覚えてすらいないのか？始まりこそ偶然ではあったがあの日我々が敗北したものは不運な事故で片付けられるものではない」
■■■■博士：「では、君たちは何に負けたと言うのかね？君たちの中には世界すら破壊できるような者も居ただろうに」
ＳＣＰ＿▲▲▲▲▲：「……貴様らに勘違いされるのが癪だから一度だけ言ってやる。我々があの日負けたものは《願い》だ。……我々が矮小で脆弱で臆病だと嘲笑った人間の……。それを力に変えた奴に我々は抵抗することすら許されずに敗北したのだ」
■■■■博士：「……協力感謝する。ＳＣＰ＿▲▲▲▲」
《ログ終了》
注意：要注意団体《壊れた神の教会》をＳＣＰ＿■■■■に接触されることは必ず避けなければなりません。
今現在、《三頭政治》と《壊れた神の教会》の協力体制の為取り消されました。
今回は調査を担当した《Ｃｌｅａｒａｎｃｅ　ｌｅｖｅｌ　５》以下の財団職員全員に《Ａ＿ｃｌａｓｓ記憶処理》を行ってください。

# 第十七話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

今俺は夢を見ているのだろう。
荒涼とした大地が続く。
空は腐敗したかのように赤黒く、空気は瘴気で満ちている。
そこに吹く風は腐敗臭が付き添っている。
また、奥には薄っすらと街のようなものが見えていて《マナエッセンス》と《ライフエッセンス》で確認するとそれはいくつもの生命を歪に繋いで作られた街のようだ。
だがどうやらこの空間は本物とは少し違うらしい。
どちらかというと今俺が居るのは幻覚のようなものだ。
つまりはこれが誰かが俺に対して見せたいと思っている光景なのだろう。
……誰かはわからないが……。
足元を見てみるとそこにあるのは土ではなく泥、……いや、腐敗した肉。
……この世界を俺に見せる奴は芸術というものがないのだろう。
俺から言わせてもらうとこの世界は只々不快感を感じるだけだ。
……もし人間のままだったら間違いなく吐いていただろうが……どうやら俺も若干人としての感性が薄れていたようだ。
……人としての感情をある程度保つことができる、ってテキストに記入していたんだけどなぁ……。
もっとしっかｒ――――――――――――
「やあ、……ここに誰か来るのは初めてだな……。君は誰だい？どうやってここに……いや、分かり切ったことか……」

『ッ!?』
いつの間に!?!?
声をかけられた方向に勢いよく振り向くとそこには小さな丘の上からこちらを伺っている男がいた。
何かの被膜を法衣の様に来ている男。
この男が俺にこの幻覚を見せている張本人だろう。
男はこちらを伺うだけで何もしてこようとしない。
ならば、
「……他者に名前を聞くときはまず自分からというのが礼儀というものだと思うが？」
「ああ、そうか……。すまないね、僕は元々奴隷の身分だったからそこらの事情には疎いんだ。もし君が気分を害したというなら謝ろう」
「いや、そういうことはない。……いきなり話しかけられたから警戒しているだけだ」
「なるほどね、……で、僕が誰だかについては……そうだな……うん、《イオン》と呼んでくれ。今の僕はただのイオンだ」
《イオン》、か……。
聞いたことのない名前だ。
だが相手も名乗ったことだ……こちらも名乗り返さなくては。
「私はクラフター、まあただのクラフターだ。……それで？イオンとやら、私にこの光景を見せた理由は一体なんだ？まさかあの見苦しい建造物を見せるためだけ、ってことはないよな？」
「……まあ、アレも理由の一つには入っているんだけどあくまで理由の一つにだ。本題とはまた違うよ」
あ、良かった。
もしも彼奴が俺をここに呼んだ理由があんなものを見せるためだけだったら正直ブチギレ案件だ。
俺だけでなく俺が居たギルドのほとんどがそうであったと思う。
……まあ、全員と言い切れないところがアレなんだが……まあ、人の趣味なのかもしれない。
「もうあまり時間が残ってないから単刀直入に言わせてもらう。君に

僕を、アディトゥム帝国を終わらしてくれないか？もう僕には時間もそれをする力すら残っていない。だから、……だからこの通りだ……どうか僕の最後の願い、聞き届けて、……貰えませ、んか？」

……。

まあ、なんとなくだが此奴も色々と問題を抱えているようだ。

だがそれはそれとして、

「自分ができないから他者にお願いします、って言うのは少々都合が良過ぎるんじゃないかな？」

「ッ!!じゃぁ、……じゃぁ、僕の願いは間違っていたというのか、君は?!?!?!確かに今僕は後悔している。だけど、あの時僕が行動を起こしたのは全ての人々を《ダエーバイト》から、そしてその過ちを認めぬ神々からの解放するためだった!!そのことについては今も後悔などしていない!!……していないんだ。……彼等は救われるべきだったんだ……そうでなくては、ならなかったんだ……だから、僕の何がいけ、なかったのか……教えて……くだ、さい……」

そう言いながらイオンは泣き崩れる。

蹲り、後悔していないと言いながらもさめざめと泣いている。

……。

ちょー、めんどくさい人じゃん!!!

そりゃあ俺だって他人に丸投げはよくないよね！って言ったさ!!

でもその後できることならば、って感じで了解しようとしたんだよ!?

その前に泣き崩れるとかどうなってんだよ!?

あ～、これ慰めないといけないやつじゃん。

そうしないと話が進まねぇ。

「教えてくれ、と言っているがな《イオン》……人生において答えなんて言うものは存在しない。あるのは後世に続く者たちがどう判断するかという結果だけだ。だから、何も間違いなんてものは誰も簡単には付けられないのさ。できることと言えば精々間違いだと分かったことを次にしないためにどうするかということぐらいなのさ」

「だがそれでは奴を止められない……僕のしてしまったことは絶対にしてはいけない間違いだったんだ。僕にはもう時間がない。もう間違いを正すことも――――――――――「だから」――――ッ!!!!!」
「だから今回だけは君の、君が歩んできた人生を私が添削しよう。間違っていたらそこを訂正しよう。君の間違いを私が代わりに正しておこう。だから、今君ができることは次の生を受けた時同じ間違いを犯さないように気を付けておくことくらいだよ。生憎と答案の返却はしてないのでね」
　呆けた顔でこちらを見てくる。
　おっ、やっと泣き止んだか。
「だが、貴方は都合が良過ぎると先ほど……」
　あれ？
　此奴もしかして根に持ってる？
「ああ、どうやら私は誰かの夢を叶えることは得意らしいからな……。ほら、都合が良過ぎるだろ？」
「……」
　そんな呆けた目を向けられてもなにもしてやらないぞ。
　まあ、言葉の綾というやつだ。
　奴も呆れたように、
「あなたという方は、……。もっと早くにあなたと出会えていたならどれだけよかったことか」
「ハハ……それも反省のつもりか？なら次の生では早めに会いに来ることだな。まあ、俺が居るかどうかもわからんが」
「では、貴方がいる世界に生まれることにしましょう」
　ハハ、ナイスジョーク。
　まあ、こいつも冗談を言えるくらいには元気が出たようだ。
　周りを見渡すと若干景色が白んできている。
　イオンの姿も朧げになっている。
　どうやら目覚めのようだ。
「では、さよならだ、イオン。もしまた会うとしたら君の来世か、君を倒すときになるだろう」

「そうですか、では来世で。因みに僕の体は既に乗っ取られているので倒すときの僕は僕じゃないと思いますよ」
「ほう、……なら心置きなくぶちのめせそうだ」
「ええ、……ではまた来世で」
「……ああ、そうだな……」
此奴の来世かぁ。
まあ、俺も転生者だし可能性としてはあるのかなぁ……？
会ってみたい気はするが、此奴意外と泣き虫だしめんどくさそうな気がする。
でもまあ、待っておいてはやるか。

＜side out＞

＜side Ion＞

行ってしまったか……。
僕という残滓が残したこの空間。
先程までいたあの方の言っていたことを考える。
もし、本当に来世というものがあるのなら……僕はあの方に仕えたい。
あの方が言うには来世というものは存在するようだがどの世界に行くことになるかは分からない。
僕は力のほとんどを《ヤルダバオート》に奪われてしまった。
体も奴の支配下である。
……あの方がどの世界の方なのかはわからない。
でも、あの方は間違いは次に生かせと言っていた。
なら、行こう。
僕が間違えた世界に。

そして間違いを正そう。
ここで残滓として消えるのではなく次に生かそう。
そうでなくては、あの方に顔見せすらできない。
もう力も及ばないが、できることを全てしよう。
備えることくらいはまだできるはずだ。
……還り逝くものから感謝を……貴方と出会えて僕のやるべきことが見えました。
また会いましょう、クラフター。
また、いつか……。

＜side out＞

# 第十八話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

――――――――――ゴオオオオオオオオオオオオオオ……

軍用の大型輸送機の中コンテナに詰められて運ばれる。
輸送機の周りには財団所有の戦闘機《Ｆ―１６》が数機周りを警戒している。
そして今俺が運ばれているこの輸送機もどちらかというとガンシップのようなものだ。
いつもならヘリで移動することが多い俺だが今回は財団も移動だけでさえ相当金をかけているらしく《Ｏ５エージェント》のクラスィーさんに聞いた説明によれば今回は財団だけでなく他の要注意団体もこの作戦に参加せざるをえない状況であったため必要以上に人の目に触れさせる訳にはいかないのだとか。
しかも今回は何かを修理することが任務なのだが財団含めその他要注意団体ですらお手上げの状態らしい。
一応聞かされた情報によると修理自体はある程度の過程までは進めることができたらしいのだがそこからそれ以上の工程を進めることが今の技術ではできないらしくしかも何をどう修理すればいいのか分からないということでお手上げ状態になっているらしい。
そんなこんなで俺に白羽の矢が立ったらしい。
彼らが言うにはその修理したい存在も俺のような存在であるため俺になら何か分かるのではないかと言うことだとか。
まあ、実際に見てみないと分からないと言うこともあってか随分前に輸送機に詰められ運ばれていたと言う訳だ。

そんな空の旅も終わりを迎えコンテナをトラックに乗せ換え指定されていた場所へ移動中である。
因みに今回は財団の機密情報の塊のようなものと接触するためＤ—４６１５７は居ない。（↑こいつも同類である）
あと、俺も目的地に着くまでは変装をしておくように言われ幻覚で今は財団の特殊部隊の人たちが着ているような全身防護服のような見た目である。

——————————ゴン、ゴン、ゴン!!

は～いどうぞ～。
え、着いた？
あ、了解です直ぐに降ります。
どうやら目的地に到着したようだ。
コンテナから出て周りの風景を見るにここはどうやら山間部の奥地のようだ。
「ＳＣＰ—■■■■、もう変装を解いてもいいぞ。ここにいる者たちは皆それぞれの組織の重要な役職に就いている者たちばかりだ。そしてもちろんお前のことも把握している」
「Ｏ—１０、そのものが《修理者》か？本当に《ＷＡＮ》を直すことができるのであろうな？……まだ我々は貴様らを完全に信用した訳ではないと言う事を忘れるな……。」
「その点に関しては心配するな《ブロマ》。こいつにできないならばもう誰も《壊れたる神》を修復できるものなどこの世にはいない」
「《壊れたる神》ではない。その名で呼ぶなと何度も言っている。彼女の名は《ＭＥＫＨＡＮＥ》だ」
クラスィーさんと話しているところにいきなり割り込んできたぞ、此奴……。
しかも、ただの人間じゃねぇ……自身の体の至る所を機械に置き換えてやがる……。
そいつは俺を真っ直ぐと睨めつける。

「貴様……本当に彼女を直すことができるのだろうな？虚偽であった場合は許さんぞ」
今度はまた別の奴……先ほど俺にガンを飛ばしてたやつの側にいた奴が話しかけてくる。
なんだ此奴ら……。
『見てみなければ分からない……というのが私の意見だ』
「はんっ!!それが真実だといいがな。それに貴様機械仕掛けと聞いていたがどう見てもただのｈ――「ミシェル」――――ッ!!ですがブロマ様！」
「いいえ、ミシェル。ですがも何ありません。彼は彼女を直すために来ていただいたのです。相応の礼儀というものを心得なさい」
「……かしこまりました」
先程クラスィーさんとの話に割り込んできたやつ《ブロマ》が俺に突っかかってきた奴を宥める。
……というか絶対納得してないだろ、お前!!!
今の間はなんだ、今の間は!?!?!
滅茶苦茶渋ってるじゃねぇかア!!!!
あ～、もうなんだよ!!
もうサッサと仕事終わらして帰ってやる!!!

---

とは意気込んだもののこれかなりヤバイな、コレ。
此奴自体クソデカいって言うのもあるが此奴ワールドエネミーじゃねぇかよ……。
流石に《九陽》レベルのヤバイ奴ではないものの明らかにレイドボス位の強さはある。

まあ、その前に初心者のって言葉がつくけど。
レベルとしては４０後半から５０前半位のものだが……自身の犠牲と引き換えに対象者をほぼ永久的に封印、って……なんだこのスキル……。
運営でもこんなぶっ壊れはしなかったぞ。
いや、《ＡＯＧ》の方がもっとやばいなあっちは全滅させるんだったか？
まあ、どっちにしろヤバイ奴なのは確かだ。
でもこいつを直すというのなら此処にあるパーツだけでは足りないな……。
創るか……。
まあ、幸いなことに俺は創造系のスキルや魔法は大量に持ってある。
だからまあ、創れないことはないだろうが……一番の問題はまた別のところにある。
此奴にはいま魂（データ）と呼べるものが存在しない。
その為データクリスタルが必要になってくるわけだが……。
むぅ……。
まあ、別に補充できる手段はあるからいいとして……コスパがなぁ……。
そう、問題はコスパにあるのだ。
元々データクリスタルは課金アイテムであったが《ユグドラシル》終了２年前のアプデで《Ｅｘｃｈａｎｇｅｒｂｏｘ》からも入手できるようにはなっているのだ。
ただコスパが悪いが……。
……しかし一度受けた依頼は完璧以上がうちのモットー。
やり遂げなければ他の者に合わせる顔がない。
……仕方ない、後で俺のコインで補充しておくか……。
そうと決まれば後は早い。
パーツを繋ぎ、足りないパーツは創って補う。

そうするうちに巨大なロボットが出来上がる。
後はデータクリスタルを此奴に入れれば完成である。
先程決めた覚悟が覚めないうちにその胸に魂（データ）を注ぎ込む。
するとその巨体が一度大きく跳ね起き上がる。
辺りを見回しこちらを凝視する。
……いや、何でこっちばっか見るんだよ。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　ロバート・ブマロ＞

初めそれを聞いた時私はもしかしたら、と思った。
中々進展がないＷＡＮの復活。
昔《ヤルダバオート》の封印の為、そしてアディトゥムの魔術師から民を開放するため己を犠牲にした神《ＭＥＫＨＡＮＥ》。
彼女の復活の為、《肉》を討つため、我々教会は《分解者達》と手を結んだ。
思うところがない訳ではない。
だがこの世界を《肉》から守り通すためには彼らの力もまた必要なのだ。
その中で彼等が《機械仕掛けの創造主》と呼ぶものがいることを知った。
初めは我々が回収し彼女の修理のために使おうと考えていたがそれを実行に移す前に我々は彼らと協力関係を結ぶこととなってしまった。
初めは財団にそれを渡すように要求したが彼らの意志は固く協力

関係にある内はあきらめようと思った。
だが彼らは彼女の復活に進展がないと判断すると《創造主》を使うと我々に対し言ってきた。
どのみちどのような物なのかを判断するにはちょうどいい機会だと考えたためその申し出を認めた。
そしてそれが現れると疑問に思った。
どう見ても人なのだ。
機械の要素が何処にもない。
私は、あろうことか彼に対し疑問を持ってしまった。
本当に彼女を直せるのか、と。
その時は部下を宥めはしたが正直私も同じ気持であった。
だがしかし彼は彼女の前に行くとその姿を現した。
それはまるでかつての彼女の様に感じた。
大きさも、形も、声も、何もかも違うかのように見えるが彼は彼女と同じであったのだ。
私も私の部下もこう思った。
彼は彼女の同類なのだ、と。
気付けば我々は彼に祈りをささげていた。
どうか、彼女を復活させて下さい、と。
彼は何かを考えていたが暫くすると動き出し彼女を組み立て始めた。
彼女のパーツをつなぎ合わせ、過去に失ってしまったパーツを創り上げ組み立てる。
そうして彼女の器が完成した。
そう、器だ。
彼女の魂はもうなかったのだ。
我々は絶望しかけた。
彼女はもういないのだ、と。
すると彼はその手に蒼く輝く宝石を取り出し彼女にそれを注ぎ込んだ。
我々は理解した。

あれが彼女の魂なのだと。
ああ、……ああ……。
今まで我々はあのお方のことを知らなかった。
それを今は悔やんでいる。
周りの信者もそうなのだろう。
もしあの方のことを知っていれば、必ず御迎えにはせ参じたというのに。
申し訳ございません、《創造主》よ……。
この戦いが終わり次第直ぐに御身の下にはせ参じます。
それまでの間、しばしお待ちを……。
我等は必ずや御身を御迎えに参ります……。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第十九話

＜ｓｉｄｅ　ＭＥＫＨＡＮＥ＞

ユラユラ、ユラユラとその世界を漂っていた。
《ヤルダバオート》を封印し、再び蘇ろうとした奴から《子供たち》を助けるためこの身を犠牲に解放した。
私の魂は消耗し既に《器》に入ることすらできなくなってしまっていた。
ただ私という残滓だけがこの世界にとどまり続けた。
……。
ブロマには、……あの子たちには今も申し訳ないと思っている。
真実を言ってしまうと本来であれば私は復活するすべなどなかったのだ。
それでもあの子たちが団結せねば《肉の夜明け》を防ぐことなどできない。
だから、私はあの子らに甘い嘘をついた。
私の体を再び直し復活させるように、と。
そしてその内心私の散っていった体を調べることで何か役に立てれば、と思っていた。
私にはもう《ヤルダバオート》を止める力は残っていない。
私はあの子らに何もしてやれることは残っていない……。
そう思っていた。
私にも一応の感覚というものは残っている。
そして私から見たそれはとても巨大な力であり古くしかしこの世界にとっては新しくそして何故か懐かしいと感じてしまった。
何故だろう……。
今まで会ったことすらないというのに……何故私は彼を懐かしく

感じてしまうのだろう？
彼は、私の体を直し始めた。
やめて、……もうその体には意味がない……私はもうその器に戻れない……。
それでも彼は、直すことをやめない。
私の声は届かず彼は私の器を直しきってしまった。
……ああ、何故、何故私の器を直したのですか……貴方なら、その体に何も意味はないと分かっているでしょうに……。
あの子たちの心に影が差していくのが分かる。
ああ、……これがあの子たちを騙してしまった罰なのですか？
運命よ、……これが罰というのでしょうか……？？？
強い悲しみと後悔が押し寄せる。
私が嘘をついてしまったから、私があの子たちにあのようなことを言わなければ……。
しかし突然私は何かに強く引き寄せられた。
それは蒼く輝く水晶のようなもの。
私はそれに取り込まれ、混ざり合い、ＭＥＫＨ（私）ＡＮＥとしての意味を持った。
そして彼は私の魂を器に注ぎ込んだ。
いつぶりであろうか……？
少なくとも１０００年以上も前の話だ。
私は周りに被害が出ないように起き上がり彼を探した。
彼のことは直ぐに見つけた。
私と同じで機械仕掛けのその体。
私よりずいぶんと小さいその体。
だが何より懐かしさを感じてしまうその体から発せられる彼自身の力。
そして理解する、……私はまだあの子たちを守ることができる。
私にはまだこの世界を守ることができる……あの子たちのかけがえのない未来を……。
そして私は私を直してくれた彼に伝える。

……還りしものより感謝を……私は再び《子供たち》を守ることができます。

＜side out＞

# 第二十話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

その山ほどもある巨体がそこに聳え立つ。
対して巨体が見つめるのは人とさして変わりないほどの大きさのロボットのようなものだ。
だがその二つを見ているものはこう思うだろう……〝どちらも同じ存在である〟と。
……なぁんでこっちばっか見つめるんですかね、此奴……？
そうなのだ、周りから見ているものは気が気でないだろうがこの両者見つめあうばかりで何もしていない。
というよりも本人（？）たちは互いに相手のコンタクトを待っているようなものであるが……。
【……お初にお目にかかります。……私の名は《ＭＥＫＨＡＮＥ》……。この度は私を直していただきありがとうございました。……ところで……あなたの名前をお聞きしても？】
【!?……ああ、私の名前か？……私は《クラフター》と呼んでくれ。そう、ただのクラフターだ。】
【なるほど、……《創り手（クラフター）》……そう言う事ですか……。】
暫く見つめあいが続いた後《ＭＥＫＨＡＮＥ》から話しかけてきた。
いや、どういう事よ？
今なんか変な勘違いしなかった？
俺言ったよね、ただのクラフターだ、って……言ったよね？
今絶対クラフターの発音おかしかったよね？
……一応釘指しとこ……。
【何か勘違いしていないか……？さっきも言ったが私はただのクラフターだぞ？】
【ええ、分かっております《古き創造主》よ……。先ほどに重ねて感謝いたします。貴方様のおかげでこうして再びあの子らを守るこ

とが叶います。このご恩は決して忘れません】
いや、忘れて？
貴方曲りなりにでも神様ってやつでしょ？
てことはさっき俺に突っかかってきた奴もこいつの信者なんじゃ……？
……あれ？
もしかしてコレ俺ヤバイ……？
さっきの奴に告げ口されて此奴に天罰喰らわさせられるんじゃ……。
それになんだよ!?!?!?《古き創造主》って!?!?!?
お前が言うと曲がりなりにもやばいんだよ!!
ほらあれ見ろよ、下にいる奴!?俺には分かる……あれは、あの目は後で俺を締め上げようとしている眼だ！
ええい!!
こうなったら……ニィゲルンダヨー!!!
俺は《転移（テレポーテーション）》を使ってクラスィーさんの近くに現れる。
……ほら、用事終わったよ？はよ帰ろう？……な？……な？
……ゑ？まだ帰れない？なんでぇ!?
……ああ、なるほど……確かに大きすぎるな、此奴。（←ものすごく失礼）
でも、人化の指輪はさすがに今持ってないしなぁ……。
いや、でもあれが使えるか……？

ここでいきなりだが諸君らに質問させていただきたい……。
擬人化は好きかい？

そう、擬人化だ。

その分野（？）は広く、災害、競走馬、軍艦、メイドラゴンと様々なものがある。
既に諸君らはお気づきになったであろう。
そう、つまりは《ＭＥＫＨＡＮＥ》を擬人化させてしまうのだ。
その為のアイテムが《擬人化の指輪》という。
そもそもこれは《ユグドラシル》時代のあることが切っ掛けでこのアイテムが生み出された。
《ユグドラシル》初期の頃は変身や第二形態というものは一握りのレイドボスに限られていた。
しかしながら、人とはいつの時代でも憧れるものだ。
そう、擬人化に。
だが、先ほどもあったように《ユグドラシル》初期の頃は変身や第二形態はない……つまり、ドラゴンからメイドラゴンになることができる環境ではなかった。
そんなことから当時あるプレイヤーがわざわざワールドアイテム《ウロボロス》を使って運営に導入させる事件にまで発展した。
因みに本作の主人公ではない。（そして誰がやったのかも不明である）（某【ＡＯＧ】のエロゲー大好き鳥人）
そして俺はその指輪を持っている。
まあ、コイツは俺の友人から貰ったものだから捨てずらかったってのもあるが……。
……何で持ってたんだ、アイツ？
まあ、今そのことは重要じゃない。
重要なのはこれが今ここにあるってことだ。
正直使う事のないものだったから誰かが使ってくれるんだったらってことでこれを使う。
《ＭＥＫＨＡＮＥ》にこの指輪を渡しつけるように指示する。
……おい、その指は、……って、……まあいい……俺はつけてないから意味はない……はずだ……。
指輪をはめた場所は置いておくとして、その効果は絶大だろう。
何故なら一山もの大きさを誇る《ＭＥＫＨＡＮＥ》が人よりかは僅

かに大きいが人の様な外観を持っている。
本人（？）も驚いているようでその指輪と自分の体を交互に見ている。
まあ、視点の位置があんなに変わりゃあ驚きもするか……。
一応渡しただけってのは気が引けるし説明もしといてやるか。
でも、これで天罰の件とか有耶無耶になってくれないかなぁ……。
（↑クズ）
はあぁ、帰るのがこりゃあ遅くなりそうだ
まあ、擬人化した《ＭＥＫＨＡＮＥ》が可愛いからいいや。（↑クズだってハッキリわかんだね）

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第二十一話

＜ｓｉｄｅ　???＞

とある国のある集落。
そこは独自の文化を持ち、尊重する。
その集落の規模は大きく中世の街並みほどのものでありもし此処にその分野の学者が居れば驚くほどに当時の文化を保っている。
そしてその集落の歴史は非常に古く最も古いものであれば紀元前時代から残る建造物さえも存在していた。
だが、そんな彼らが今まで歴史に登場していないのにはとある理由があった。
それは、彼らの宗教形態にあった。
その実態そのものは〝ある特定の個人〟を崇拝し、自己犠牲を重んじるというもの……そしてその〝ある特定の個人〟が彼らをいずれ救済するであろうという救世主的な感性を持っていた。
彼等のことを知る者は彼らをこう呼ぶ……

《プロト・サーキック・カルト》

彼らは、外界のあらゆるものを自分たちから切り離し独自の感念で生活を営んでいた。
そんな彼等であったが今ではある変化が起こっていた。
彼らが崇拝する〝ある特定の個人〟――――《崇高なるカルティスト・Ｉｏｎ》の帰還である。
当然彼らは喜んだ。

ようやく己らが崇拝する救世主が戻ってきたのだ。
彼らはこれでようやく自分たちも救われることができるのだと思った。
だが彼《Ｉｏｎ》が語ったのは警告と備えであったのだ。
当然彼らは《Ｉｏｎ》に尋ねた、――――何があったのか？何に備えるのか？と。
そんな彼らに《Ｉｏｎ》は己にあったことの全てを話した。
自身が《ヤルダバオート》に利用されていたこと、体の自由を奪われ力さえもそのほとんどが失っていたこと、そして自身が残滓となり消えかけてしまったこと。
彼らは、ではなぜ今ここに貴方が居られるのかと尋ねた。
そして彼は、自身が消えかかっている時に出会った《創造主》のことを話した。
彼らは己を悔いた。
己らが崇拝していた《Ｉｏｎ》はそんなにも長い間苦しんでいたというのに己らは一体何をしていたのか？ただ茫然とした日々を送っていただけではないか!!!
そんな彼らに《Ｉｏｎ》は再び警告した。
直ぐに備えなければならない、自分たちから――――自分たちが生んでしまった《過ち》を正さなければならない……そうでなくてはならない、と。
そんな彼に彼らは覚悟を示した。
今までの漠然とした日々を過ごすのではなく、彼《Ｉｏｎ》が囚われながらも記憶していた魔術を基に対抗手段を見出すように日々を費やし、戦うために力をつけた。
彼等は元々自己の犠牲を重んじる。
ましてや今回のような身内から出た災いを止めるためならば例えどんな苦しいことであろうとも乗り越えるだけの覚悟があったのだ。
運命の時はは直ぐ近くまで迫っている。
賽は既に投げられている。
全ての役者が舞台（決戦の地）に揃うまでもう少し先の話。

その時が刻一刻と迫っていた。

＜side　out＞

# 第二十二話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

後悔噬臍（こうかいぜいせい）

皆はこんな言葉を知っているだろうか……？

意味としては後になって悔やんでもどうしようもない、という意味である。

聡明な君たちならばもうお分かりであると思う。

つまり何が言いたいかというと、……

「ＳＣＰ＿■■■■、答えろ……何故彼について我々に対して何も説明がなかった？」

「ねぇ、クラフター……。彼とはどういう関係なのかな？」

女性を怒らせてしまったと言う訳だ。

転生した先の親父がよく言っていた……紳士で女性に勝てる奴なんていねぇ、てな。

まあ、親父もいつも尻に敷かれてたしなぁ……。

で、何をこんなに攻められているのかというと〝とある宗教団体〟から俺を返却しろだとかそんな感じの文書が財団に届いた訳なんだがその送り先が問題であったらしいのだ。

その送り主が相当問題らしく今対応に困っていらっしゃるのだとか……。

既にその文書は何度か届いていて初めは全く身に覚えのないことだと思って否定していたんだがどうやら向こうはシカトを続けることにしびれを切らして凸ってきたのだ。

そして俺の収容施設まで侵入してきた奴らとご対面してまあビックリ!!

いつぞやに会った《Ｉｏｎ》じゃないですか!!!!

なんとまあ、あの泣き虫が狂信者になったもんである。
しかも、その信仰の対象が俺である。
……俺にとっては甚だ迷惑なのだが。
だからと言ってはなんだがまあ、クラスィーさんが言ってることはよく分かる。
要するに報連相(ホウレンソウ)をしてくれ、ということだ。
これは俺も一度は社会人として組織の歯車になった身である、よく分かるし理解もする。
知らなかった、は言い訳でしかない。
彼等《ＳＣＰ財団》にとっては重要な情報だったのだろう。
だが《ＭＥＫＨＡＮＥ》さん……貴女なんで怒ってるの???
俺なんかした？
でもまずはその笑顔やめて、お願いだから……。
なぁんか目の奥にどす黒い何かを感じる……アンタホントに善性の女神なの？嫉妬とかじゃないよね???
もしかしてもしかして元敵対的な宗教団体のリーダだったから怒ってるの？
だとしたら俺思いっきり飛び火じゃねぇかぁア!!!
まあ、そんなことおくびにも出さんけども……。
ん～、なんだろう……このポンコツ感。
彼奴(イオン)も一応は優秀ではあるのだろう。
だって俺が強化してた収容施設を突破してきたわけだし。
……考えるだけ無駄か……。
まあ、そんなことよりも先ずはこの状況を何とかすることが優先だ。
……仕方ない……ここは奥の手を使うか……。
それは古来より伝わる秘儀。
その名も、――――――――――土下座だぁああ!!!（←雑魚だってハッキリわかんだね!!）
フ、フ、フ、ほらどうだ見たか、彼女らの怒気が霧散していくのを感じるぞぉぉおお!!

どうやらこれでこの場はどうにかなったようである。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラスィー＞

今回あった〝とある要注意団体〟の襲撃。
この時期だけあってかそれはとてつもなく衝撃的なものであった。
今回我々に対して襲撃してきたのは《プロト・サーキック・カルト》。
今現在我々が仮想敵対集団と考えている《サーキック・カルト》の分派である。
彼らを調査した調査員の情報では、彼らは余り外界に興味を持たず独自の生活形態を保ってきているとされてきた。
その為今回の襲撃は彼らが襲撃したという事実に最初は驚きを隠せなかった。
しかし、今回彼らを率いていた者が《崇高なルカルティスト・Ｉｏｎ》であることが分かるとその焦りは大きくなった。
だが実際彼らは《Ｉｏｎ》を含め偶然《ＳＣＰ＿■■■■》の収容室付近にいた《ＭＥＫＨＡＮＥ》に眠らされ今は拘置されている。
……まあ、何故いたのかは気にしないでおくが。
ともあれ、《ＳＣＰ＿■■■■》の安全の確認を済ませ何か事情を説明してもらうことにしたのだが……正直に言って今回は運が悪いだけだとしか言いようがない。
《ＳＣＰ＿■■■■》と《Ｉｏｎ》に面識があったことには驚いたが彼が知っているのは言うなれば《真・Ｉｏｎ》であり今我々が仮想敵と定めている《Ｉｏｎ》は彼にとって《ヤルダバオート》であるということだ。
つまり《Ｉｏｎ》その人物（？）その人が敵であるという認識の我々とはその認識の間に齟齬が発生していたと言う訳だ。

しかも、《壊れた神の教会》は彼らのことを《サーキック（肉）・カルト（の）》と蔑称で呼ぶ。
そして彼（サーキック・カルト）等についての我々（ＳＣＰ財団）の知識量は教会に頼る所が大きい。
その為我々も自然と《サーキック・カルト》と呼ぶことになってしまっていた。
それも原因となっていた。
しかし、今回の襲撃で得られたものは大きい。
何故なら今回捕らえたカルト集団は精鋭でありまた、《ＳＣＰ＿■■■■》からの言葉で既に《ＳＣＰ＿６１０／Ｏｂｊｅｃｔ ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ／通称：にくにくしいもの》に対しての対抗策を持っている。
これは今後を考えるととても大きい。
何故なら今彼らが持っている対抗策こそが《ＳＣＰ＿６１０》への切り札になる。
彼らは現段階で感染確率を減らす手段を既に見つけている。
そして今彼らは《Ｉｏｎ》の声の下《ＳＣＰ＿■■■■》を信仰しており、うまくこれを利用すればＳＣＰ財団の傘下にすることができる。
私がそう考えていると《ＳＣＰ＿■■■■》がいきなり足を折り腰を曲げ頭を下げた。
それはＪＡＰＡＮに存在する土下座に非常に類似していた。
それは彼なりの謝罪なのだろう。
今回の件はこちらと彼の認識の齟齬によるものだわざわざ《創造主》に報連相を求めていなかった我々に非があると考えていたぐらいだったが……どうやら彼は自分が頭を下げることでこれからのことがスムーズにに行くように取り計らったようだ。
全く、此奴も難儀な性格をしている……いや、この場合は神格になるのか？
まあ、どちらにせよこうまでされては失敗など許されれんな……
する気はないが。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　ＭＥＫＨＡＮＥ＞

最近……と言っても蘇ってからの話だが、いつも習慣にしていることがある。

それは、彼と毎日お茶をすることである。

まあ、お茶と言っても彼はただ話しているだけで飲むことはないが。

……ですが、彼が逆に飲食ができなくてよかったです……もしそれができたのなら私はうっかり彼のお茶に何か混ぜてしまうかもしれませんし……。

何とは言いませんが……。

彼女にとって初めての自身と同格の理解者だ。（↑誤解では？）

今までも同格というだけであれば自身以外にもそれなりにいた。

その筆頭として《ヤルダバオート》が挙げられる……思い出したくもないが……。

そして初めての恋という感情を抱いた相手であった。

彼から貰った指輪は左の薬指にはめた……記憶が正しければ確かそういう様な意味だったはず……もしかして彼は意味を知らないのでは???（↑知ってます）

……いつか教えるのは……まあ、先に同じような指輪を渡してからにしよう……！（↑やめたげて）

さて、そんな前置きはこのくらいでここからが本題だ。

先程ほど言ったように好意を抱いている相手がかつてとは言え敵に奪われそうになっていたら諸君らはどう思う???

そして自身が好意を寄せている相手がその敵のことを先に知っていたら???

まあ、……あまりいい気はしない。

特に先に《Ｉｏｎ》を助けたことが気に食わない……。

だがしかし《Ｉｏｎ》を見れば分かる……今の彼は《ヤルダバオート》に乗り移られる前よりも遥かに弱い。
そこから考えるに彼もまた残滓となり消滅しかけていたのだろう。
それに元は人間だ。
私の様に長く残滓だけでとどまることは困難であり、そうすると自身が消滅してしまう。
となると考えられるのは彼が先ほど言っていたことだ。
やはり彼は他の神格者とは違う。
彼は遊びで人を導くのではなく一定の離れたところで見守るのが彼の性分なのだろう。
……ふふ、やはり彼と私は似ています……。
まあ、その後彼が頭を下げたのはあまりいただけませんが……。
まあ、今後のことを考えるとそれが一番の策でしょうしね。
それに、今は彼を取られないように警戒しなければいけない《Ｉｏｎ》ももとはと言えば私が救えなかったせいでもある……。
もし、……いや、タラればはよそう。
今は子供たちの未来のこと……あと彼に今後どう攻めていくか……そのあとにでも後悔しましょう。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第二十三話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

そこはとある会議室。
幾つもの長机が並び椅子が設置してある。
そしてそこに座っている人物たちは世界の裏、つまり表には決して知られることのない超常組織の重鎮たちである。
一応は定期的に行われているこの会議。
普段なら空席が殆どであるのだが今回に限っては違う。
何故ならば自身の身の潔白の証明でもあるし今後の世界に直接かかわる問題でもあるからだ。
その問題とは、――――――――――

Ｘ．デー

まあ、要するに《サーキック・カルト》との決戦の日、の名前だ。
今回の議題の全てがそれに関連してくるしそうなってくるといずれの組織も自分たちに被害が出ないように立ち回るのが世の常である。
で、そんな会議に今回は俺も初めて参加している訳なんだが……正直言って何で俺まで参加しなきゃいけないのさ？
いや、決して何を言ってるのか分からないとかじゃないんだよ？
というかこの無駄にハイスペックな体のおかげで言ってることは理解できる。
でも今ここに俺が居る必要性は？
そして俺達の居る席が後ろの方だからと言ってずっとこっちを見

てるお（MEKHANE）隣さん？一応話は聞いておこうよ……ね？
いや、後で俺に聞く、じゃなくて今聞こう？……はぁ……分かったよ後で説明するから前向こう？
……しかしこの会議は見れば見るほど意外である。
まさか日本政府すら参加しているだなんて……。
いや、でも妥当なのか？
確か日本って昔から妖怪とかいたようだしな……正直信じちゃいなかったが。
でもまあ、深くは関わらないでおこう……さっきから何か物凄い視線を一部（東弊重工）から感じるし……あいつ等何しに来たんだ？
とはいうもののやはり夫々の組織の重鎮にいる者たちだ……議会は踊る、されど進まず、なんてことにはならずにとんとん拍子で進んでいく。
正直それだけ今回の議題が問題視されているという事でもあるのだろう。
実際に俺のところに配られた資料にも先ほど目を通していたが過去の事例からして今回の重要な課題の一つでもある《ＳＣＰ―６１０／肉々しいもの》が主要都市付近で発生した場合かなり最悪の事態になりかねない。
だからこそ今できることを示し合わせて共同で一つの目標に向かう必要があるのだ。
まあ、そう考えれば俺がここに呼ばれた理由はなんとなく理解できるが……。
要するに俺のこの話で重要になってくる場面は後始末の話になるだろう。
俺は《ＭＥＫＨＡＮＥ》や《Ｉｏｎ》と違い《サーキック・カルト》の活動や行動理念に詳しい訳ではない。
彼等も呼ばれてはいるが（《Ｉｏｎ》に関しては拘束＋テレビ会談）それは敵についてよく知るためだ。
それと加え俺までこの場に参加させたのはそう言う事が原因だろう。

……………む?……読みが外れたか?
しかし、実際はそれだけと言う訳でもなかった。
避難シェルターの提供である。
だが、提供と言っても自主性だ。
夫々の団体が可能な数値と場所を言っていく。
まあ、自主性だからわざわざ提供しなくても――――
――

――――ハッハッハッ、良いことをするのは当たり前だからな!!
――――ほ~ら、また出たよ。な~にが当たり前だ……お前がやっているのはどうせ偽善に過ぎないだろうが…………。
――――何か言ったかワールドディザスタ(笑)?
――――あ?(あ?)

………………。
はぁ~、このタイミングでそれを思い出すかぁ……。
もうこれはやるしかないじゃないですか。
拠点、……使うか?
いや、別の領域を新しく作ってしまった方が安全か?
うん、そうだな……その方が妙な連中に土足で拠点に入られる心配はない。
よし!!ならば善は急げ、だな。

＜side out＞

＜side クラスィー＞

Ｘ．デーに関する会議。
それは非常に順調よく話が進んでいた。
……その議題までは。
今回の議題で１，２を争うほどの議題。
それは、〝《ＳＣＰ＿６１０》が進行してきた際にどこに避難するか〟についてであった。
何故ならその避難者の中に《カルティスト》の内通者が潜んでいる可能性とその避難所を維持するだけの経費。
そして何より今後《アディトゥム》に目をつけられてしまう可能性があるからだ。
《アディトゥム》は《サーキック・カルト》の中で最も狂暴的であり特にその幹部連は《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ》に分類されるほどである。
ハッキリ言ってリスクが高すぎる。
そんなハイリスクを負ってもリターンは限りなく少ないという現状。
それでも《Ｔｔｔ》、《酩酊街》を含むいくつかの団体が避難場所を提示してくれたがそれでも足りないというのが現状だ。
時間が有耶無耶に過ぎ次の議題に入らなければいけない頃に奴は動いた。
『……少し気になったのだがその《シェルター》はこの世界でなければいけないのか？』
「どういうことかね？」
奴の問いかけに進行役の者が真意を問いかける。
奴は少し考えるそぶりを見せこう言った。
『例えばの話だが、避難シェルターに入らなければいけない理由がその感染症だとしてその場合感染症から保護対象を強引に引き離す方法として別の世界に避難させるというということだ。そうすればその感染症にかかる心配はない』
「ふむ……なるほど。確かに一理あると考えるがその場合であればこの世界に負荷が大きくかかるのではないかね？」

確かに……。
元ある世界に無理やり別の世界を作ってしまえばその時空に歪みが生まれてしまい最悪だとどちらの世界も存在自体が危うくなる。
『その点については既に把握済みだ。その対策として私の世界を中継地として使うことで負荷を軽減させる。それに私の世界は既にこちらの世界に接触したとしても負荷を与えないことが分かっている。ならば私の世界に負荷をかけるだけでこちらの世界には実害はない』
「ほう、……事実かね？」
「はい。以前我々ＳＣＰ財団がその所を調査した際ヒューム値自体は非常に安定しており、こちらの世界に対して負荷をかけるようなものは見受けられませんでした」
「ふむ……しかしそうなると《ＳＣＰ＿■■■■》。君の世界は大丈夫なのかね？世界をつなぐことは相当な負荷になるはずだが……」
『その点に関しては問題は一切ない。既に６６……いや、６７の世界に接続してなお《許容範囲（キャパシティー）》には程遠い』
「なるほど、……ならどのくらいまでの人数を受け入れられる？」
『それは、必要な数だけ、と答えておこう』
「あ～、ちょっといいか？質問なんだが……」
そこまで話したところで《ＧＯＣ》の一人から質問がかかる。
内容は新しい世界を作るということはそれなりに時間がかかるだろうがその間にＸ．デーが来てしまうことはないのかという質問であった。
その回答に奴は、
『その心配はない。……まあ、あと１日でＸ．デーが来るのなら話は別だが……そうでないのなら問題はない。この世界と同等の《スペック》を用意するのにかかる時間は約３日程度だ』
その回答にそれを聞いていた者たちは驚く。
彼らとて組織の重鎮である。
それなりに情報は入ってくるし今回に限っては《ＭＥＫＨＡＮＥ》の修繕の際にその存在を知ったものは多い。
しかし、世界を創るという発言ができるとは思ってもみなかったの

だ。
そして彼らはそれが質の悪い冗談などではなく本人の様子からそれが真実であることを理解していた。
そして当の本人はそれがなんでもないかのように提案する。
正直言って普段であれば頭の痛くなるような案件であるが今回に限ってはそれが最も最良である。
まあ、解決策が力技過ぎるとは思うが……。
しかし、そんな考えは一度よそに置き既に議会の答えは決まっていた。

＜side out＞

# 第二十四話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

さて、前回の会議で世界を創ると言ったものの……まあ、お察しの通り正攻法で創る気はない。

何故なら世界を創るというのは見た目だけではいけないからだ。

簡単な例を挙げると【ＡＯＧ】の第六階層にあるジャングル。

あれはぱっと見一つの世界に見えるが実際は階層であり場所（ルーム）でしかない。

その為その世界には限界が存在する。

しかし、《世界》というは限界というものが存在しない。

……まあ、地上平面説を再現しようとするなら話は別だが……生憎と今回そんなことをするつもりはない。

それに世界を維持するのにもそれなりの経費がいる。

だから今回する方法はシステムの抜け穴を利用する。

因みにだが夫々の領域守護者たちに今の俺の現状は伝えてある。

……だからと言って何か問題があったとかはないが……まあ、キャラクリの時から人類に友好になるように設定してたからなんだろうけど……。

因みに、【ＡＯＧ】みたいな過激派にならないようにというのもあるんだが。

……そんなことは置いておき今はその抜け道がどの様なものかというと……。

ここで話が少し脱線するが、諸君らはダークソウル（某死にゲー）というものを知っているだろうか？

もし知っている者であればなら察しがついているかもしれない。

このゲームにはとあるギミック（？）が存在している。

その名は《絵画世界》。
まあ、簡単に説明するとある特定の巨大な絵画や変なじーさん(ゲール爺)が持っている絵画の切れ端に触れるとその絵画の世界に引き込まれるというものだ。
ここまで言えば諸君らも察しがついただろう。
つまりはそう言う事だ。
そしてこの絵画世界だが一応は《ユグドラシル》にも似たようなもの(此奴が)は存在(再現)している(した)。
まあ、何故かとは言わないが……。
……そしてこの絵画世界に必要なキャンバスも道具もすべて俺の手元には揃っている。
だから、また新しく創っちまおうって訳だ……まあ、すでにある世界なんて《豚は絶対に許さん(Bloodborne)》か《太陽賛美(DARK SOULS)(Y)!!!!》の世界しかないからな。
あんな世界にこの世界の住人を連れて行けるか、って話ではあるんだけどな……。
それに絵画世界の利点はまだある。
それは絵画世界に通じるための絵画を切り刻める、という利点だ。
……別に今のはサイコ発言じゃないぞ?(↑ほんとかぁ?)
嘘じゃないぞ?(↑ふ〜ん?)
何か変な疑惑がかけられた気がするがまあいいとしよう……気のせいだろう。
この切り刻める、というのはつまり絵画を巨大にすればするほど切り刻める量が多くなる訳でつまりはそれだけ多くの入口を確保することができる。
しかも、入口は触れば発動する転移型のアイテムのようなもので触ったものを何人でも絵画側の世界に送り込める。
だからもし避難することになっても近くにその絵画の破片を持っている奴が一人いればその近くにいる全員が避難できると言う訳だ。
まあ、近くにいなかったら……うん、まあ、……ガンバレ。
それに絵画自体は紙の様にしか見えないため隠蔽性にも優れてい

ると言えるし持ち運びにも邪魔になりにくい。
まあ色々と言ってきたが、そんなことだからサッサと描いちまおう。
あと三日あるとはいえなるべく急いでやった方がいいだろうしな。
まあ、街のモデルは……《コルサント》(おい馬鹿やめろ)でもいいよね!!
だって一から創るよりデータがある方が改修だけで済むし……。
人数もできるだけ多い方がいいよネ!!

＜side　out＞

＜side　クラスィー＞

驚いた……というよりも先にまさか、という言葉が浮かんできた。
ことの発端はつい先日にあった議会だろう。
そこで奴は避難場所として新しく世界を創ると言い出した。
できないとは思ってなかったし、この世界よりも少しハイスペックなものになると考えていた。
いたのだが、……。
まさか、……星を丸ごと一つの都市にしてしまうとは……。
そう、星を丸ごとだ。
奴は、そんなに難しくはなかったと言っていたが……いや、本当なのだろうが……これだけのものを創り出すのに3日というのはいささか理解できないものがある。
本当にこいつが我々に対して友好でいてくれてよかった。
もし、我々に対して理解を示さずにいた場合間違いなく《ＣＫ　ｃ

ｌａｓｓシナリオ》が発生して……いや、すでに起きていたなそういえば。

……まあ、そのことに関してはこちらが頼んだこともあるが。

だが何はともあれ避難場所としては申し分ないと言えるだろう。

だが、この戦いが終わればまた面倒なことになりそうだ。

これだけの世界を創ってしまえば《ＭＥＫＨＡＮＥ》が、ンンッ……《壊れた神の教会》がまた何か言ってきそうだ。

それに肉とは関係ないだろうが最近東弊重工の連中も最近何かあるようだしな……。

……まあ、機械狂いの奴らのことだ《ＳＣＰ＿■■■■》のことともみて間違いないだろうが……。

それに最近何処から聞きつけたのか《プロト・サーキック・カルト》の連中も《ＳＣＰ＿■■■■＿１》のことを嗅ぎつけたようだ。

聖地だのなんだのとよく言ってくる。

一体どこの馬鹿（ブライト博士）が情報を奴らに教えた……。

まあ、大体の予想は付くが……。

はぁ、……またやることが増えそうだ。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第二十五話

＜side　???＞

２０１９／１２／３１／１７：４５
Вокруг Байкала（バイカル湖周辺）

そこは幾ばくかの民族が住んでいるとされていた地域。
しかし、１９９４年ロシア政府によって軍事目的の為そこに住む住民は全て移動を余儀なくされた。
当然この判断は各国の報道メディアに非難される……はずだった。
しかし国連はこの判断を支持。
また、この話題を取り上げるメディアは知らず知らずのうちにいなくなっていった。
……まるで誰かの意図が働いているかのように。
しかし、その地域での軍事活動は何をしているのかさっぱり報告は上がらない。
そして、政治的に対立国であるアメリカさえも明らかに何か隠し事があることは明確であるのにそのことについては何も言わない。
「……」
しかし、その地域の中を動くものがいた。
そう、《もの》だ。
人ではない。
冬の小動物でもない。
だが、生きてはいる。
それは、様々な形をしていた。
球体のもの、人に似ているもの、顔が幾つもある者、足がねじれ大

きさがまばらなもの。
だが、総じて共通して言えることはそれ等赤黒い肉であるという事だけだ。
そして、それらはもとは人であったのだろう……肥大した身体に襤褸となった衣服が付いていた……。
……今では見る影もないが。
そんな中その地域に漂う霧のような何かの奥にそれは居た。
何かの肉の被膜を法衣の様に着こなす者たち。
そしてその者たちが囲むようにしている者が一人。
その者を《ナドックス》――――――――――――――――《Ｉｏｎ》……
いや、現《ヤルダバオート》の側近である。
そしてこの男、４人のクラヴィガル側近の中で最も《ヤルダバオート》への信仰が高い。
普段は《カルティスト司祭》の前にすら姿を見せない彼であるが《ヤルダバオート》への信仰の厚さから侵攻においてその大役ともいえる役割を任されていた。
普段であればクラヴィガルの中でもリーダー的な扱いな彼ではあるが今回此処にいるのには訳があった。
そもそもグラヴィガルと言っても皆が《ヤルダバオート》を信仰しているわけではない。
なんだったら《ヤルダバオート》の命を聞かない者もいるくらいである。
だからこそ重要な使命は彼がいつも受けるのである。
……と言っても彼がすることと言えば感染した弱者を送り出すことぐらいであとは姿を眩ますのだが……。
……何故この世界から出られない……？
未だ彼は姿を眩ますことができないでいた。
彼からすれば《感染者》を解き放ち、後は周りにいる司祭に任せるつもりであった。

因みにだがここで彼が言っている《この世界から出る》というのはあることに非常に類似している。
……諸君らは《ユグドラシル》というゲームがどのような世界であったか知っているだろうか？
もしも知らない者の為に簡単に説明しよう。
《ユグドラシル》の世界は九つの世界が舞台であり、そして各々世界へは《転移（テレポーテーション）》で行き来することになっていた。
もうここまでくればもうお分かりだろう……そう、奴（クラフター）のせいである。
しかし、そんなことは全く知らない彼からすると何が起きているのか分からないのである。

……こんなところであの方の崇高なる計画が途絶えていい訳がないというのに……クソッ！もう日が昇り始めたか!!……ん？日が昇り始めた、だと？
【何が……起こっている……？】
バイカル湖周辺の森――――――――ナドックスが進行しようとしていた森を囲むように光の壁が連なっていた。
その壁はよく見ると遥か上空まで立ち昇る白い炎であることが伺えた。
「ナ、ナドックス様!……これは一体……!?」
【取り乱すな……所詮は弱者が見せる幻覚……。先ずは今の状況を把握することに全力を尽くせ】
「はっ！」
そう、司祭に対して告げるも彼がそう言った理由は今の状況が分からないうちに取り乱すことが悪手であると判断したからに過ぎなかった。
……それにいざというときに肉壁になる。
非常に非道であるようだが彼からすれば己以外は《ヤルダバオート》を除いて取り換えが聞く消耗品に過ぎなかった。
だが彼はこれが幻覚などではないと理解していた。

……力も出にくい……？

司祭たちは気付いてはいないようであるが己の肉体に僅かな違和感がある。

それに気づくことができたのは単に彼が優秀だからである。

何者かによる転移の阻害、そしてこの明らかに異常な炎の壁、そして僅かながらの違和感。

……《ＭＥＫＨＡＮＥ》が復活したか？……いや、例え奴が復活していたとしても奴ではこの様な大掛かりな神秘は使えない。

そもそも私は既に奴の力量を超えている筈だ。

……なるほど、……新勢力か……。

彼等からすればＳＣＰ財団やＧＯＣ（世界オカルト連合）などと言った組織は新勢力になる。

何せ設立された時期が違う。

唯一違うとすればそれは《壊れた神の教会》であるがそれはこちらも理解しているしそれなりに警戒している。

……所詮は収集家と侮っていた結果がこれか……少々過小評価がすぎていたようだ。

これでは完全に足元を掬われた形ではないか……。

……。

クフフフ……そうか、……だが……

――――――――――面白い

いつぶりだろう……このように敗北の香りが漂う戦場は……。

いつぶりだろう……こんなにも勝ちたいと思った戦いは……。

いつぶりだろう……こんなにも憎いと思った相手は……。

いつぶりだろう……こんなにも……こんなにも……愉快な戦場は。

嘗てとある種族（ダエーバイト）と奴隷《人間》が平等であると唱えた賢者（善人）がいた。

その者（賢者）はその考え故に権力者により虐げられた。

その者（敗者）は拷問を受け、舌と口を失った。

その者（犠牲者）は嘗て慕われた者たちから永遠に虐待を受ける呪いを掛けられた。

そしてその者（復讐者）は《救世主（ヤルダバオート）》に出会い、己を虐げた全てに復讐することにした。

初めから彼（復讐者）は《Ｉｏｎ》など信仰してはいない。

復讐者（彼）は破滅（理解）を望んだ。

だからこそ彼はまた彼を虐げ（理解しようとする者）ようとする者を憎（愛した）んだ。

――――――

# 第二十六話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

～ナドックスと接触する少し前～

多くの人間が息を潜ませその時をただひたすらに待ち構えていた。
正式な兵士の数は１０万人を超え、その全ての人間が今にも戦争が始まるかのような雰囲気を漂わせていた。
いや、戦争は既に始まっていた。
既に彼らはこの数時間の間に３度の進行を食い止めていた。
そんな彼らの表情には未だわずかながらの疲労は伺えるが恐怖の感情は見えない。
……《獅子のごとき心（ライオンズハート）》、っと。
まあ、その理由は俺のせいなんだけどな。
で、何故俺がこんなことをしているかというと……手持無沙汰になった、て言うのとこの先――――――――正確に言えばこいつ等が来ている方向――――――――からかなりヤバめの魔力を放つ奴がいることを見つけたからだ。
と言っても俺よりは下であるが……。
だがしかしながら、この世界を基準にすれば高すぎるほどである。
俺が見た限り推定Ｌｅｖ，８０かそこらである。
因みにだが《ＭＥＫＨＡＮＥ》がＬｅｖ，７０後半、そして一般人（兵士）がｌｅｖ，２である。
そのせいで一瞬此奴が《ヤルダバオート》かと思ったくらいである。
だが実際に《八肢刀の暗殺蟲（エイトエッジアサシン）》を向かわせて確認させたところどうも特徴が合わないということで別人（？）であることが分かった。
しかし、例え別人であったとしても兵士にとっては超が３つぐらいつくほどヤバい奴であることには変わりがない。
だからこそ今は全力で兵士のフォローに当たっていると言う訳だ

……そのまま戦ってもいいがその間に死んでたら寝覚めが悪いしな……。
そしてようやく戦線が落ち着いてきて、戦いに行こうと思っても次から次へと敵が来るので中々行くことができなかったのだがここに来て発生源へと先行していた偵察部隊が例のヤバイ奴と出くわしたとの報告がきた。
しかも、更に悪いことに先行部隊の声にＤ―４６１５７の声が混じっていた。
これぞまさにヤバ谷園である。
この世界に来て数少ない友人のＤ―４６１５７であるがそこらの一般人（兵士）と比べてもあまり変わりなく素の力が多少強い位である。
正直言って逆立ちしても叶わないほどの戦力差である。
それに一応はこの世界では俺は死者の蘇生を許可が無ければ使うことができない……いや、正確には使えるのだがそう言う《約束》だ。
そして俺はきっと《約束》を守ってしまう。
何故ならこの体になってから人の感覚が多少薄れてきていると自覚しているからだ。
だからもし彼が死んでしまったとしても悔やみはするが悲しみはしない……。
そのことから少しでも目を離したくて彼を助けようとしてしまう。
……なんともまあ、俺は自分勝手な奴だ……所詮は現実逃避でしかないというのに。
まあ、そのことは今考えるべき内容ではない……また後で考えればいい話だ。
そう意識を切り替え先行隊の下へ向かう。
……見えた!!
まだ、先行隊は戦っていた。

だが時間の問題だろう……既に《キメラ(SCP-610)》に取り囲まれていた。
未だに彼らが死んでいないのは彼らを襲っている側が遊んでいるからだ。

……あいつか……。

一人だけ遊びに参加せずただひたすらに何かを考え――――――――

――――――――

わったり効果に差が出てきたりする。
例えば当時ＤＱＮギルドとされていた《ＡＯＧ》ではカルマ値の低いものが多くその為《オーラ》の名前も《絶望の～》だとか《破滅の～》だとか、そんな系統の名前になっていた。
そしてまだここまでであれば何の問題もなかった。
だが《オーラ》の二度目のアップデートで《オーラ》の価値は一変する。
《オーラ》による相手への増加デバフの付与。
そう、……ただのデバフではなく《増加デバフ》だ。
此奴が出てきたことでＬｅｖ１００同士の戦いで明確な優劣がつけられた。
《オーラ》が相手より弱ければ強烈なデバフを食らうことになる。
だから当時は運営に対して批判が募ったのだが……まあ、あ察しの通りクソ運営だ……プレイヤーの言葉なんて一蹴された。
そして今俺は此奴の《オーラ》を食らった。
その《オーラ》の名前は……

《復讐のオーラⅦ／恐怖》

まあ、メジャーな部類にある《オーラ》だ。
効果としては相手に耐性、魔法、アイテムを関係なしに貫通して起こさせる《恐怖》である。
《恐怖》と言ってもあまり分からないと思うので簡単に説明すると、ＨＰ低下、ＭＰ低下、攻撃出力低下、防御力低下と普通に強い部類だ。
……まあ、俺の方がレベルが高いから別に対処できるんだけどな。
でも、……Ｄ―４６１５７の方はちょっとまずいかもな。
仕方が無い……か。

《不屈のオーラⅣ／希望》

《不屈のオーラ》……これが俺の持つ《オーラ》である。
《希望》とはあるがその効果は先制攻撃された際に相手を《混乱》状態に追い込むものである。
この《混乱》とは移動速度低下、攻撃出力低下である。
そしてこの《攻撃力低下》には勿論《オーラ》によるものも含まれる。
……まあ、この《オーラ》を選択したのは正直に言って名前だけである。
時には長い時間失敗続きの中で作品を完成させるにはそれなりの精神力が必要と思ってこの《オーラ》を選択したのだがハッキリいって《ユグドラシル》時代には意味がなかった。
というより使いどころがなかった。
本来格上との戦いに有利になる《オーラ》だが俺はそもそも対人をあまりしてこなかった。
……というのは建前で遊び半分で作ったエフェクトが恥ずかしすぎたからだ。
俺のエフェクトはギルド設立時からのメンバーが俺のデータクリスタルを勝手にいじった結果だ。
当時罰ゲームでずっとこのままのエフェクトにするというもので見事俺がそれを引き当ててしまったと言う訳だ。
あの時はかっこいいとか思ったが今振り返ってみると少し……いや、結構恥ずかしい。
なんだよ背中に背負う光輪って……。

コホン……話がそれた。

まあ、要するに俺がエフェクトを使っちまうとこの光のｓ……デバフのせい敵に気付かれてしまう。

だからこそさっさとケリをつけようじゃないか。
先行隊を転移させる。
いきなり消えた彼らを探そうとして取り巻きが此方を見つける。
……遅すぎるよ、君たち……俺の友人を虐めてくれたお礼だ
……受け取ってくれ。
取り巻きらしきモノが考え込んでいるモノに何かを伝えようとするが既にもう手遅れだ。
何故なら……。

《超位階魔法・失墜する天空（フォールンダウン）》

俺は、俺の友人で遊ぶ奴だけは許すつもりはないからな？

＜side out＞

# 第二十七話（回想回？）

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

……昔、……転生する前の話だ。

俺は自宅警備員になる前は普通のどこにでもいる陰キャだった。

その時は同じゲームにはまっていた奴もいてクラスには２～３人位友人がいた。

まあ、要するにクラスのはぐれもの同士の仲ってやつだ。

で、その中にはよく虐められてる奴もいた。

幸い俺は太ってはいたものの自身の身長と親父譲りの鋭い目つきが合わさってかなり厳つく見えていたからテキトーに睨み返せば早々に虐められるようなことはなかった。

だが、その虐められてる奴は別だった。

そしてそれは起こった。

どうも虐めてる奴の遊びでそいつが両腕を骨折するほどの大怪我になった。

そしてそいつらはそれを聞いてヘラヘラ笑っていた……どうやらそいつらにとって俺の友人の怪我は面白くて仕方が無いらしい。

例えどんな事情があったとしてもそいつは俺の友人に変わりはない……その時俺は初めて人の顔というものを全力で殴った。

……あのヘラヘラ笑うあいつらの顔を見ていると腹が立って仕方が無かったからだ。

まあ、その後はボコボコにされたんだがそいつの鼻を見事にへし折った。

だが、結局はその時残った事実としては俺が理不尽にそいつを殴ったという事実のみだった。

虐められてたやつも脅されて関係性が無いと言わされていた。

そんなわけで学校に居場所がなくなった俺は学校をやめてたのだがさらにひどいことが起こった。

虐められてたやつが自殺したのだ……俺にあるものを残して。
それはメモリーチップだった……そいつが死んで3日後のことだ。
その間に虐めっ子供は友人が死んだ原因を完全に俺に擦り付けてきていた。
実際俺は体が大きく目つきが悪い、そして学校にいたころよくそいつとつるんでいたことから俺とよくいたやつ以外は俺を攻め続けていた。
そんな中そのメモリーがうちに届いてきた。
その中には全てがあった。
そう、すべてだ。
虐めてた奴らのいじめの最中の音声録音（ボイスレコード）、カバンの中からとられたであろう映像、……そして俺に対する感謝と謝罪。
そしてそれらを全て警察に提出した。
そのおかげで立場が逆転し、俺は自殺に追い込んだいじめっ子から虐めていた奴らにあらがっていた被害者の一人として認識されるようになった。
この事件はその地方ではまあまあ大きく報道されていたことでこのことが発覚すると世間の目が手のひら返しにされた。
……俺は死んでしまったそいつに救われたわけだ。
だが、当時俺の友人が死んでしまったことがショックで俺は引きこもりになってしまった。
だからこそ、第二の生では俺は友人を……死んでしまった彼奴に報いるためにも必死で守ろうとした。
……そのせいであだ名が《番長》って呼ばれ続けるようになってしまったが。
別に喧嘩とか事故とか仕事上危険になったり危険にさらすことは仕方が無い。
何故ならガスマスクを外しただけで死んでしまう世界だ……そこは悲しいが割り切るしかなかった。
だが、俺は俺の友人を遊び道具にする奴だけは絶っっっ対に許すつもりはなかったし許したことはなかった。

何ならあまり褒められたことではないが病院送りにした回数だって1度や2度じゃぁない。
そして今!!!
まるで……いや、実際に俺の友人で遊んでいる奴らが目の前にいる!!

許せない……許さない……許すつもりはない!!!!!!

俺はあの時のようなことは起こさない……決して。
今ここでお前たちを私の全力をもって戦ってやることすらもったいない……お前たちは……ただ、ただ、消えるがいい……

＜side out＞

# 第二十八話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

《超位階魔法・失墜する天空》

空はひび割れ、視界は白一色に染まる。
《超位階魔法・失墜する天空》……それは嘗て《ユグドラシル》で最も信仰系の職業にダメージを与えることのできる魔法。
これについては《Ｉｏｎ》や《ＭＥＫＨＡＮＥ》から《サーキック・カルト》について聞いた時から考えていた。
此奴らは《カルト》……つまりは何らかの宗教団体であるということが分かる。
だとしたら《ユグドラシル》で言うところの《召喚術師／信仰系》か《錬金術師／信仰系》と言う事に絞られる。
一応は《調教師／信仰系》も考えたがそうであればあのような芸術性の欠けるようなものは使わないであろうしそもそも《調教師》は魔獣を従えるだけで作り出すことはできない。
因みにだが《ユグドラシル》には同時に二つまで《職業》を取ることができるのだが今回の場合は予測ではあるが《カルト》とついている以上は職業に《信仰系》があるとみていいだろう。
……まあ、過信しすぎるといけないが。
そして俺が予想するに此奴らは《錬金術師／信仰系》。
まあ、こんな醜いものを作り出す時点で大体は予想してはいたが……きっと当たってはいる筈だ。
視界が戻ってくる。
……これは、驚いたな。
先程何かを考えこんでいた奴がまだ生き残っていた。
そいつはこちらを睨みながら縫い付けられた口で笑っていた。

……信仰系ではない？いや、そんなことはないと思っていたが……何かしらのアイテムによるものか？

Ｌｅｖ８０程度の相手に一撃で勝てないことは多々あるが先ほど使ったのは《超位階魔法》……それも信仰系に最もダメージを与えることのできる代物だ。

しかし、アイテムを持っているようにも見えない。

……と、なると……アイテムや職業ではなくこの世界の独自の魔法と考えるべきか。

やはり薄々は思っていたがやはり存在していたか……。

勿論、ないとは考えたことはない。

何故なら本家オーバーロードにも《ユグドラシル》では存在しなかった《武技》というものがあったのだから。

しかし、厄介なのがこの世界には《武技》はなく代わりに《現実改編能力》というものが存在していた。

これはクラフターにとってかなり厄介なもので出力は《Ｗｉｓｈ（星）ｕｐｏｎ（に）ａ（願）ｓｔａｒ（い）》の方が圧倒的に高いもののやり方次第ではこちらの攻撃の出力を低下させられる可能性がある。

つまり奴はとっさの判断で自分に対しての攻撃を減衰させたということだ。

それは確かにダメージを負っているが仕留めきれないという結果に繋がった。

……だが、そんなことは良い……いや、決して良くはないが今考えることではない。

そんなことは後ででも考えられる……今必要なのはその力を使って俺の足をすくわれるようなことにならないようにすることだ。

【貴様……名を何という……？忌々しき餌よ……】

『餌だと？……相手をそんな風に呼ぶ奴なんぞに教えると思うか？』

【何も間違ってはいない……クククッ……貴様はこのナドックスが直々に喰らってやるのだ……餌と呼ぶに何か問題でも？】

あるわ、戯け……。

俺の体機械だよ？

何をどう喰らうのか分からないが知りたいとも思わない……そもそもまともな思考回路すら持っているか怪しいレベルだ……まともな会話はこれ以上できないと思った方がいいだろう。
奴もこちらが話す気などないということを悟ったのか口角を吊り上げながら攻撃しだした。
自身の骨や肉体だけではない、その体を流れている血でさえも俺を殺そうと使ってくる。
《第三位階魔法・火球（ファイアーボール）》
だがそのほとんどは……いや、全てが俺に届く前にことごとく燃え尽きる。
……何故、そのような攻撃ばかりをする？此奴のレベルであればさらに強力な攻撃すら使えるだろうに……。
ん？……更に強力な攻撃が使える？
……。
ヤッベ……。
急いでその場から離れる。
次の瞬間俺が浮かんでいたところの真下から高温の熱を伴った攻撃が繰り出される。
その攻撃を難なく回避するが……その数がとてつもない。
それは地面から無数に生えており、その攻撃は一見すると触手の様にも見えるがその一つ一つに口がついている。
【フハハハハハ!!そうだ!!いいぞ《Ｋａｚｎｉ（カーズニ）》!!そのまま食い散らかしてしまえ!!それでこそお前が存在する意味がある!!】
……《Ｋａｚｎｉ（カーズニ）》……ふむ……〝処刑〟か……。
なるほど……先ほどからやたらと中途半端な攻撃しかしてこないと思ったらこういう事か。
中々マニアックな選択じゃないか……よりによってこの状況で《上級・合成獣（ハイ・キメラ）》を造り出すとは……。
《上級・合成獣（ハイ・キメラ）》……《ユグドラシル》に存在した《第八位階魔法》で生み出すことのできるＬｅｖ９２の《合成獣（キメラ）》である。
その特性として挙げられるのが《憤怒のオーラ》を使えること、消

えるまでの時間が長いこと、半径９０ｍの超巨体であること、一度狙えば別の誰かに攻撃されない限り一人を狙い続けること、そして――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

【ハハハハハ――――――――ゴハッ!?!?!?な、ないをして……イギィィィィ!?!?!?や、やめろ!?!?私の言う事ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

先程の俺に対する攻撃……あれは実際には俺に対する攻撃ではない。

俺はただ巻き沿いを喰らわないように回避しただけだ。

何故俺がこんなに詳しいかって？

……まあ、とある鳥人（ペロロンチーノ）に男の夢と言われて……まあ、その、なんだ……ダンジョン（エロゲを再現しようとした）を創っただけさ。

ま、その後運営から警告をもらったがな!!

……これは今の《ＭＥＫＨＡＮＥ》には絶対内緒だな。

……一部の女性を除いて女性からしたらキモがられること間違いなしだ。

と、まあこんな風にのんびりとしているが目の前では絶賛喰い荒らし中の光景が広がる。

……なんだか見てて流石に可哀そうになってくるな……ま、止めないけどさ。

でもこのままだと他の部隊の連中が来たときに守り切れないかもしれない。

それに相手はＬｅｖ９２の肉弾戦特化型だ。

魔術師（キャスター）でビルド組んでる俺じゃあまあまあ相性が悪い。

それに此奴のようなトラップ型は移動ができない代わりに攻撃力に補正がかかっている。

流石に誰かを守りながらとかそんなことを言っている場合ではない。

俺からしたら相性が悪くてもレベルとアイテムでなんとかできる

し流石に攻撃パターンを覚えた相手に負けることはない。
だがこいつ等より圧倒的弱者のものからすれば掠っただけでも危ういくらいである。
（クラスィー、聞こえているか？）
（……これは、……お前の能力か？）
（ああ、そうだ。直接語り掛けてすまないが少々問題が発生した）
（……増援はどのくらいだ？）
（いや、逆だ。増援を送らないでほしい。……と言うか一時的に下げてくれ）
（お前がそれほどまで言うとは……何が起こった？）
（起こった、というよりは今目の前で起こっていることだが今回の敵の首魁が自滅してる最中なんだが奴が厄介なものを残していったようだ）
（だから部隊を下げろと？……分かったそうしよう。だが今回の首魁は確実に殺しておけ。お前の言う厄介なものの処分はそれからだ）
（分かったそうしよう……後大体5分と言ったところだが間に合いそうか？）
（ああ、既に下がらせている最中だ……後3分で完了する）
え、マジで？
早すぎない？
（大丈夫なのかまだ俺の場所だって言っていない気がするが……）
（何をいまさら……そんな光輪を背負っておきながらよく言う。お前の位置はとうに把握済みだ）
あ、あ、あ、あ、あああああああああああああああ!?!?!?
完っッ全に忘れてた!!!俺今超輝いてるじゃん!?!?!?
なに、それで位置ばれしてたの!?!?普通に恥ずかしんだが!?!?!?
クソッ!!!
こうなったら此奴にでも八つ当たりしてやる!!!
（……クラスィー）
（む？なんだ）
（こいつを倒すのに少々問題があってな……全員に対ショックの

体勢を取るか頭を低くして何かにつかまれと言っておいてくれ）
（そこまでに厄介なのか……分かった直ぐに全部隊に通達しよう）
ん？今初めに何か言ったか？
……まあ、気のせいだろう。
折角八つ当たりの許可をもらったことだ……ひときわ派手にしてやろう……盛大にな。
眼下の光景に目をやる。
そこにはあの《ナドックス》とか言う錬金術師を食い終わり此方に標的を定めた《上級（ハイ・キメラ）・合成獣》がいた。
なんだ……今更攻撃しようってのか？
こちとら今（恥ずかしすぎて）イラついてんだよ……お前の弱点は確か殴打と火炎ダメージだったなあ。
となるとあれしかない訳か……。
フフフ……此処に生まれたのがお前の運の尽きだったと嘆くがいい。

《第九位階魔法・核爆発（ニュークリアブラスト）》!!!

……あ、ヤバいかも。
被爆ダメージなんてなかったよね？
確かこの魔法って殴打と火炎ダメージだけだったよね!?!?

ビシュッ!!!!

鋭い音が後ろから聞こえ振り向いた瞬間無数の口が見えた。

＜side out＞

？ To be Continued

# 第二十九話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

襲い掛かる幾つもの顎から何度も避け続ける。

――――――シュッ!!!

また掠った……。

これで何度目だろう？

不意を突かれて後ろを取られてからこれで何度目だろう。

此奴の攻撃のパターンは全て頭に入ってある……いや、入っていた。

それは自惚れとかそういうものではなく何度もその動きを見て攻撃パターンを調べ上げたからだ。

……学習しているのか？

いや違う……此奴はトラップ型の《合成獣（キメラ）》……設置すれば近くにいる奴を襲う魔獣（モンスター）考えるための思考なんてものはなかったはずだ。

だが、先程と動きが違う。

こんな攻撃パターンは今でになかった。

［フフフ……］

［言ったダロウ？］

［オマエは私にとって餌なのだト］

［ナゼ抗ウ］

『この声……貴様ナドックスか』

《上級（ハイ）・合成獣（キメラ）》の無数の口から先程食い殺された男の声が聞こえる。

……なるほど大方の理解はできた。

此奴はどうやったか知らないが《上級（ハイ）・合成獣（キメラ）》に自身が喰われることで制御を乗っ取ったらしい。

……全く……面白いじゃないか。

今も至高の体がどうとか言っている此奴ではあるが自身を食い殺

した者への取り憑き攻撃など《ユグドラシル》には存在しなかった。
あの《怨霊》の種族であれば取り憑くことくらいはできたが自身を殺した相手に憑りつくことなど出来なかった。
この世界独自の方法だろう。
そうでなくとも興味がそそられる。
……っと、いけないな……戦闘中によそ事など。
まあ、どのみち処分してしまうのだ……多少探ってみてみるのもありだろう。
奴は今も自身の触手を何本も束ねて……何をしている？
この様な動作（モーション）は《ユグドラシル》のものではない。
攻撃が分からない以上様子見をしておきたいが……。
俺が居る方向と違って明後日の方向に赤黒い液体の塊を飛ばしていた。
……その方向には――――――そうか!!連合の野営陣地!!
だとすればアレは溶媒（SCP―610）か!!!
あの量の液体、燃やしきれるか分からない……外せば野営陣地まで被害が及ぶ……なら!!
《魔法最強化（マキシマイズマジック）・重力渦（グラビティメイルシュトローム）》
漆黒色に染まった球体。
重力の異常な力場……簡易ブラックホールだ。
調整は難しい。
だが、それをやらねばならない。
その球体は周りの景色を削りながら赤黒い液体を飲み込み効力を失う。
……何とか野営陣地への攻撃をｈ――――――――――――――――――――――――――――ゴッ!!!!
強い衝撃を受けた直後視界が急速に流れる。

周りの木々をなぎ倒し地面を抉る。

――――――ドン!!!

俺の背中に何かがぶつかる。

木材とかそう言ったものではなくもっと固い何かだ。

何にぶつかったのかと周りを見渡すと沢山の兵士、戦闘車両、テント……野営陣地だ。

どうやら俺がぶつかったのは戦車のようだ。

幸い人は乗っていないようだがもうこれでは使い物にならないだろう……戦車の側面が大きく拉げていた

いや、逆に拉げているだけで済んでいた。

……まあ、いろんな物にぶつかったせいで勢いがなくなっていたことが幸いした。

このまま突き進んでいたら指揮所に直撃だった。

「総員状況を知らせ!!!――――――クラフター!?!?!?大丈夫なのか、お前!?!?!」

「ああ、……大丈b「クラフター、貴方その傷!?早く直さないと!!!」……《ＭＥＫＨＡＮＥ》？』

傷？

と言うか《ＭＥＫＨＡＮＥ》……君、さっきまで此処にいたっけ？

そう思いながら自分の体を見てみると先ほどまで着ていた紺と白の法衣が破れその下の胸部に大きな傷跡が付けられていた。

……はぁ、……あの衣装、気に入っていたんだがなぁ……所詮は《聖遺物級（レガシー）》の安物か……。

それにしてもこの傷……リアンダ達に知られたら不味いな……。

【八肢刀の暗殺蟲（エイトエッジアサシン）……この傷のことは他言無用で頼む】

【し、しかし……配下の者をお連れして今すぐにでもお直しになされた方がよろしいと存じますが……】

【男には時に知られたくない傷もあるものさ】

【むぅ……そう言われてしまえば黙っておく他ないじゃないですか

……。分かりました、このことは他言無用にさせていただきます】
……すまないな、八肢刀（エイトエッジアサシン）の暗殺蟲。
《第六位階魔法・再構築（リビルディング）》
一部損傷ならこれでいい。
今の負傷は《神話級（ゴッズ）》の装備を着ていなかったことが原因だ。
レベルが自身より下とはいえＬｅｖ９２なら俺に傷を与えることくらいは余裕である。
ならどうするべきか？
答えは実に簡単である……《神話級（ゴッズ）》を着ればいい。
そうすれば高々Ｌｅｖ９２位の敵など楽々と屠ることができる。
因みにではあるが《ユグドラシル》のレベリングは少々特殊だ。
Ｌｅｖ９０までは大体１ヶ月もあればすぐに届く。
だが、そこからＬｅｖ１００になれまでには大体１年もの時間がかかる。
因みにこの１年と言うのは《最速で》という頭言葉が必要である。
その代わりＬｅｖ９０からはレベルが１違うと１０違うとされるほどに実力に差が出て来る。
要するにＬｅｖ９０前半であれば一応はＬｅｖ１００に傷をつけれるのだが相手がまともな装備をつけていれば傷一つ付けることすら叶わなくなる。
つまりはそう言う事だ。
……また補充しないといけないが……それはまた後で怒られよう。
そう思って自身のインベントリから木の棒を取り出す。
クラスイーさんや《ＭＥＫＨＡＮＥ》、他の兵士などはいきなり俺の腕が消えたことに驚いているが本当に驚くべきものはこれからだ。
《完璧なる戦士（パーフェクト・ウォリアー）》
一思いにその棒をへし折る。
今までまとっていた衣は消え、深緑の仮装束になる。
弦がない弓を構え自身の魔力を流し込む。
弓を構える先に見えるのは数えるのも億劫なほどに触手を空に伸ばしうねり続けている《ナドックス》だ。

……ハンッ、あれじゃぁまるでイソギンチャクだ……スケールがデカすぎて笑えないが。
今あいつは連合の攻撃用ドローンで遊んでいる。
あれを叩き落してから此方に手を出すつもりだろう。
その傲慢は貴様が三下の理由だよ。
ま、それだとさっきまでの俺も三下になるのだが気にしてはいけない。
弦を引き絞り矢が作り出される。
《Ｓａｇｉｔｔａｒｉｕｓ（サギッタリウス）》
それがこの弓の名前だ。
ラテン語で矢を射るものを意味するそれだが、しかしここでは別の意味を指す。
それは《射手要らず》……つまり決して外すことのない神の矢である。
まあ、実際のところ矢を射るのには射手が必要なのだがここでの意味は《射手が狙う必要はない》と言う事だ。
じゃあなんで直ぐに打たないのかだって？
……言わせんな恥ずかしい……。
なんて冗談は置いといて正直に言うと魔力を貯めてるだけだったりする。
なんせ、千や二千を超えてそうな勢いで触手がうねっているのだ……全部、派手に吹っ飛ばしてやりたいだろ？
そうすれば、奴の鼻っ面をへし折ることもできるだろうしな……。
『穿てば必中……我弓の名手なり……この矢をもって誅をなさん』
この弓を渡してきた奴がよく言ってたっけ……よく言えるよ、ホント……。
……だが、今ではこれもいい思い出だ。
でもやっぱり実際にこれを言うのは恥ずかしんだがな!!!
ほら周りを見渡してみろよ……クラスィーさんも《ＭＥＫＨＡＮＥ》もなんだコイツ？みたいな顔でこちらを見てやがる。（白目）
あ～!!前言撤回！やっぱり俺には何も見えませ～ん!!!（↑現実逃

避）

ほら、弓に魔力も貯まったことだしさっさと撃ちゃいましょうね～。

――――――ヒュンッ!!

魔力を惜しげもなく注ぎ込んだ矢が弓から放たれる。

その矢は《上級（ハイ・キメラ）・合成獣》に向かって重力もは法則も何もかも関係ないがごとく突き進み幾千、幾万もの矢に分裂していく。

そう、先程も言ったがこの《Ｓａｇｉｔｔａｒｉｕｓ（サギッターリウス）》の特徴は《決して外すことのない神の矢》である。

もしそれが例え幾億もの敵が目の前にあろうとも答えは同じである。

たった一度射れば良い……何故ならそれだけで全ての敵は射貫くことができるのだから。

『離れていろ』

そう言ってまた別の棒を割る。

先程まで俺が身を包んでいた狩り衣は消えその代わり俺が元着ていたような紺と純白の法衣が姿を見せる。

先程と違う点は二つ、その法衣の材質が布地ではないこと、そして首元のネックレスに《深紅（しんく）に燃えるような宝石》がついていることくらいである。

そう、《深紅（しんく）に燃えるような宝石》である。

もうここまで来れば分かる方もいると思うがその通り、これは《ユグドラシル》の《ワールドアイテム》最上級のに属する２０の一つ《熱素石（カロリックストーン）》……無尽蔵のエネルギーを生み出すアイテムだ。

その出力に制限はなく際限なく上昇させることができる。

この法衣も見た目はただの美しい衣の様に見えるがしかし触る者全てに火炎ダメを強制付与させる効果を持つ。

そのダメージ量は素晴らしいことに一瞬触っただけで防御特化

じゃない限り致命傷になるし、まともに切り結ぼうなんてことをしたらまず間違いなく相手は消滅する……残骸も残らずに。
まあ、近くにいるだけではダメージはないが……触れば一発アウトだ。
「お、おい……クラフター……お前、その格好は？」
『なに、何も心配いらん……３％程度本気を出すだけだ……っと、《ＭＥＫＨＡＮＥ》今の私に触るのはやめておいた方がいい、今の私は……熱いぞ？（キリッ』
熱いぞ（キリッ
……あ、ごめんなさい、そんな顔で見ないでください。
そんな反応に困るみたいなのが一番恥ずかしいから。
ソ、ソンナメデワタシヲミルナァアアア!?!?!
……。
ふう、……あれ？今精神抑制働かなかった？
……まあ、そんなことはどうでもいいや。
考えが大分別方向にそれていたが今はあの《上級（ハイ・キメラ）・合成獣》……いや、《ナドックス》についてだ。
彼奴はどうやったのか分からないがあの時確実に《上級（ハイ・キメラ）・合成獣》の制御を奪っていた。
そして先程も連合の攻撃用ドローンを叩き落していた際も複数を同時に狙っていた。
もうこれは《上級（ハイ・キメラ）・合成獣》と戦うのではなく《ナドックス》と戦うと考えていた方が良さそうだ……実に今更ではあるが。
なら少し戦い方も変えてみるべきか……よし、……これで行こう。
作戦も考えた。
ルシ・ファーやモモンガさんの様に戦う前に勝負は決まっているという様な作戦は立てることはできないがうまくことが進めば勝てる……もし進まなくても大体はカバーできるだろう。
《飛行（フライ）》《光輝緑の体（ボディ・オブ・イファルジェントベリル）》《魔法詠唱者の祝福（ブレス・オブ・マジックキャスター）》《無限障壁（インフィニティウォール）》《魔法（マジック）からの守り（ウォード）・神聖（ホーリー）》《生命の精髄（ライフエッセンス）》《上位全能力強化（グレーターフルポテンシャル）》《自由（フリーダム）》

《看破（シースルー）》《超常直感（パラノーマル・イントウイション）》《上位抵抗力強化（グレーター・レジスタンス）》《不屈（インドミタビリティ）》《感知増幅（センサーブースト）》《上位幸運（グレーターラック）》《魔力増幅（マジックブースト）》《竜の力（ドラゴニック・パワー）》《上位硬化（グレーターハードニング）》《天界の気（ヘヴンリィ・オーラ）》《吸収（アブショーブション）》《抵抗突破力上昇（ペネトレート・アップ）》《上位魔法盾（グレーター・マジックシールド）》

……このくらいかな？

え？３％の本気度じゃないって？

いやいや、これで１％位だよ？

だって《ユグドラシル》じゃこれくらい基本だったんだよ？

まあ、今までに散々騒いではいたものの正直本気はまだ出していない。

だって……

《転移（テレポーテーション）》

今からようやく本気を出すんだから。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　ＭＥＫＨＡＮＥ＞

また行ってしまった。

私を直してくれた彼。

本当だったら私も彼と一緒にあの敵と戦いたい……彼の手助けをしてあげたい。

でも、そんなことは無理だってことも理解している。

なんせ今彼が戦っている敵はあの《ナドックス》だ。

……私の知る限りでは《ナドックス》はあのような姿をしていなかった。

だが、それは遥か過去の話……今目の前で起こっていることが全て

だ。
《ナドックス》……彼についても……彼に何があったのかも知っている。
賢者として敬われ、呪われ、そして我々(全て)を呪った。
あの頃はもう既に《Ｉｏｎ》は《ヤルダバオート》に乗り移られていてその復讐心故に目をつけられた。
……あの時代、私は弱かった……決して力のことを指しているわけではない。
子供らを守ることができなかった。
……守ったつもりになって、実はその指からポロポロとこぼれて行っていた。
もしも、もう少しだけでいい……彼の様に私も強くなれたなら子供たちを助けられたのだろうか？
あの《ヤルダバオート》の支配から遠ざけることができたのだろうか？
答えは分からない……。
だけどもう既に起こってしまってことは簡単には変えることができない。
でもそのせいで彼を失ってしまうようなことがあれば……私はそれが怖くて仕方が無い。
さらに、先ほども《ナドックス》の攻撃で彼は傷ついていた。
直ぐに直して再び戦っているがそれでもまたさっきの様に……いや、今度こそ消えてなくなってしまうのではないかと思ってしまう。
今、目前では彼が《ナドックス》と戦っている。
数多の神秘が飛び交う戦場にいることをただ眺めることしかできない自分が悔しい。
でも今あの戦場に行けば彼の足を引っ張ってしまうことは分かり切ってる。
だからどうかこの祈り、この願いだけでも彼に届きますように。
どうか……どうか無事に帰ってきてください。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

やはりやり辛い。

どうしても《ナドックス》を《ユグドラシル》の《上級・合成獣》と重ねてしまう。

それに此奴面倒なことに当たりを引いてやがる。

《ユグドラシル》では召喚した魔獣はレベルは同じでもその都度によってステータスが異なる。

此奴は回復特化だ。

つまり、俺の装備に触っても燃え尽きない限り直ぐに再生する。

それに此奴《ナドックス》が制御しているからか全てを均等に直すなどということはせずに一部だけの触手を瞬間的に修復させているせいで中々攻撃に移れない。

確かに俺は今《ワールドアイテム》に匹敵するほどの防具を着ているが顔などの部分は露出したままだ。

此処を狙われ続ければ非常に面倒である。

かといって一気に攻め込んでケリをつけようとすればまだ見ぬ攻撃があるかもしれないため実行するには不安要素が多すぎる。

所謂膠着状態ってやつだ……いや、まあ、ひっきりなしに動いちゃいるが……。

だがこれでいい、これが作戦の第一段階《様子見》である。

今はまだ情報収集に専念し続けるべき時だ。

たまに突いて此方にヘイトを向けさせ続ければいい。

だが、次の第二段階に進めるには決定力が足りない……作戦不足がここで裏目に出てしまっていた。

今《ナドックス》が制御している《上級・合成獣》は防御貫通を持っている。

その為先ほども言ったが頭部を狙われ続けて万が一のことがあれば危険である。
……さて、……どうするべきか。
どうか……どうか無事に帰ってきてください。
な、なん、だ……今のは。
戦いの途中であるのにも関わらずその自身にかけられた強力なバフに意識を取られる。
一旦姿を消し、《看破（シースルー）》で今のバフを調べる。
《ＭＥＫＨＡＮＥの願（恋心）い》
……ハハ、マジかよ……コイツぁスゲーもん貰っちまったな……。
《ＭＥＫＨＡＮＥの願（恋心）い》……《ＭＥＫＨＡＮＥ》が無事な限り俺に対して攻撃が通らねえ、ってか……時間制限か一定のダメージを蓄積されるまでかは分からんがこれは有難い……それにこの名前も……。
……こりゃ後でどんな風に接したらいいのやら……だが、まずは何より……
『こんな素敵なものを貰っておいて負けました、なんて許される訳……ないんだよなァア!!!』
そうとなれば一気にケリをつけてしまおう。
決定力が足りない？
ここにあるだろう……《ＭＥＫＨＡＮＥ》がくれた最強の盾が。
なら後は俺も今出すことのできる出力の全力で答えなければ不義理というものだろう。
例え誰が乗っ取たとしても所詮は《上級（ハイ）・合成獣（キメラ）》。
ならば弱点は変わらない……そう、殴打と火炎ダメージに弱い!!!
ならばこれを使ってやろう……本気の３％を少し超えてしまうかもしれないが少しくらいだ、別に構わん!!……多分！
さらばだ《ナドックス》……これはあの世へ行く貴様への私からの

選別である!!……受け取り給え!!

《超位階魔法・消え去りゆく栄光の黄昏(ラグナロク)》!!!!

再び視界が純白に染まる。

地上からは半球状に見える白の大爆発。

半球から外には衝撃が行かずそして中では初めに放った《第九位階魔法・核爆発(ニュークリアブラスト)》と攻撃範囲は同じもののの数十から数百倍の威力。

本来であればＬｅｖ１０のレベルダウンが発生するこの攻撃でも《ヘカテの指輪》のおかげでなんとかなった。

……とは言えこの跡地は後日何とかしないといけないな……まあ、仕方が無い。

《ナドックス》がいた地点……《超位階魔法・消え去りゆく栄光の黄昏(ラグナロク)》の中心地、そこから魔法の範囲は全てが消えていた。

それは勿論《ナドックス》さえも跡形もなく消滅させていた。

……まあ、何はともあれこれで一段落付いたと言ったところか……久々に疲れた気がする。

機械の体ではあるのだが。

『メンテナンスに出すべきか?』

ま、そんなものは存在しないのだが……その位の冗談は許されるべきだろう。

だが、まずは帰ろう……拠点に、待ってくれているいる人のところに。

……《ＭＥＫＨＡＮＥ》にもちゃんとお礼をしないといけないだろうし……それ以外の回答は……まあ、決心がついてからでいいだろう。

<side>

# 第三十話

＜ｓｉｄｅ　ＧＯＣ（世界オカルト連合）評価班隊員＞

恐るべき力だ……。

我々はその何も無い跡地を見てそう思った。

つい先日起きた《三頭政治》《壊れた神の教会》の連合での対《サーキック・カルト》との戦い。

我々はもとよりＳＣｉＰの破壊を基本として行動しているし、《壊れた神の教会》もあのＳＣｉＰとは敵対関係にあった。

だが、あの《確保》《収容》《保護》を掲げているＳＣＰ財団までもが今回はそのＳＣｉＰを破壊するために動いた。

それを初め聞いた時はようやくあの人類にとって危険なものを保護という名目で集めている連中もＳＣｉＰの危険さを理解できたか、と思ったものだ。

しかし、蓋を開けてみれば奴らはまた別のものを隠し持っていた……それも他のＳＣｉＰ……今回で言えばＳＣＰ＿６１０だが……そんなものとは比べ物にもならない程に危険な手札を切ってきた。

調査前に目を通した報告書では《ＳＣＰ＿■■■■／Ｏｂｊｅｃｔｃｌａｓｓ＿Ｅｕｃｌｉｄ／星の願いを》とあったが……この光景を見ればそんなもの欺瞞だと一目で分かる。

地面はまるで切り取られたかのようにクレーターができており、元々その範囲内にあったものは消滅している。

後日財団がこの跡地を修復するというが……いや、やれるのだろう……あのＳＣｉＰ《ＳＣＰ＿■■■■》の力をもってすれば……。

我々は自慢ではないがかなり科学力にも力を入れていてその成果も中々のものである、と言える。

そして今回使われた戦闘用ドローンもかなりの傑作と呼べるものであった。

数々の実験の中で開発した特殊合金……非常に軽くそしてかなりの強度を誇る。
その耐久度はＴＮＴ火薬１２０個までならその爆風を至近距離で受けたとしても戦闘を継続できるというものだ……だった筈だ。
だがその耐久度を誇ってさえあの戦闘に役立つことはなかった。
そもそも戦いにすらなっていなかった。
敵のカルト教団の幹部クラスの男《ナドックス》……あいつの前に我々の誇る技術など何の意味もなかった。
それはもう遊びとしか言いようのない力の差がそこにはあったのだ。
だがそんな奴でも負かしてしまうあのＳＣｉＰの方が更に危険であると私は考える。
その中でもあの二度の白い爆発……一度目は恐らく〝核〟と同じ威力だろう。
しかし、あの二度目の爆発は……間違いなくそれを遥かに上回っている。
今回の作戦で使われたドローンにはサーモカメラも付いていた。
そしてそのカメラによって取られていた映像データでは一度目の爆発時に発生した熱量は３０００～４０００。の間を示していた。
そして二回目の爆発での温度は……測定不能であった。
それが差す意味としてはあの爆発は我々が観測できる限界……創世の爆発《ビッグバン》の温度を遥かに超えていたということになる。
下手をすればここに新たな宇宙ができることによる時空のゆがみが発生していた可能性すらある。
そもそもそれだけの爆発があったのにも関わらずこの星が無事なのはある意味奇跡としか言いようがない。
……とまあ、そんな建前とは別にちゃんと理解はしている……
これもあのＳＣｉＰの能力の一つだろう。
そもそもビッグバン以上の爆発を起こしておいて此方にその爆風や廃熱が来なかったことがそれを裏付けている様なものだ。
でなければ我々は今ここに……そもそもこの世界から居なくなっ

ていた事だろう。
何だったらこの星が残っていたかすらも……いや、確実に蒸発して残っていなかっただろう。
だが、それらはすべて起こらなかった。
ただ起きたことはあの二度目の爆発の際に文字通り《ナドックス》を消し飛ばした。
……まあ、あれほどの威力でまだ生き残っていたら本当にこの星が危なくなってしまう。
それを回避するだけの思考能力と判断能力、そしてそれを実行できるだけの能力を持っていることが伺える。
そして実際にその力をこの《サーキック・カルト》との……正確には《アディズム》だが、まあそんなことはいいだろう……要するにそいつらとの戦いにはこのＳＣｉＰの力が必要だという事だ。
……もしも、もしもの話であるが……ＧＯＣ（我々）がこのＳＣｉＰを先に見つけてしまった場合どうなっていただろう？
あのＳＣｉＰは財団の理念に賛成してはいるがそれは我々の理念に賛成することと同義ではない。
もしかしたら我々はあのＳＣｉＰを危険と判断し……いや、判断してたと考える。
そうすれば我々は間違いなくあのＳＣｉＰを破壊するために動くだろう……もしそうなったら……考えたくもない。
今回ばかりはＳＣＰ財団に保護されたことが幸いした。
……しばらくは様子見と言ったところか……いや、しかし……。
確かにＳＣＰ財団が収容したＳＣｉＰを無理やり奪取することはできないし、することは協約に反する。
確かに我々は互いにライバルであり時には衝突も起きるがそれでも確保したＳＣｉＰに関しては不干渉を築いている。
……まあ、余りやりたくない手段ではあるが抜け穴と言うのは何処にでもある。
あのＳＣｉＰは確かに《サーキック・カルト》との戦いには有効で

あることが分かったがそれでもやはりあの力は人類にとって危険だ……体組織を詳しく調べた後に処分した方がいいと考えるべきだ。
《マーシャル・カーター＆ダーク株式会社》に連絡を取るべきと１０８評議会に進言するべきだろうだろう……財政的に圧力をかける手段が最も穏便だ……同盟関係じゃなければ奴らの任務中に奪取することも考えたが……それも不可能と考えた方がいいか……。
それにあのＳＣＰ＿■■■■はその体が恐らく何らかの機械体であると推測されるが……まあ、《壊れたる神》は復活を果たしている……彼等も己等が信じる神以外の新参者があのように振舞うのはあまり気のいいものではないだろうしな。
気になるとすれば東弊重工だろうが……彼等もあの機構に興味があるだけだろう……あのＳＣｉＰを奪取した後にでも共同研究を持ち込めばいいだろうからな。
彼らの機械に関する技術力は目を見張るものがある……むしろ協力してくれる方がありがたい。
……だが、それもこれもまずはあのＳＣｉＰを確保しなければ話にならない。
人類の為だ……悪く思ってくれるなよ？財団。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十一話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

――――――ムシャ　ムシャ　ムシャ……

財団のとあるサイト内。

そこにとあるＳＣｉＰと一名のＤ職員がいた。

Ｄ職員の識別番号はＤ―４６１５７……彼は今……俺の目の前で俺の作った飯をものすごい勢いで食っている。

と言うのもちょっと前にあった戦いの後俺に対して何か欲しいものはあるかと聞かれた際人間としての俺が失われないように俺が人間であった頃に習慣となっていた自炊をしようとサイト内の俺の収容室にＳＣｉＰでも何でもないただどこの家庭にでもあるようなキッチンや家具を用意してもらったのだ。

あ、追加で言っておくと自分で作った料理は俺自身も食べてはいる……下手に不味い料理を食わせるのもあれだしな……。

１回目の転生する前の中学校での調理実習であった悲劇を俺は忘れない。（←トラウマ）

……え？

どうやって食っているのかって……まあ、人化の指輪様様だな。

因みに今の俺の姿は《ユグドラシル》時代のリアルでの姿をそのまま大きくしたような姿をしている。

二回目の人生の時は祖父がアイスランド出身でその血が濃く出たのかかなり日本人っぽくない……リアルでオフ会したときに驚かれたのはいい思い出だ。

……０人とかじゃないからな？

……まあ、自分でも作り出すことはできるのだが感謝というものは形としてもらった方が相手も自分も安心できるという事だ……

そう【ＡＯＧ】の《ぷにっと萌え》さんや《るし★ふぁー》さんから教わった。
何でも《気持ちだけ》と言うのは日本独自の文化の一種で海外の人からは普段からそう言ったことはまずないので裏があるように思えてしまうのだとか。
と言う訳で一般的な家具を用意してもらった俺ではあるが心配のことがいくつかある。
それは――――
『それで……先ほど君が言っていた違和感というものはどのような物なのだ？』
「あ～……。まあ、それのことなんだが最近朝の飯の量が少なくなったんだよ。……あとそれと関係あることか分かんねぇんだけど……最近ちょっと俺の顔見知り程度の知り合いがなんかおかしんだよな」
朝の飯の量が少なかったからこんなに食ってたのね……。
まあ、戦いの直ぐ後だし事後処理とかそんなんでお金がかかっるとかだろうか……。
でも一応は俺が出した被害は後処理までちゃんとしたしなぁ……。
まあ、そこはあれが考えても分からん……だが……。
顔見知り……。
ここで言っている顔見知りは此奴と同じＤ職員と言う事ではない……おそらくだがこのサイトの職員……それも知り合いではないことから警備兵と言ったところと考えればいい度ろう。
『ほぉ……おかしいとは具体的にどのようなところが？』
「なんつーか、ああ、あれだ、お前そんなんだったけとかそんな感じの……」
ふむ……。
俺は必要な時以外も許可が下りれば外に出ることくらいはできるが最近はそもそも外に出ようとする機会が少ない。
収容室は結構充実した環境を整えてくれるし……それに外に出たらまず間違いなく《ＭＥＫＨＡＮＥ》に会うことになる。
……別に嫌いとかそう言う事じゃなくて……なんか恥ずかしいと

いうかなんと言うか……まあ、そんな感じだ。（↑ただのヘタレ野郎）
ちゃんと返事しないといけないってことは分かっちゃいるんだけどな……。
おっと……話が逸れたな。
まあ、要するに俺自身外に出る機会が別に多い訳じゃないから警備兵のそう言った変化とかそう言ったことは分からないのだ。
まあ、……ちょっとくらい聞いてみるか。
（あ～、クラスィー……いきなりですまないがちょっと聞きたいことがあるんだが……今は大丈夫か？）
（む？……ああ、お前の念話か、クラフター。……ちょうど今書類関係の仕事をしていたところだ）
失敗したな……。
仕事中だったとは……。
（おっとそれは失礼した……後出かけなおした方がいいか？）
（いや、このまま続けてくれ……複数同時作業（マルチタスク）には慣れている……。今更１０や２０位増えたところで大して問題はない）
いや、１０や２０位増えたところで大して問題はないって地味にすごいなあの人。
（……どうした？）
（あ、すまない……少し考え事だ。……それで聞きたいことと言うのはＤ―４６１５７が言っていたことなんだがどうやら最近このサイトにいる職員の一部……具体的な例を挙げると俺の収容室を警護している警備兵の様子がおかしいとのことだ）
（……は？……い、今何と言った……？）
（このサイトにいる職員の一部の様子がおかしい）
（いやその前だ）
（Ｄ―４６１５７が言っていたこと）
（前過ぎだ……）
（最近）
（そう、それだ……。Ｄ―４６１５７は本当にそう言ったんだな？）

『おい、Ｄ―４６１５７……その話は本当に最近の話か？』
「あ、ああ、そうだぜ……。今朝もそんな感じだったし……それに違和感に思い始めたのは確か……あの戦いの直後当たりだったぜ？それなら最近の部類に入ると思うが……？」
『いや、十分だよ……有難う』
　あの戦いが終わって大体２週間前後と言ったところか……。
　なら確かにそれは最近の話だ
（ああ、最近の話だ……。具体的には２週間前後と言ったところだそうだ）
（そうか……。確かに時期はあっている……のか？）
（時期があっている？……一体何の話だ？）
（……今から言う事をよく聞いてくれクラフター……。お前の収容室の警備についていた機動部隊だが……２週間前の戦いで既に死んでいる）
　……は？
（実際に戦死と判断するための遺体の発見はまだされていないが彼らの居たとされる区域では損傷の激しい肉塊が発見された……そのため本来今お前の収容室を警備しているのは元居た部隊とは別の機動部隊が務めている……筈だ）
（まてまてまてッ……。じゃぁなんだ……彼らは既に死んでいて本来別の機動部隊がいるはずなのにその代わり死人である彼等が此処にいるってことになるぞ？）
（……ああ、そう言う事になるな。……と言う事はＤ―４６１５７が嘘をついているパターンと……）
（……その死んだ機動隊員を誰かがのっとってるってことか……。……クソッ、虫唾が走る）
（……クラフター……緊急命令だ。今お前の居るサイト―３４１の地下８階私のオフィスが存在する。そこに私は現在籠城をしている……ここまで迎えに来てくれ……頼めるか？）
（何でそんなところに居るんだよ……）
　貴女Ｏ５エージェントでしょうが……仮にもこんなとこいていい

のかよ。
　そう言えば俺が復活したときもなんか危なかったような気が……。
　……いや、あれは大丈夫なのか？あの黒スーツの中にそれなりに強そうなの居たし……。
（お前の近くが最も安全だからだ。……財団にとって《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｔｈａｕｍｉｅｌ》と言うのはそれだけの信頼が無ければならない。もし少しでも人類に対して攻撃的な一面を見せれば直ぐに《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ》になってしまうがな）
（お前達は……いや、何でもない。分かった直ぐにそちらに向かう）
　何故そんなにも私を信頼できる？
　そう言いかけたのを飲み込んだ。
（ああ、それと……）
（何だ？まだ何かあるのか？）
（ああ、すまないな……。先に忠告しておくがあの《転移（テレポーテーション）》とやらは　控　え　た　方　が　い　い。　こ　こ　は《Ｓｃｒａｎｔｏｎ（スクラントン）　Ｒｅａｌｉｔｙ（現実）　Ａｎｃｈｏｒ（錨）》通称ＳＲＡが配置されている。お前が《転移（テレポーテーション）》を使った結果どうなるのか分からない以上徒歩で向かってくれると有難い）
（なるほど……それについては理解した。……だがクラスィー、君はあとどのくらい持ちこたえられそうだ？）
（その気があれば１年以上と言っておこう。……まあ、やりたくはないがな）
（まあ、こんな死人が徘徊するところに居たい奴はいないだろうな……分かった直ぐにそちらに向かう）
（ああ、頼んだぞ）
　そう言って《念話》を切る。
　そしてＤ―４６１５７に目線を送る。
　彼奴もこちらが伝えたいことを理解したのかある程度入口から距離を取って警備員に声をかける。
「おい！そろそろ時間じゃないのか!?いつまで俺を入れておくつもり

だ？俺にだってこのあとやらないといけない任務があるんだよ!!」
［Ｄ＿４６１５７、こちらはそんな話を聞いていない。虚言を吐くのをやめろ、処分するぞ？］
「あぁ!?処分だって!?やれるもんならやってみろ!!後で処分されるのはお前に変更されるだけだ！」
［はぁ、もういい……Ｄ＿４６１５７、貴様を現時点をもって処分する］
そう言って警備員はＤ＿４６１５７に銃口を向ける。
そしてその後ろにも他の警備員が集まっていた。
……ハッ!!こいつ等思った以上に馬鹿の集まりだ。
『おいおい、ここで撃つのかよ……どっかよそでやれよお前等。せっかくの家具が汚れちまう』
「口をはさむなＳＣＰ＿■■■■。お前の家具何ぞ後でいくらでも買ってやる。引っ込んでいろ」
『なるほど……それはとても素敵な提案だ。だけどいくつか注意させてもらおうか。……まず今君は私に対しての家具をいくらでも買ってやると言ったが今から約二週間前我々（ＳＣＰ財団）はとある戦いに挑み勝利した。しかしその事後処理のせいで色々と経費を削減している……あまり無駄な出費を避けたいはずだ』
［家具程度の費用、私の自腹で払うさ。財団の経費とする必要もない］
『なるほど……。でもどうやって払うつもりだい？君らは既に死んでいると聞いていたが』
［さすがにそれは失礼じゃないか？……まあ、何らかの誤報だろう。戦場じゃぁたまにあることだ］
『ああ、奇跡の帰還とかそういうやつだね。あ、話が少し変わるが何故君たちは先程これほど多く集まってきたのかな？この収容室を警備している人間が皆いるじゃないか。武装もしていない人間にはちょーっと過剰すぎないか。まるで餌にたかるハエのようだ』
［先程から貴様いい加減にしろ!!我々が死んでいるだの、ハエの様だだのと、我々を馬鹿にしているのか!?］

［落ち着け、フーズ。……ＳＣＰ＿■■■■、お前が今何を考えているのかは分からないが余り俺達を馬鹿にし続けるとＫｅｔｅｒにされてしまうぞ？お前自身窮屈な立場になる。……Ｄ＿４６１５７の血でここが汚れるのが嫌ならそいつは別の場所で処分することにするよ。な？これで解決にしようじゃないか］

警備員の隊長格の男がそう言ってＤ＿４６１５７に近づいていく。

その様子を見て彼はこちらに興味をなくしたかのようにＤ＿４６１５７を見つめる。

『ああ、それともう一つ忠告しておくことがあった。今君らが利用しているその姿の隊長やその他の隊員は私のことをＳＣＰ＿■■■■ではなく《クラフター》と呼んでいたよ、偽物君』

その言葉に警備員の隊員は銃口をこちらに向けるが……。

――――――シュタタッ

……遅い。

『ふぅ……恐ろしく早い手刀……俺でなきゃ見逃してるね』

「いや、あんたが放った技だろう……」

あ、……終わった。

うぅ……もうやめましょうよ、突っ込みなんて!!精神（メンタル）がもったいない!!

……ふぅ……。

あ、今精神抑制が働いたなこれ。

「うわ!!なんだコイツ気持ちわりぃ!?!?!?」

『いやそこまで言わなくても……「あんたじゃねぇよ!!」……ゑ？

あ、ホントだ!!気持ち悪ッ!?』

俺達が視線を向けたその先……死体があった場所に死体はなくその代わりに巨大な虫の死骸が転がっていた。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十二話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

「何なんだ此奴は……」
『これが死者に化けたやつの本当の姿だって訳か……。本当に虫唾が走る……これでは死者への冒涜だ』
俺達の目の前には先程殺した警備隊……に化けていた虫どもの死骸が転がっていた。
……とはいえここで何もせずにいることはできない……クラスィーを迎えに行かなければならないのだから。
『Ｄ―４６１５７……お前は噂程度でも構わない此奴らについて何か聞いたことはあるか？』
「いや、こんな奴ら聞いたこともねぇよ……。２週間とは言えこんな奴らと一緒にいたとか考えたくもねぇぜ……全く」
『確かにその通りだな……ところでＤ―４６１５７、お前……銃火器の心得は？』
「勿論あるぜ。何だったら盾役（タンク）だってやれるさ」
『いや、盾役（タンク）はいい。……もしやるとしてもこの場で最も盾役（タンク）に適しているのは俺だとと思うが？』
「ハハッ!!確かにそうだな!!……で？何で銃火器のことを？」
彼……Ｄ―４６１５７が何故俺が銃火器の心得が必要なのか聞いてくる。
……まあ、こんな奴らがこの施設にいるとってことからこの後どうするのかは彼も大体察しがついているのだと思うが。
『こんなクソ虫が蔓延っていることを此処の管理者に伝えた。……俺達の任務はその要人の救出と警護……そしてこのクソ虫共を見つけ次第殺して回ることだ』
「なるほどな……。だがそれには大量の殺虫剤が必要だぜ？それも

今そこに落ちてる奴以上の量が」
『殺虫剤については心配するな。俺が用意してやる。……それも鉛製の特別な奴をな』
そう言って俺は自身のインベントリの中から一つのアタッシュケースを取り出す。
此奴は《ユグドラシル》時代にあったイベント報酬で手に入ったものだ。
「なんだこれ？……アルミ製のアタッシュケース？」
『いや、これはオリハルコン製の武器庫だ。……まあ、中に入れば分かる。とりあえず開けてみろ』
「はぁ？武器庫？うわっ……って、なんじゃこりゃぁああ!?!?!」
フフフ……!?……新鮮だな……その反応。
まあ、これは《ユグドラシル》のイベントであった《古き良き日々の再来》というイベント報酬だ。
イベントと言っても内容はただ昔あった祭りをいろんなギルドが再現して楽しみましょうと言ったものだ。
これはその時にあった射的の景品に過ぎない。
あ、因みにだがその時一番儲かったのは俺達のギルドだ……まあ、実際に体験したことがあるからね……転生前だけど。
そういえば、D―４６１５７……彼奴ケースを開けてそのまま落ちていったが大丈夫か？
『おいD―４６１５７……死んでいたら教えろー』
「……いててて……死んでたらどうやって返事すんだよ……ああ、落ちはしたが問題ないぜ……」
『そうか、ならよかった。……そこに大量の武器があるだろう。そこにある武器の中から無理のない程度の装備を使え。……ああ、それと防具と……そこに掛けてあるリグマガジンや弾薬、投擲武器などを入れるのに使用するは必ず持っておけ』
「りょーかい」
『しっかりと防具は確認しとけよ？かなりの確率で戦闘になるから

な』
　まあ、アイツも分かってはいると思うが。
　それよりも今欲しいのは情報だ。
　この虫が何処から来たのかそしてそもそも何なのかくらいは知っておきたい。
（クラスィー……そっちはまだ大丈夫か？）
（ああ、まだ大丈夫だ。それよりもお前が掛けて来るということは何かあったのか？）
（まあ、……何かあったと言ったら何かあったな。……先程警備隊の奴らを殺したんだが……こいつらの正体が分かった。こいつ等はかなり大きめの虫だ。半透明の翅、ゼラチン状の血液、大きく黒い虫……これらに何か聞き覚えは？）
（……ああ、クソッ……こんな時に。……ああ、聞き覚えか……聞き覚えなら確かにある。見たことはないがな）
（で、此奴らはなんだ？）
（おそらくだがそいつ等はＳＣＰ―３３３３―１だろう。先程お前が言っていた特徴に最も合致するものはそれだ。……不味いな……これはかなり不味い事態だ。クラフター……今お前が倒したのは何体だ？）
（８体だ。……それがどうした？）
（ならばあと最低でも４２体はいるという事か……。そいつ等はまだ他にもいる可能性が高い……それもこのサイトに、だ）
（……こいつ等の主食は？）
（……確認されている限りでは人間だ）
（でそこから食った奴に化けるってことはつまり元々此処に配属される予定だった奴ももう既に化けてるってことか……笑えないな）
　マジでクソ虫だなこいつ等。
　……今の俺は人化しているからかもしれないが少々感情的かもしれない……いや、感情的なのだろう。
　何故なら毎日挨拶程度の会話しかしなかった警備隊の人たちではあるがお隣さんくらいの認識ではあった。

そして任務で死んだのならそれは仕方のないことだ……その位は此処に身を置いている以上俺だって理解しているつもりだ。
だが、こいつ等は……死人の体を利用した。
それは既に終わった者への冒涜であることと同義であると俺は考えている。
（クラフター……まだ繋がっているか？）
（ああ、繋がってるよ）
（よかった……。今から言う事をよく聞いてくれ。お前は財団にとって最重要機密の一つだ。だが今回は私を迎えにここまで来るのには必ず誰かに見つかってしまうだろう。だから可能な限り変装をしろ。やり方は問わない……お前であるとばれなければなんとにでもなる。……無茶なことを言っているがこればかりは理解してくれ）
（あー、分かったよ……。人化でもしとけばいいか？）
（ああ、人化とあと顔も隠しておけ）
（了解した。顔も隠しておく。……ほかに何かあるか？）
（いや、特にないな。……あるとすれば道中見つけたＳＣＰ―３３３３―１は必ず処分しろ）
（分かっている……元からそのつもりだ）
ふぅ……。
さて、俺も着替えておくか。
と言ってもどうすっかなぁ。
……正直、この中にある防具なんてあってないようなもんだしなぁ……まあ、俺の場合はさして重さも気にならんだろうし重装備で良いか。
お、これなんて良いな。
『ふむ、こう……改めてみてみるといいデザインしてるじゃないか』
耐爆スーツにガスマスクそしてその横に堂々と置かれたＭ１３４ミニガンのこととそれに繋がるバックパック。
「よし！クラフター、こっちは着替え、おわ……た、ぜ……？誰だお前？」
『俺だ』

「オッケー理解した。詐欺か……」
『バカヤロウ。俺はクラフターだ』
「へへっ……冗談だって。……いや、その姿は冗談じゃねぇけどな。何でそんな格好してんだ、お前？」
『管理者から迎えに来るときは変装をしておけと言われたからだ』
「へぇ～……ま、色々と事情があるようで。……俺には関係ないがね。ああ、それと俺はもう準備は終わったぜ」
『ああ、そのようだな。……ＳＰＡＳ―１２か……中々様になってるじゃないか』
まあ、防具の下に来ているのがＤ職員用のオレンジのつなぎだから脱獄した囚人感が凄いが……。
だが、ショットガンとはいい選択肢だ。
それなら多少照準がずれていても近距離ならカバーできる。
……遠距離は心配だが……その時は俺がこいつ（Ｍ１３４）で吹っ飛ばしてやるから心配ないだろう。
「まあ、あんたにゃ大して関係ないだろうが一応背中は任せな。カバーするよ」
『そうか。ならば背中は任せた。……そろそろ行かないとまずいな。淑女（レディー）を待たせるのは紳士（ジェントルマン）じゃないからな』
「へぇ……。ここの管理人は女性か……。そりゃ助けがいがありそうだ」
『だが態度には気を付けておけよ？仮にもこの財団の上層部の一人だ。無礼が無いようにな』
……まあ、こいつも皮肉で言っていたんだろうが。
『じゃぁ、行くぞ。ああ、それと……ここから先は戦場（デッドゾーン）だ。気を引き締めていけ』
「分かってるよ」
＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十三話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

――――――カツッ、カツッ、カツッ……

長く白い廊下。

多少は汚れた場所も存在するがそのようなものははとんど内に等しく清潔感があふれていた。

だがそんな清潔感が感じられた廊下も今は赤黒く染まっている箇所が多々存在しその付近にはゼラチン状の物体と大きめの黒い虫が残るのみであった。

この惨状ともとれる状況を生み出した人物は二人……Ｄ―４６１５７とクラフターである。

因みにだがこの血痕は、しばらくすると消える。

何故ならばこの血痕はただの幻覚に過ぎず実際に流れているのはそこらへんで力尽きている虫の血液のようなものだけである。

そんな彼らはある目的の為にこの通路を進んでいた。

「おい、そろそろ目的地じゃないのか？……確かこの施設の地下８階……アンタの収容室が地下二階だからそこから６階降りた此処は目的地の近くにあるってことだろう？」

『ああ、だが俺も具体的な場所は不明だ。しかしわざと場所を言っていない可能性もある』

「へぇ……そりゃまた何で？」

『我々の今現在の目的はあのクソ虫共の殲滅ではなく要人の護衛。だが、そのためには周囲の安全の確保も大事だと言える。……まあ、あちら側にまだ時間的に余裕があるからとも言えるが……余裕があるのならまずは安全の確保を優先とした方がいい』

「なるほどな。……だが、お前さんに伝え忘れた可能性はないのかい？」

『ないな。……そもそも彼女はこの様なことを言い忘れるような人間

ではない、と私が保証しよう』
「ほぉ……。随分とお熱なこって」
『……お前……それは《ＭＥＫＨＡＮＥ》前だけでは言うなよ？振りとかじゃなくて』
「あ、そっか。お前……。オーケー今のは俺の失言だな。悪かったよ」
『ああ、……それはマジで気を付けてくれ……』
彼女それで落ち込むと慰めるの大変だから……。
ちょっとでも失言しちゃうと丸１日費やす羽目になっちゃうから……。
ンンッ……少し考えがそれていたな。
『まあ、何はともあれこの階層であることは間違いない。虱潰しに探してもいいが……此処は賢くいこう』
《探知（サーチ）》
ふむ……。
この通路を突き当りに行って右側の３番目の部屋か……。
だが、クラスイーとは別に４人……こいつ等α部隊か？
『Ｄ―４６１５７目的地はこの通路を突き当りに行って右側の３番目の部屋だ。だが、それまでにクソ虫が３体いる。この通路を直進したところに２体、右の角に１体。直進の奴と右の角の奴の近くに人間が１人ずつ。……急いだほうがいいな』
「おいおい……ここに来て人間とセットかよ。どうやって見分ける？」
『それについては俺に考えがある。そこでじっとしていろ』
《付与魔法（エンチャント・シースルー）・看破》
Ｄ―４６１５７が付けているゴーグルに魔法を付与する。
『Ｄ―４６１５７走りながらで良い。聞け。今お前の保護メガネに魔法をかけた。それで虫かどうか分かるはずだ。もしそこにいるのが虫なら放して撃つな、お前の銃は散弾だ。奴らの胸に当ててからぶっ飛ばしてやれ！』
「なるほど！それはいい案だ！」
『……見えた!!あいつ等だ！俺は右を殺る。お前は左を殺れ！』

「応！」

――――――ダララララララララララララッ!!!!

――――――ダンッ!!!!

『そのまま右の通路まで突っ走れェ!!!』

「Merde（クソ） ce（この） b（野）・tard（郎）!!」

――――――ダンッ!!!!

俺より僅かに先に右の通路に辿り着いていたＤ―４６１５７が通路に滑り込みながらＳＰＡＳ―１２をを撃つ。

……っておいおいおい!!おい!!何やってんだ馬鹿!!そこにもまだ人間がいるって言ったよな!?!?

いきなり散弾ぶっ放すとか何考えてんだお前!?!?!?

と、一瞬焦りはしたもののその銃口から飛び出したのは普通の弾丸より大きめの鉛の塊……スラッグ弾だ。

スラッグ弾とは普通のショットガンの弾とは違い口径が大きく非常に威力のある銃弾のことだ。

その威力は凄まじく主に害獣や猛獣などと言った一般的なライフルでは中々倒すことのできない危険な存在であっても一撃で倒すことができると言われるほどだ。

だがそれはつまりそれだけの威力がその弾丸に秘められていることと同義であり先程のような滑り込みながら決め打ちするようなものではない。

しかしＤ―４６１５７はそれを滑り込みながら且つその反動を完全に受け流しながら打ち込んだ。

急いで右側の通路を覗き込むとそこには確かにあのクソ虫だけを打ち抜いていた。

この職員も怪我をしてはいるがこれは明らかに銃痕とかそう言ったものではなくあのクソ虫の捕食の直前で会ったことが伺える。
……アレ？今まであんまり考えたことなかったけど此奴人間目線で見たらかなりの怪物クラスなんじゃね？
気絶してしまった職員を治し、別の職員に化けていたクソ虫を見る。
そこにはまだ擬態が解け切っていないが確かに胸の中心……クソ虫がいるであろう心臓付近を的確に打ち抜いていた。
……ん～……少しまぐれ当たりを疑いたいが……もしあの一瞬で狙ったとしたらかなりの怪物クラスだぞこれは……。
「おい、何ぼさっとしてんだよ。目的地はもうすぐそこだぜ？こんな仕事さっさと終わらせちまおう」
『……ああ、そうだな』
そして本人はこの有様である。
ここまで飄々とされるとマジでまぐれ当たりとかじゃなくて此奴の実力と思えてしまうな……。
……まあ、それこそ俺には関係ない話ではあるが。
『……Ｄ―４６１５７、お前って案外凄い奴なんだな』
「あ？何のことだ？……まあ、褒められるのは悪い気分じゃないから良いけどな」
『……まあ、此方の話だ。気にしなくていい』
「……そう言われると逆に気になるんだが？」
『気にしなくていい』
「ア、ハイ」
……此奴なんかノリ良いな……。
いや、まあ、……普段からこんな感じか。
『さて、……Ｄ―４６１５７。ここから先は本来お前が立ち入ることなどできない空間だ。だがしかしこのエリアにＤ職員がいること自体おかしな話でもある。……だから今回は管理人の護衛と言う事で特別に入ることができるようにしてやる。もし何か言われたとしてもその時は俺の責任だと言え』

「ああ、分かった。……だがその前にいくつか質問させろ。もし俺がお前の責任だと言ったとしてお前に被害が行ったらどうすんだ？」
『そんなこと分かり切っている。その時も俺が責任を取る。……生憎と俺の能力は有用でね……その能力が必要な時にでも今回の責任分の仕事をするさ』
「……わりぃ。……感謝するぜ」
『別にいいってことよ、……相棒（マイフレンド）。……さて、ここから先はさっきみたいに簡単にはいかない。護衛対象がいるからな。だからさっきみたいな感覚で戦闘を行えばすぐに死ぬと思っておけ。油断をするな、身構えてるときには死神は来ない』
「来るのは虫だけどな……ま、その忠告はちゃんと覚えておくよ」
『ならいい』
　そうして右の通路に入ってから3番目の部屋……クラスィーがいる部屋へと俺達は入って行った。

＜side out＞

# 第三十四話

＜ｓｉｄｅ　クラスィー＞

～クラフター達が到着する少し前～

さて、……クラフターには緊急命令を出した。
これでこのサイトからの避難は迅速にできるはずだ……まあ、する気はないが。
そもそもこのサイトでさえＳＣＰ＿３３３３＿１が侵入しているというのに他の施設なら安全かと聞かれれば正直怪しいとしか言えない。
このサイト＿３４１はＳＣＰ＿■■■■を収容するために新たに極秘裏で作られた施設でもある。
まあ、収容しているのは《ＳＣＰ＿■■■■／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｅｕｃｌｉｄ／星に願いを》と公式ではされているが。
……そう言えば前回の《サーキック・カルト》との戦いの後《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ》へ変更するようにと申請書が提出されていたな。
まあ、現地で実際に戦った機動部隊や戦後処理に奔走していた財団所属の医療関係者等からは今のままでいいと言っていたが。
機動部隊所属の職員からすると友好的かつ強力なＳＣｉＰは作戦の幅や部隊員の生存に直結しやすいからな……まあ、配属されるとしてもα部隊だけだろうが。
だが、医療班……お前たちは何をやっている、このマッド集団が……。
作戦で部位欠損などの重傷を負った兵士の治療、精神的ストレスの治療、……果てには死者蘇生の実験（テスト）など。
前者２つはまだ理解できるし正直実験（テスト）した甲斐があったと思う

……だが、死者蘇生の実験(テスト)はやり過ぎだ。
一体誰が許可を出した!?
……確か死者蘇生実験の担当者は……ああ、アナ・ラング博士か。
……彼女には同情しないでもないが財団の規則には従って貰わ無ければ困るものだ。
しかし、今回行った実験の結果ロバート・スクラントン博士《Scranton(スクラントン) Reality(リアリティ) Anchor(現実錨)》通称SRAを開発した凄い人。アナ・ラング博士の夫。《SCP—3001／Object class—Euclid／Red(レッド) reality(リアリティ)》の被害者。事故の結果悲惨な結末を辿る。もし調べるのならグロに注意。原作ではまだ生きている可能性もあるがこの世界では既に死亡がほぼ確定されているが蘇ったことはいい意味での誤算だった。
彼の研究を発展させるためには彼の存在が欠かせない。
……今回に限り彼等には記憶処理だけで目をつぶろう。
おっと……考えがそれていたな。
……少し休憩をとるか……クラフターにはああ言ったものの今の財団の状況はまさに厳しいの一言で表さすことができるだろう。
それを何とかやり繰りさせるのが今の課題でもある。
……《マーシャル・カーター&ダーク株式会社》の奴ら……今回はお遊びが目的ではないようだ。
そう思考を巡らせ机の上に置いてある《SCP—■■■■回収計画案》と銘打ってある報告書に目を向ける。
……全く《GOC(世界オカルト連合)》の奴らもこの時期に面倒なことをしてくれる。
この報告書は財団の潜入エージェントからの情報ではなく財団外部から持ち込まれたものだ。
……しかし、少し意外ではあったな……まさか《壊れた神の教会》の者たちがこの計画書のことを教えてくれるとは……いや、内容からすれば当然か……。
クラフターは《壊れた神(かれら)の教会》にとって己等の主神である《MEKHANE(彼女)》と同格の存在であると認識している。
それは壊れていた《MEKHANE(彼女)》を直したこと、そして彼女自

身がクラフターに好意を抱いていることからもその傾向を助長させたのだろう。
そもそも彼等としてはクラフターが収容されること、財団(我々)に協力的であるからこそ何も言わないのであってもしクラフターが収容されることを少しでも嫌がれば彼等は即座にクラフターを財団から連れ出すに違いない。
……私は宗教に疎いからあまり分からないことも多いがしかしこの計画書にある〝調査したうえでの破壊〟と言うのは彼等にとって十分に冒涜的な行為に値するということくらいは理解できる。
……これは、《ＧＯＣ(世界オカルト連合)》の読みが外れたという事だろう。《ＧＯＣ(彼等)》からすればクラフターは《教会》にとって異教の様に見えたことだろう。
確かに一神教の類であればそれもまた正しい判断とも言えただろうが主に《ＭＥＫＨＡＮＥ》が最も活躍していた時期の主流は多神教が多かった。
確かに《壊れた神の教会》は今まで《ＭＥＫＨＡＮＥ》を主神とした宗教ではあったもののそれは《ＭＥＫＨＡＮＥ》に同族と呼べるものが居なかったからに過ぎない。
そこに現れた《ＭＥＫＨＡＮＥ》と同族の存在……彼らにとっては他の宗教と似たような体系になった位の認識だろう。
そしてそんな主神と同格の存在を捕まえて解剖し、最後には壊してしまおうというのだ。
正直、その場で即交戦状態にならなかっただけよく冷静でいられたものだと言えるだろう。
まあ、報告書と一緒に入っていた手紙には筆舌しがたいほどの怒りがにじみ出ていたが……。
きっと冷静でいられたのは《ＭＥＫＨＡＮＥ(彼女)》のおかげなのだろう。
彼女は確かにクラフターが居ればそれ以外のことが目に入りにくくなる場面があるがそれでも彼女は主神とされるだけあって自身の信者(子供たち)が冷静でいられない場面できっと彼らを落ち着かせたのだろう。
彼等にとってこれほどに冒涜的な連中でも一時的には協力関係に

ある。
それに《ＧＯＣ（世界オカルト連合）》も１０８の族長が務める《１０８評議会》とだけあって統制力は財団より低い。
だからそのことに賭けたのだろう……皆がこうではないと。
まあ、もしこれが全会一致だとしたら……もう擁護のしようがない。
諦めよう……触らぬ神に祟りなし、と言うやつだ。
……ふぅ……結局財政的に圧をかけて来ることへの対策とは何も関係ないことしか考えられていない、か。
今は、Ｄ＿職員たちの食費から少しづつ賄って行っているがこのままではＳＣｉＰの収容に支障が出かねん。
確かにクラフターによる大規模現実改変能力によって過去の収容に必要な維持費よりも遥かに少ない経費で済むがそれでもＳＣｉＰの量は馬鹿にできない程に多い。
……やはりこれもクラフターに頼むしかないか。
余りやりたくない手段ではあるが致し方ない……背に腹は代えられん。

――――ダララララララララララッ!!!!

――――ダンッ!!!!

「お……来たか。予想より少し早いな」
銃声は２つ。
つまりはＤ＿４６１５７も同じであると言う事だろう。

――――コンコンコン……

「失礼します。Ｏ５―１０彼らの迎えが来たと思われますが……どうしますか？」
「ああ、そのようだな。君たちα部隊は向こうの部屋のソファにでも

座っていろ。彼らが着いたら作戦内容を説明する」
「？失礼ですが……逃げないのですか？」
部屋の壁についているスイッチを入れて天井から投影用のレンズを出しその先の白い壁にこのサイトの見取り図を映し出す。
そしてそれを見たα部隊のリーダー格の男がそう私に問いかけてくる。
他の部隊員も同じ感想なのだろう……私の言葉を静かに待っている。
そんな彼らに私は苦笑いをしながらこう言った。
「此処にさえSCP—3333—1が大量に発生しているんだ。……どこか別の場所へ避難するより安全だと分かっている場所（ここ）の方がよっぽど安心できる」
「ああ、なるほど……」

——ダンッ!!!!!!

「おっと……意外に近くまで来ていたようだな」
「それはどちらのことで？」
「両方さ。ハンター（クラフター）も害（SCP—3333—1）虫も」

——コンコンコン……

——入るぞ？

「やっと来たようだな……。ああ、D—46157も入って構わない……非常事態だしな。……さて、ようやく全員揃ったところで今回の作戦を説明する……」
さて、……害（SCP—3333—1）虫共……今まで散々なことを仕出かしてくれたな。
此処からは我々が狩る側だ。
……あまり財団（我々）を無礼（なめ）るなよ？

<side out>

# 第三十五話

＜side　クラフター＞

此処に来るまでに使った通路を来た道とは逆の方向に進む。
そこにあるものはすでに手遅れとなってしまった肉塊とその傍らに転がっているクソ虫。
どう考えてもまだ新しい死体だ……それにその職員の手には拳銃が握られている。
壁に付いている飛沫の跡からこの職員は自分の未来を察し自身の手で自決したのだろう。
『悔しいな……優秀な人材であっただろうに』
どうやら全ての職員を助けることはできなかったようだ。
これだけの力を持っていたとしてもその手からは零れ落ちる命がある。
そのことがあのクソ虫への怒りと自身の不甲斐なさに対する怒りを混ぜ合わせにさせる。
……この感情はあの機械の体では感じることができなかっただろうな。
こんな所で今の状態（人化）のデメリットを知ることになるとは……。
「ゲスト1—1（クラフター）……大丈夫か？」
『ああ、……戦闘行為に支障はない』
「それを判断するのは俺だ。……厳しい言い方になるが今のお前は正直新兵と同じだ。自分のできること以上の事に気を割いている。そんなもの気にしたってしょうがない……今お前がするべきことは自分にできる事をすることだ。それ以上のことを考えるのは後で酒飲みの場とかで考えればいい」
『……』
「リーダー、探知（サーチ）に反応……2体です」

「分かった。α1―2お前は右をやれ。俺が左をやる。……まあ、要するに戦場でそこまで気負う必要はない。できるだけ軽くして行け。身も心も、な。お前は……まあ、装備は別に大した問題じゃないだろうけどな」

そう言って射撃体勢を取るα部隊リーダー。

……彼の言う通りだな……戦場では身も心も軽く……反省や振り返りは後の話だ……今する事ではない。

ああ、なんだ……そう言う事か。

俺は自身への不甲斐なさを感じるよりも先ずは目の前のことを如何にする方が先だ。

反省会を先にしても意味がない……何も得られないだけだ。

ならば先程の彼が言ったように〝今〟できる事をした方が遥かに良いに決まっている。

……つまりはゲーマーの俺と本業のα部隊（彼等）とでは考え方からして違ったわけだ……敵わないな。

……はぁ、……俺もまだまだ学ぶことは多いようだ。

そう思いなおし俺は再び自身の持つ銃をしっかりと握りなおした。

＜side　out＞

＜side　α部隊隊長＞

……お、ちょっとはマシになったようだな。

先程までは何か悩んでいたようだがもう心配しなくてもいいだろう。

まあ、任務中の新兵じゃよくあることだ……奴の場合は人化が関係していたのだろうが。

初めは人化を解除させようかとも迷いはしたがそれではO5―10の言う機密防衛ラインとやらには届かない。

正直あんな重装備に身を包んでいて顔なんて確認できないのに必要であるかは疑問ではあるのだが、そこはそう言う命令だ……従うほかない。

だが、もし奴の悩みが原因で仲間が負傷することは避けたい……だからこそ助言をしたのだが……どうやらその効果はあったらしい。

顔が見られないから正確には把握できないが雰囲気でもわかる……いい兵士だ。

これなら背中を預けてもよさそうだな。

因みにだが今の俺達は本来四人規模の小隊であるところを２人ずつに分けて行動している。

ＳＧ（ショットガン）持ちのデックとＬＭＧ（軽機関銃）持ちのチェスは万が一の為にＯ５―１０の護衛を任せている。

……言ってて不安になってくる構成ではあるがあいつ等も俺と同じ《機動部隊α―１（レッド・ライト・ハンド）》機動部隊アルファ―１はＯ５評議会に直接報告を行う部隊で、作戦上最も厳格に機密性を要する状況で投入されます。この部隊は財団の中でも最も忠誠心のある隊員で構成されています。機動部隊アルファ―１に関するこれ以上の情報はレベル５機密になっている。の隊員である奴らだ……自分達の不利を言い訳にするような戦い方はしないことくらいは分かっている。

「Ｏ５―１０、こちらα１（アルファ・ワン）―１（ワン）。フロアＢ―４，第５～第１区画クリア。これよりＢ―３にある７区画の調査を開始する」

［こちらＯ５―１０、フロアＢ―４，第５～第１区画クリア報告了解した。こちらにある端末からフロアＢ―４への上からの道を遮断しておく。フロアＢ―３に入ったら伝えろ」

「α１―１了解。……Ｏ５―１０、フロアＢ―３を制圧するのに少し提案が……」

［なんだα１―１。言ってみろ」

「はい、……そちらの端末で可能な限りフロアＢ―３，第４区画まで誘導をお願いします。このフロアは他のフロアよりも区画数が多くまたＣｌｅａｒａｎｃｅ　ｌｅｖｅｌ　３以下の財団職員の居住ス

ペースや待機している機動部隊の武器庫、研究者職員のラボやオフィスが存在します。そのためそこでの戦闘が発生すると考えられます」
［なるほど、つまりお前が言いたいのはそのラボやオフィスにあるものを破壊される危険性があると言う事か。……確かに一部のラボには揮発性可燃物を扱っているものもあるな］
「それに武器庫には《サーキック・カルト》からの報復に備えナパーム弾や神経ガスグレネードが大量に保管されています。もし誘爆なんてしたら区画の一つは火の海になりかねません」
［だから一つの区画に集めようと？確か第４区画は……食堂か］
「ええ、あそこならフロアＢ―３にいる職員全員を集めることもできます」
［なるほど、α１―１その作戦で行こう。他の者にも伝えろ〝元の作戦よりもその作戦を優先しろ〟とな］
「了解。……お前達も聞こえていただろう。俺達の目的地は第４区画だ。そこにあの虫けら共が集まってくる予定だ。だが発砲には気を付けろ……そこにはただの財団職員も大勢いる。……ゲスト１―１、フロアＢ―３全域に《探知（サーチ）》をかけてくれ。俺達に掛けてくれたやつじゃ全域が見渡せん」
『了解した。……《魔法範囲拡大・探知（ワイデンマジック・サーチ）》。……全部で２２体。ついでにフロアＢ―２，Ｂ―１共に０』
「まあ、Ｂ―２はお前たちが倒した数が８体……Ｂ―１は職員もほとんど立ち入る必要はない場所だ。餌が近くにいなけりゃ捕食者もいない……か。……これは次のフロアで片が付きそうだな」
「リーダー、虫共を一か所に集めるのは賛成だがそれだとＳＧとＭ１３４は戦い辛いんじゃないか？」
『俺の心配はいらない。Ｍ１３４（コイツ）で殴り倒すもよし、壁際に集めてまとめて処分してやるもよしだ』
「多少暴れても構わん。……財団にはクレフ博士財団所属の問題児の一人。娘の為に元居た組織《ＧＯＣ（世界オカルト連合）》から財団に籍を置いた。……エージェント・ウクレレはもういない。因みに現実改変能力者。事件２３９―Ｂ　クレフ―コンドラキは有名な話。やコンドラキ博士財

団に所属する問題児の一人。《ＳＣＰ＿６８２／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ＿Ｋｅｔｅｒ／通称：クソトカゲ》を乗りこなしたことがある……。また、とあるＳＣｉＰを飼いならしている。事件２３９—Ｂクレフ—コンドラキは有名な話。のような前例がある。多少暴れたとしても後からもみ消しがきく。だとすれば問題はＤ＿４６１５７だが……」

「ああ、俺なら問題ねぇ。０距離から撃てば散弾だって飛び散らねぇ。スラッグ弾だってある。それにあのクソ虫共が化けてるのはほとんどが警備員や機動部隊……まあ、武装してる奴らの可能性が高いっていう話だろ？ならそいつらの装甲ごと打ち抜ければ後ろには飛び散らねぇだろうし問題ないだろ」

「……確かその銃はゲスト１—１のものだったな。……どうなんだ、ゲスト１—１……威力は大丈夫なのか？」

『……おそらくだが……貫通するだろうな。確かに私にとってはそこらの銃と大して変わりはないがお前たち人間目線で考えると……威力が強すぎる可能性が……いや、強すぎる。まあ、と言っても装甲を貫通しているだろうから貫通弾に当たっても死にはしないだろうが』

「……Ｄ＿４６１５７、これを一応持っておけ。ＣＺ７５—Ｂだ。その拳銃なら貫通はしないだろう」

「弾種は？」

「Ｇ２Ｒ　ＲＩＰ……まあ、もし機動部隊や警備隊以外の奴らに化けていた時に使え」

「ヒュ〜、ワンショットストップパーか。……確かにこれなら〝人間は〟一撃だな」

「予備のマガジンも２つだけだ。慎重に使え」

「分かってるよ。これでも銃の扱いにゃ慣れてるからな」

だろうな、お前の罪状じゃ銃の扱いに慣れていない方がおかしい。

こと銃の扱いや部隊の規律に関してだけならそこらの軍隊の兵士よりも遥かに上だ。

……だからこそＳＣｉＰ関連の任務も外されていないんだろうが

……。
「よし、お前等……そろそろ職員共が食堂に集まる時間だ。さっさと仕事を終わらせよう」
「『了解』」

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　グラス博士＞

ふぅ……なんだか久しぶりに一息付けたような気がします。
フロアＢ―３，第４区画へ向かえとは……これは誰が送ってきたものなのでしょうか……。
しかし、メッセージの送り主を見るに僕よりも立場的に上の方だと思うのですが……。
まあ、今は一息付けたことですしそれでよしとしますか。
……僕にとっては素晴らしいことにあの問題児達〝主に〟クレフ博士、コンドラキ博士、ブライト博士のこと。もここにはいませんし。
さて、今回は上からの頼みでとあるＳＣｉＰのメンタルチェックや財団（僕たち）に対する感情を聞き出したいとのことですし……それにできれば過去に何があったのかも。
……まあ、今回のＳＣｉＰも《Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ｜Ｅｕｃｌｉｄ》とのことなのでそれほど人間に対して恨みと言った感情はそこまで持ち合わせていないのでしょう。
と言っても今回の相手は２週間前の例の戦いでかなりの戦果を出していたと言う。
……とは言ってもその時僕はあの異次元？……まあ、どこかの組織が用意した空間に避難してたんですけどね。
非常に近未来且つ独創的な都市……絵の切れ端のようなものに触ってからあの世界に吸い込まれるように移動したので恐らくあの

世界を創ったのは《ＡＷＣＹ》かもしれませんね……非常に考えにくいことではありますが。
……おっと思考がそれていました……やはり最近働き詰めですね、これは。
しかし、メンタルチェックの仕事は明日……やはり今のうちにもう一度ＳＣＰ＿■■■■に関する報告書を読み直しておきましょう。
……ん？何だろう、向こうの方がうるさくなってきたような……それに人の数も増えてきている。
一体何をしているのか……流石にクレフ博士やコンドラキ博士のような殺し合いはしていないでしょうがもし誰かの喧嘩なら適当なところで仲裁をした方がいいでしょう。
……っと、今誰かの悲鳴？これは、もう流石に止めた方がいいですね!!
「君たち何をそんなに争って――――――――ダダダダダダダダダダダダダダ!!!!!!!!――――――――え？」
じ、銃声!?
とっさに身を屈め近くにあった机を横に立て身を隠す。
……ふ、普段からあ（クレフ博士とコンドラキ博士）い つ 等の喧嘩に巻き込まれないように、と身に着けた技がこんなところで発揮されるとは……世の中何が必要になるか分からないものですね。
って、そんなこと考えてる場合じゃないですよ僕!?
何とかしてこの場から――――――――ガシャン!!
あ、……隔壁が閉じた……。
え？……ちょっとちょっとまだ大勢中にいるんですよ!?!?!?一体誰が……あ、そうか!!手動レバーで閉められたのか……ってもっとやばいじゃないですか!!!
手動レバーでわざわざ閉めたって言う事は僕たちを逃がす意思はないってことじゃないですか!!!
「グラス博士ッ！こっちです、早く!!」

「わ、分かりました!!援護感謝します!!」
一人の機動部隊の方が僕を助けようとして援護してくれます。
……あれ？……此処にいる機動部隊の方は今どっちに向かっている？そちらは僕たちに銃口を向けていた方々の方向じゃないですか？
此処でいきなりだが少し人の心理のことについて説明したい。
人の心理とはその時その時、人それぞれであるがそれが状況下によっては当てはまらない時もある。
それは、その人がある重度パニックに陥っている場合である。
人はパニックを起こすとある程度の思考はできるがのそれを実際に行動に起こすことが難しくなる。
そうなった時に誰か他人が大きな声で指示を出すと咄嗟にその指示に従ってしまうと言うものだ。
つまりはそう言う事である。
……この人は……味方じゃない!!敵だ!!ッ!?まずい!?
ある程度のところまで来た途端機動部隊に成りすましている誰かが僕の方に向かって振り下ろされるナイフを間一髪のところで避ける。
「へぇ……。流石は心理学者ってところか？これで殺れると思ったんだが。……だが手遅れだったな」
「……貴方は……貴方達は何者ですか？一体何が狙いで？」
「お、まだそんなこと聞く余裕があったのか？まあ、どうせ死ぬんだ……教えてやるよ。俺達はお前らがＳＣｉＰとか言って呼んでる奴らさ……。で、狙いだが……まあ、この世は弱肉強食ってやつだ。今の俺とお前みたいにな。……だがこの財団とか言う組織を知ったことで俺達は気付いた……俺達はまだ食物連鎖の頂点じゃないってな。だからこそこの財団の他のＳＣｉＰを喰らう事で俺達はさらに強くなることにしたんだ」
さもそれが素晴らしいことかの様に機動部隊に化けている男はそう語ってくる。
……なるほど、先程から幾人かの方が拳銃とはいえ応戦しているの

に一向に倒れる気配がないのはそう言う事ですか。
それに、人を食い、人に化ける……そしてどうやら話の内容から定かではないが喰らった人の記憶が引き継がれているようです。
……この特徴……一度耳に挟んだ記憶があります。
確か……そう、《ＳＣＰ－３３３３－１》。
……皮肉ですね……僕にとっての初めての《Ｋｅｔｅｒ》との接触がこの様な形になるなんて。
まあ、いいでしょう……これでもしあの世とやらに行ったとしてもクレフやコンドラキ、ジャックにＫｅｔｅｒ童貞だのと笑われることはなくなりました。
……とは言ってもここで死んでやるつもりも更々ないですが。
先ずは時間稼ぎからでもしましょうか。
「それで？先程僕の名前を知っていたようですが何故知っていたのです？僕は名乗った覚えはありませんよ」
「ああ、それの事か。何、簡単だ。この体の元の奴の記憶にあった。お前を捕食するのは足掛かりに過ぎないんだよ」
「足掛かり？何のですか？」
「なんだ……それでも時間稼ぎのつもりか？安心しろ誰も来やしないさ。……まあ、答えてやるとコンドラキ、ジャック・ブライト辺りへの足掛かりだ。なんでも片やＳＣｉＰを飼いならしている。片や不死身ときた。どっちもお前の同僚で……どうやらそれなりに接触する機会があるようじゃァないか。俺達にはうってつけの存在だ」
……如何やら記憶を引き継げるのも完全ではないらしい。
コンドラキを相手するなど馬鹿げた話だ……そんな余裕をこいて勝てる相手じゃない。
それにジャックの不死の力はあのネックレスによるものだ。
ジャックを食べたところで不死の力は得られない。
「ク、フ……フフ……」
あ、ヤベ……無理なことを盛大に語っている姿を見ていたら笑いをこらえきれなかった。
「ほぉ……貴様この状況で笑うか。……死ぬ時も精々笑えたらいい

な」
ですよねぇ!!
やっぱり怒らせちゃったか……。
もうこっちに銃口を向けている状態。
……一応はボイスレコーダーを回していたが……如何やら必要になりそうだ。
もしこのサイトの異変に誰か気付いて人をよこしたのなら僕の仇を討ってくれると有難i――――――

――――――ガァン!!

――――――もう……次は一体何ですか?
「おい、今のは何の音だ?」
「分からん。……隔壁の方から聞こえた」
あれ?こいつ等じゃないのか?
だとしたら一体……。

――――――ガァン!!

また聞こえた。
次は目に見えるほど隔壁がへこんでいた。
……向こうに何かいる……いや、いるのは確実だ、一体何が?

――――――ガァアン!!!!

様子を疑い隔壁に近づいていた何体かのＳＣＰ―３３３３―１が吹き飛ばされた隔壁に巻き込まれる。
砂煙が立ち上がりよく見えない……だが何かがいる。
「おい、お前。様子を見てこい」

そう言われた一人が煙が立ち込める隔壁付近に入って行く。
……あの煙中々晴れない……まさか。
「ガァッ……アァッ!?!?――――――

き飛ばす。
赤子と大人だってもっとましな戦いになると言いたくなるほどに戦力差は歴然であった。
それに彼だけじゃない……煙の向こう、力づくで破られた隔壁の影から正確にＳＣＰ－３３３３－１を撃ちぬいている者もいた。
物凄い技術（テクニック）だ……見えない敵を正確に射貫くなんて。
そんな光景が少しの間続いていたがやがて動けるものは居なくなりひと段落着いたところで彼はこちらに来た。
『……大丈夫だったか？来るのが遅くなった。申し訳ない……』
「え……。いやいやいや、助けてもらったのはこちらさ。君たちが助けに来なければそれこそ僕は死んでいたしもっと被害は広がっていたはずだよ。命の恩人に謝られると落ち着かないよ」
『俺達が……俺がもっと早く来てさえいればもっと助かる命もあっただろうに……他の者も怪我をするようなことなどなかっただろうに……助けに来るのが遅くなってしまって本当に申し訳ない』
そう言って改めて他の職員の方にも頭を下げる彼。
……思ってたよりずっといい人じゃないか。
彼もまた他の所でも戦っていたのだろう……先ほどに付いた血痕や弾痕以上の傷があった。
その姿を見て怒る者はいないだろう……彼もまた必死に戦っていた証拠だ。
ふと、周りを見渡す。
あちこちに黒く大きな虫の死骸が転がっているが一つだけまだ人の姿をとどめている者がいた。
僕を殺そうとした奴だ。
既に虫の息のそいつに近づこうとしたが……
『あ～、そいつはまだ息をしています。もう虫の息ではありますが何をしてくるか分からない以上危険です』
「有難う……わざわざ忠告してくれる君は優しんだね。でも最期だからこそ言ってやりたいことがあるんだ……僕もこいつ等には怒っていてね」

『……ならばあまり近づかないように。俺も一応銃を構えておきます』
「それはいいね。その銃なら一発で事足りるだろう」
それだけ言ってから倒れているＳＣＰ－３３３３－１に近づく。
そいつはこちらを睨んでいる……まあ、自分が優位に立っていると思ったら次の瞬間には逆転されたらそうなるだろうね。
そいつを見返しながら僕はそいつに話しかける。
「そういえば君は先程どうせ死ぬのだからと言っていたけどそれが誰か言ってなかったね。……だけど誰が死ぬのか今分かった。……君だよ……。まさか自分が死ぬ前に色々教えてくれるなんて君は親切なんだね……有難う」
「クソガァ……クソクソクソクソォオオ――――――――――――――――――――ダンッ!!」
最期の力を振り絞って起き上がろうとするところで一発の銃弾が放たれる。
それを撃ったのは……僕だ。
僕が撃った弾丸は真っ直ぐとＳＣＰ－３３３３－１の胸に吸い込まれるように進み心臓を貫いた。
するとＳＣＰ－３３３３－１は一度だけ大きく跳ね動かなくなり他の奴らと同じように虫の姿となった。
「ほら、やっぱり死ぬのは君だったでしょ？」
事実かどうかは知らないが人には普段は怒らないが怒ると怖くなる人がいると言う。
……今まであまり考えたことはなかったが……どうやら少なくとも僕はそうらしい。
目の前に転がる虫の死骸を見て僕はそう思った。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十六話

＜ｓｉｄｅ　サイト１７職員＞

「ん？カント計測器に反応？……これは、不味いぞ……。……一体誰だ!?点滴を補充せずに放置した馬鹿は!?!?」
「博士ッどうしまｓ――――――こ、これは魔女のヒューム値がッ!?!?
博士、我々はどうすれば!?」
「とりあえず急いで点滴の補充だ!!急げばまだ――――――クソッ、カメラの先はまるで嵐だ!!どうなっているのかさっぱりわからん!!
……お前はＯ５に連絡しろ!!これは此処にいる職員だけではどうにもできん！他所から応援をよこすように頼んでくれ!!」
「わ、分かりました!!」
「……間に合ってくれよ……覚醒なんてしたら大惨事じゃすまないぞ……」

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

……はぁ……これどうすっかなぁ……。
俺の目の前にあるのは報告書。
それも財団のものではなく俺の……いや、俺達が作り上げたのＮＰＣが持って来た報告書だ。
と言うのも俺は普段財団の収容室にいるのだが流石に拠点のことをほったらかしにしておくことはできない。
そんなことをしたら当時の仲間に顔向けできないからだ。
だからこそ週末くらいはと拠点に帰っていたりするのだが……今

回ばかりは帰って来たくなかった……いや、それは言い過ぎだな。
帰ってこれたことは嬉しいが自分の知らない間にＮＰＣが問題を起こしていたとは……。
いや、凄い賢いはずなのに何でこんなことするの？
何さ、深海の奥深くに俺の彫刻画を作ったって……。
でももしかしたらそんなに大きくないかもしれない……きっとこいつ等もそれくらいの分別はある……筈。
『ふむ……彫刻画か……。リアンダ、この彫刻と言うのはどの程度の大きさなのだ？』
「はい、その彫刻を作ったキィアスによると半径３キロ程度の街を彫ったと。……彼によれば御方の姿もその彫刻に収めたと言っております。彼を此処にお呼びしますか？」
『ああ、……そうしてくれ』
「畏まりました。……貴女達、今すぐにキィアスを呼んできなさい」
「「はっ!!」」
いや、そんなに急がなくてもいいのに……もう行っちゃってるか。
それにしてもモモンガさんこんなのを一人で回してたのかよ……やっぱり廃人お化けはヤベェですわ。
まあ、回さないといけないんだけださ……。
だが街を彫ったとは一体……？
街の風景を彫ったってことか？

――――――――――――――――――――コンコンコン……
「失礼します。……第十六領域守護者、キィアス……只今御身の前に」
『うむ、招集ご苦労。よく来てくれた』
「いえいえ、御身の命とあらばたとえ何をしていたとしてもこのキィアス、御身を優先させていただきます」
やっぱり慣れねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!
何でだろう……設定ではもっとラフな感じになる様になってることを確認したはずなのに……。
『そうか、だがお前の忠義は既に理解しているぞキィアス』

「そんな、この身には勿体無きお言葉でございます……」
『さて、キィアス……貴様が何故ここに呼ばれたのかは理解しているな？』
「はい、先日私が作り上げた彫刻のことと存じ上げます。……しかしながら御方……あの彫刻はあの大きさでなければその芸術性を損なってしまうのです」
「貴様キィアス……御方の前で言い訳するとは不敬にもほどがるぞ!!」
『止せ、リアンダ。……続けよ、キィアス、何がどう損なわれると言うのだ？』
「はっ、……これは私を創造してくださいました《オールゲル》様の言葉ですが〝芸術とは理外にあってこそ真価を発揮する〟と仰りました。――――――」
何てことを言ってくれたんだあの人ォォオオオオ!?!?!?!?
ギルド創立メンバーにして〝自称〟俺のファン!?号目、プレイヤーネーム《オールゲル》。
……建築の才能は俺よりも遥かに高くまだ会ったばかりの頃は豆腐建築ばかりしていたもののたまたま同じクエストを一緒にこなしたことが切っ掛けで仲良くなりその時俺が建築の基礎を教えたことが切っ掛けで当時《ユグドラシル》の建築家集団のこのギルド内で上位を常にキープしていた男。
因みに俺のギルド《Ｃｒｆｔｅｒｓ　ｏｆ　Ｓａｎｃｔｕａｒｙ》の本元の土台である《世界樹》を作ったのもこの人である。
だが、そんな男だがかなり独特な感性を有していて〝本当の芸術は誰にも理解されることはない〟と口癖のように言っていた。
まあ、ある意味マッドである。
……そして彼が最も得意としていた造形は海中都市。
それは彼の創ったＮＰＣ《キィアス》にも反映されていた……いや、反映されてしまった。
「――――――と言う訳でございます」
あ、ヤベ……予想外のカミングアウトのせいで話の殆どを聞き逃し

ちまった。
何か長々と喋っていたがなんて言ってたんだ？
クソッ、どうしてこんな巨大彫刻を作ったのか聞き逃しちまった。
下手にもう一度話を聞こうとするのは上位に立つものとしてあまりよろしくない……。
こうなったら適当に話を流すしかないか。
『ふむ……キィアス、お前がその彫刻を彫った際周りには何か変わったものはあったか？』
「変わったもの、でございますか……？いえ、申し訳ありません特にそう言ったものは何も……」
『なるほど……それならばいい。もし誰かに見られていたのであればと考えたが杞憂のようだな。……しかし、キィアスよ、お前はこのギルドの情報部統括に任せてあるはずだ。その者が迂闊に外を出歩くことは流石にいただけん。よって謹慎二日をもって罰とする。だがこれではお前の好きなことを禁止することになってしまうな。……もしまた何か造りたいとなればその時は私に言え、《絵画》を用意しておく』
《オールゲル》さんのことで思い出したが確か此奴ってギルドの情報部統括だったんだよな……。
何でこんな暴走しちゃったのかなぁ……。
ま、次またこんなことが起こらないようにしてちゃんとそこら辺もしっかりしないとな。
「なっ……クラフター様!!今回の失態は私のせいでございます!!その私に御方がわざわざ絵画を用意するなど勿体無ありません!!」
『だから罰を言い渡した。謹慎二日だ。そしてこれは本来お前に渡そうと思っていた褒美ではない……キィアス、お前が外に行かなくてもいいようにする為の私からの配慮だ。今回に限っては私がお前の趣味を考慮していなかったことが原因でもある』
「し、しかし……これでは罰ではなく褒美をもらう様なもの……そのようなことをしては……」
『私は構わんと言った。お前は常日頃からこの拠点の為、私の為に働

いている。だからこその褒美を渡そうとは思っていたのだ。そして……謹慎に関してはこちら側にも非があるからな……初めからお前に言っておければこんなことにはならなかった』
「いえ、御方の考えを理解できなかった私目に非があります」
『もう一度言う。私は構わんと言ったぞ？』
「ッ!!……畏まりました。その罰、その褒美謹んでこのキィアスが賜らせていただきます……」
「よろしい。それでは、お前は謹慎に入れ。褒美は謹慎が終わり次第受け取るように」
「はっ!!失礼いたしました」
……。
ふぅ……やっと終わった。
話を聞き逃した時はどうなるかと焦ったが何とかなったな。
「クラフター様……その、先ほどの発言に異議を唱えてしまう様なのですが……本当によろしかったので？」
『よろしいもよろしくないもない……今回本当に非があるのは私だ。……リアンダ、皆に伝えておけ。不必要に外には出るな、と。この世界に住むほとんどの者は弱者であるが中には強者も混じっている』
「《サーキック・カルト》の幹部連や《壊れた神の教会》の《ＭＥＫＨＡＮＥ》の事ですね？」
『そうだ……《ＭＥＫＨＡＮＥ》に関しては好意を持てるが《サーキック・カルト》……いや、〝今の〟《アディズム》に関しては嫌悪感しか感じられない。元はそうでもなかったようだが……。それに〝九曜〟がいないとも限らん。あれらはまだその全てが倒されてはいないからな』
「御方々が戦ったと言われる《テユーポーン（世界を貪る者）》の事ですね？」
『そうだ。……奴は《ユグドラシル》の公式設定上不死身となっている存在だ。殺すことはできない。可能性があるとすれば《聖者殺しの槍（ロンギヌス）》くらいだろう。だが無いものねだりしても仕方が無い』
「だからこそテユーポーン（奴）を封印したのですよね？御方々の偉業の一

つでもあり当然私目も知っております」
『ああ、そうだ。あれほどの偉業を成し遂げたのはあれで最後だったか？……いや、対２ｃｈ連合の時もあったな。……だが言いたいことはそれではない。封印（アレ）はあくまで封印であり、討伐したのではない』
「……と言いますと？」
『時間だよ……。封印にも限界がある。それが時間だ。だからこそ我々は探さなければならない。《テユー（世界を貪る者）ポーン》を……そして《アトラス（支えし神）》の〝錠〟を……。既に《アトラス（支えし神）》の〝鍵〟は我々が持っている』
「なるほど……畏まりました。すぐにでも捜索隊に探すよう指示します」
『ああ、そうしてくれ……。……あまり願い事をするのは好きじゃないが……世界に奴がいることが無いようにと願いたいな……まあ、いたとして《ワールドエネミー》相手に願いなど通じる訳もないが』
ふぅ……初めはキィアスの事だったのに話が大分逸れていたな。
はやくこの積みあがった書類もオワラセナイト……。

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十七話

＜ｓｉｄｅ　小さな魔女（シガーロス）　本名はＳｉｇｕｒｒ（シガーロス）・Ｓｔｅｆａｎｓｄｏｔｔｉｒ（ステファンスドッティル）＞

ううう、……体が……重い……動かない……。

……もしかして、これも〝こわいひとたち〟のせいなのかな……？

でも、まだ私は生きてる……また、〝こわいひとたち〟にねらわれるのかなぁ……。

また……あんな目にあうのかなぁ……こわいよぅ……。

もうあんなに真っ暗な場所にいたくないよぅ……。

「だれか……だれか、助けて……」

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

う～ん、……どうしたものか……。

いま俺の目の前にある〝ある任務の為のバックストーリー〟……これのこれでもかと言うほどに簡潔にまとめられた説明文を殺人級の揺れを伴う装甲車の中で読んでいる。

と言うのもまあ、ここに至るまでに色々とあったようで俺が収容施設に帰ったとたん任務だってことで偽装のネームカードと財団の研究員の方々が着ている様な白衣、いつの間に測ったのか分からない妙にちょうどいいサイズの黒スーツ、そしてどっかの殺人事件で出てきそうなお面、この四点セット……いや、白衣に〝赤色〟のカードも入っていたから五点セットか……を貰って直ぐに装甲車に押し込まれた。

まあ、赤色のカードは所詮俺のは形だけのものらしい……つまり使

うことはないと言う事だ。
……どこで使うものかもわからんが。
因みに俺の偽名と主な担当ＳＣｉＰも用意されていた。
用意された名前はＡｂｂｏｎｄｉｏ（アッボンディオ）＝Ｒｏｓｓｉ（ロッシ）。
主な担当ＳＣｉＰは《ＳＣＰ―００１／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ　Ｔｈａｕｍｉｅｌ／《壊れたる神》》だそうだ。
……いや、まあ確かに研究（？）はしてないけどよく一緒にいると言われれば否定できない。
しかも《ＭＥＫＨＡＮＥ》は最近になってよく財団施設に来ていると言う噂がサイト内に広まりつつあると言う。
まあ、人の口には戸が立てられないと言うやつだ……これはどの世界でも同じことらしい。
それに財団側としても《ＭＥＫＨＡＮＥ》が姿を現し、尚且つ財団内のサイトに出入りしているのに全く調べていないと言うのは外聞的によろしくない、だけど無理やり調べるような真似はできない、そこでアッボンディオ＝ロッシと言う架空の人物にその調査をさせることで財団内に広まりつつあった疑問を解決してしまおうと言う訳だ。
だが、アッボンディオ＝ロッシと言う架空の人間は所詮は架空の人間……つまりは張りぼてと言う訳だ。
その為アッボンディオ＝ロッシに過去の履歴なんてものはない、経歴もない、人物像なんてものもない……あるのは名前と〝唯一ＳＣＰ―００１を担当している職員〟という設定だけだ。
だが、財団側はその〝唯一ＳＣＰ―００１を担当している職員〟という設定に目を付けた。
俺の人化はアイスランド人の特徴があるのだがそこは関係なかったらしい。
欲しかったのはＳＣＰ―００１と深く関係している人物（？）……つまりは俺と言う訳だ。
と言う訳で今の俺はアッボンディオ＝ロッシと言う研究者であり財団のエージェントであり現実改変能力を有する人材となった訳だ。

で、そんな架空の人物に成りすました俺が今どこに向かっているかって？

まあ、勿体ぶるようなことでもないから教えるが《サイト１７》っていうところに向かっているらしい。

で、何でその《サイト１７》に俺が向かっているかと言うと建前としては《ＭＥＫＨＡＮＥ》の管轄をそちらに移すことはできないと言う説明。

まあ、何でこんな事をわざわざ説明しに行くかと言うと財団の所有する全てのサイトの中でも《サイト１７》は人型のＳＣｉＰの収容や研究をしている所で今の《ＭＥＫＨＡＮＥ》の容姿は人型だ。

……まあ、あれは《擬人化の指輪》のせいでもあるが公式としては《ＳＣＰ―■■■■／Ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ―Ｅｕｃｌｉｄ／星の願いを》は人型のＳＣｉＰではなく球体型のオブジェとして通っている。

その為、偽装工作として《ＭＥＫＨＡＮＥ》の擬人化もＳＣＰ―■■■■が関与していると言うことになっている。

まあ、ある意味間違ってはいないのだが。

……因みに少し前に助けることになった《グラス博士》は最近になって俺が居るサイトの正式な職員として迎えられるようになっていたから俺の本当の姿が人型だってことを知ったらしい。

それまでは俺のことを例の対《サーキック・カルト》戦で使われた爆弾か何かだと思われていたらしい。

本人としては俺のことに対する守秘義務よりも問題児（？）達がいない分このサイトの方が遥かに楽だと言っていたが……まあ、相当厄介なＳＣｉＰだったのだろう。

ん？……そんなことより建前じゃない方は、だって？

それは……まあ、何と言うか問題ごとの解決らしい。

今回に限っては〝現実改変能力〟の使用も許可されていることから相当な厄介ごとらしい。

なんたって基本的に互いに不干渉を貫いているＯ５の一人から頼んできたと言う事だ。

何でも今回問題を起こしているＳＣｉＰは〝現実改変能力者〟と言う事でそのＳＣｉＰを殺さない、かつ完全に抑えきれるモノが必要なのだとか。

……まあ、財団の掲げてることからすれば収容違反をしたからと言ってはいそうですかと殺すことはできないだろう……何か手段があるのならばその方法をとることだろうしな。

で、その方法と言うのがたまたま俺だったって訳だ。

俺は今回のＳＣｉＰの記録に目を通していた時ある内容に目が留まった。

……ん？これは……なるほど、これは使えそうだ。

今回のＳＣｉＰの過去……それは財団が彼女を〝魔女〟と呼んでいたことがあると記載されていた。

この資料では彼女の年齢は８歳……つまりこの資料が書かれてから３年がたっている今は１１歳と言う事になる。

そして財団は彼女を特定の魔法しか使えないように思いこませることで被害の縮小を図っていたようだ。

そしてもし彼女がその特定の魔法以外の魔法を使ったのなら怖い魔法使いが来ると教えていたと書かれている。

そして今回の暴走……何が原因かは分からないがそれでも彼女はその特定の魔法以外の魔法を使っていると考えられる。

１１歳、魔法使い、そして魔法に関する決まり事……これハリポタじゃね？

確かあの作品は１１歳以上の未成年魔法使いは学校外で魔法を使ったら行けなかったし……だとしたらまだ解決の余地はある。

此処に記載されているように再び昏睡状態にするのではなく財団のエージェントとして育てることができるのではないだろうか？

しかしこれは俺の独断で決めれるような内容ではない……。

（クラスィー……いきなりで悪いのだが今回の任務は必ずしも昏睡にさせる必要はあるか？）

（むっ……ああ、クラフターか……。それはお前の判断に任せる。お前ならＳＣＰ―２３９の現実改変だろうが抑え込めるだろうからな。

それに今Ｏ５―０８との話し合いでサイト１７の被害から考えてこのままＳＣＰ―２３９を底にとどめておくことは困難と判断した。つまりはＳＣＰ―２３９は対現実改変能力において現在最高峰の技術を持つサイト―３４１の預かりとなった）
（なるほど……なあクラスィー）
（なんだクラフター）
（財団に所属する現実改変能力持ちのエージェントっているか？）
（ああ、いるにはいるが……まさかクラフター、お前）
（まあ、待て待て……ちゃんと道筋は考えてある。……ハリーポッターって知ってるだろ？）
（ああ、知ってはいるがそれと何が関係……なるほどそう言う事か。それなら確かに彼女との関係も取り持てる。だが、学校はどうする？生徒が居なければ話にならないだろう？）
（そのことに関しては問題ない。〝絵画〟を書くときに人も描いてやればいいだけだ）
（そんなことまで……。だが、彼女を監視する人員はどうする？スクイブにでもするのか？）
（いや、ドルイド系の魔法が使えるネックレスを渡しておく。……人員は任せてもいいか？）
（ああ、分かった。それについてはこちらから選定しておく。だが、他の教員はどうする？）
（そのことについては低レベルの召喚魔法で揃えよう。低レベルとは言え魔法に関するバリエーションは多いからな）
（下手に慣れないことをさせるのは少ない方がいいと言う訳か……。よし分かった。この案は私が評議会を通して正式な書類としておく）
（分かった。……だがとりあえず今回は〝魔女〟を学校に連れていくのではなくあくまでも手紙の通知と言う事にしておく。……今の時間で準備できたのはそれくらいだ。彼女が〝学校〟に通うまでには３ヶ月ほど待ってほしい。その間に〝横丁〟と〝汽車〟、〝学校〟を作っておく）
（分かった。その位であればこちらで何とかしよう。それと〝汽車〟

を創るなら〝駅〟も作っておいた方がいいぞ？）
（おっとそうだった……。まあ、それについても任せておけ）
（ああ、任せるとしよう。……では、頼んだぞ）
ふぅ……。
これで再度昏睡状態に、なんてことにはしなくてもいいはずだ。
後は俺の演技力になるのだが……まあ、これについては何とかなることを祈るしかない。
さて、と……上手くいきますかね？

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第三十八話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

――――――――――――――――――タッタッタッタッ……

今回の本当の意味での任務、〝小さな魔女〟の鎮静化。
鎮静化と言えば響きが怖いが要するに落ち着かせるという事だ。
……カームダウン、ネ！
「Ｄｒ．ロッシ。ＳＣＰ―２３９の場所はこちらです」
『了解した。……ああ、……なんとまあ、よく此処まで破壊できたものだ』
此処では言えないけど一応施設の強化ってのをしたことがあるような気がするんだけどなぁ……まあ、あの時はこの世界のＳＣｉＰがどのくらいの強さを誇るかなんて知らなかったし何ならＳＣｉＰそのものを知らなかったからな。
だが、そんなものは知らんとばかりに一部の壁が崩れ収容室はがれきが飛び交い竜巻がそこにあるかのような光景が広がっていた。
『なるほど……ここに来てようやく暴走の意味を理解した。……確かに並みの人間では近づけもできないだろうな。……無暗に近付くのは危険すぎる』
「へぇ～、分かってるじゃないか。そんな君にお願いがッ!!……あるんだが、このッ!!……コンドラキ博士少しの間抑えてもらえないかなッ!!?そしたらその間に俺がッ!!……終了させよう」
いや、その前にあんた誰だよ？
ここに来ていきなり話しかけてきたけどさ……。
そして、今アンタが戦ってる奴も誰だよ？
「てめぇ、やらせるかよッ!!……お前もッ!!……クレフの野郎と同じことをッ!!……しようってんなら、此処でッ!!……殺すッ!!」
あの～、なんだろう……二人で戦いながらこっちに話しかけて来るのやめてもらっていいですか？

とは言え、このままにしてたらいずれどっちか死んでしまいそうな気がするなぁ……。
まあ、とりあえず拘束しておきますか……。
《集団全種族捕縛（マス・ホールド・スピーシーズ）》
勿論かけたのは2人だけ……此処で〝魔女〟にかける必要はない。
『あ～、済まないが私にも任せられた〝任務〟があるのでな。……少しばかりそこでじっとしていてくれ』
「……これは、君のせいかな？……ロッシ博士？」
『ああ、そうだとも。そこで暴れられては困るからな。……そして、先程から私の後ろから忍び寄ってきている奴……私の仮面を取るのはやめておくことをお勧めする』
「な～んだ、気付いてたのか。……いつから気付いていたんだい？足音も立ててなかったと思うんだけど……」
『なに、足音を立てていなくても気付くさ。……君が生きているのならな』
まあ、嘘なんですけど。
本当は、今は見えていないけど実際は付けてる対暗殺者用の指輪が後ろからスニークしてくるのを察知してだけだったりする。
「わぁお……そんな理由で気付かれるとは思いもよらなかったよ。……まさか、君生きてる人間探査機だったりする？」
『なんだそれは。……まあ、答えは心音だ、とだけ答えておこう』
「なぁるほど……興味深いくらい耳がいい訳だ。……面白そうだね」
……ん？
今なんか面倒くさそうなやつに目を付けられた気がしたような……まあ、気のせいか。
でも、この世界なら多少耳が良過ぎるくらいの人間ならどっかに良そうだと思うんだけどな……。
O5だって……いやあの人たちは例外か……。
まあ、なんにせよこのくらいは許容範囲内だろう。
「おい、ジャック。そいつと戯れてないでさっさとそいつを如何にか

しろ。……先程から体が全く動かん」
「いやいや、その必要はないぞジャック。……そこの君、え～と、……ロッシ博士だったな。そこにいるウクレレ野郎……クレフ博士だけ拘束していてくれ。そしたら君がシガーロスの対処をしている間はこのクレフ博士と話合いをしておくから」
「オイそれだけはマジでやめろ、お前俺の首をまた圧し折るつもりだろう」
「ハハハ……クレフ、キミハナニヲイッテイルンダイ？」
「片言になってんじゃねぇよ。……オイマジでそれだけはやめろ」
「ねぇ、ロッシ博士。面白そ……実は仲良さそうだからしばらくこのままにしておいたらどうだい？」
『う、うむ……そのほうが良さそうだな。私にもやることがあるしな』
「「オイふざけんな、ジャック!!俺と此奴のどこが仲いいって!?」」
「そういうところじゃないかな？……で、ロッシー君。この後はどうするつもりだい？」
『ロッシー君……まあいい。……で、この後か？』
　と言うか君は彼等を煽るだけ煽ってそのまま放置とか……いや、まあ、……うん。
　後で殺されたりしないよな？
「うん、だって君は財団の保有する資料内では本来財団が決して場所を明かすことを良しとしない極秘のサイトから出ることはないはずだ。そして、君の担当ＳＣｉＰは《ＳＣＰ―００１》……それも本物を担当する財団内でただ一人の人物でもある。そんな君がわざわざこんな収容違反が起きているこの時期に《サイト１７》に来るなんてそういう意味だろう？」
「オイ、ジャック。……どういうことだ。どうして今ここでＳＣＰ―００１の話が出て来ることになる？」
「何、簡単なことさクレフ。ＳＣＰ―００１は様々なダミーが存在することは君も知っているだろう？だが、その中で《ゲートガーディアン》や《壊れたる神》の類……つまり、超強力な現実改変能力を有するＳＣｉＰの場合それらを上回る現実改変能力を有しておかなけれ

ば直接的な観察や詳しい調査はできない。つまり君は、あの子を抑えられるから来たんだろう？……何せ、今の私の予測が正しければ君の現実改変能力は〝神〟とさえ張り合えるのだから」
『……因みに黙秘権は？』
「それ自体が答えのようなものだよ？」
『……はぁ、……流石だな。ブライト博士』
「あれ？僕、君に名乗ったっけ？」
『人伝いに聞いたことがあるだけだ』
「おお、流石は僕!!まさか、ＳＣＰ―００１を担当してる博士にまで知られているとは思いもよらなかったよ！」
まさか、職員だとは思いもよらなかったが。
と言うか、ＳＣｉＰだと思っていた……いや、でもグラスはブライト博士はＳＣｉＰだとか言ってた様な……あれ？ネックレスだったか？……まあいいや、後で、また教えてもらおう。
「で、そろそろ本題に入ろうか。……どうやって止める？……明確なイメージはあるのかい？」
突然真剣な表情になったな……まあ、先程と言い普段との温度差が凄い人と言うのは分かった。
……それにしても明確なイメージか……。
『ブライト博士……それは簡単なことだ。あの子が今暴走しているのは〝恐怖〟によるものだ。ならば先ずはそれを取り除く。……こんな風にな』
《獅子ごとき心（ライオンズ・ハート）》《幽界の花園（ガーデン・オブ・アストラル）》
怯える〝魔女〟から恐怖を取り除き、辺りに飛び交う瓦礫は花弁となる。
……見栄と言うのは大事なものだ、確かそう言っていたな彼は。
《ユグドラシル》時代、圧倒的不利を覆した《【ＡＯＧ】対【２ｃｈ連合】戦》。
その立役者の一人である《るし☆ふぁー》の言っていたことだ。
何でも人と言うのは効果よりも〝見栄〟に左右されやすい。
ならば、恐怖が無くなった眼差しで奇麗な花々を見せて差し上げよ

う。
そうすればこちらにも心を許してくれる……筈だ。
床に落ちた花弁の道を進みながら〝魔女〟の下に歩を進める。
……さて、ここからが本番だ……気を付けろよ、俺。
『やあ、シガーロス君。私と会うのは初めましてだね』
「……貴方は？……もしかして〝こわい魔法使い〟さん？」
『いやいや、私はアッボンディオ＝ロッシ。君にこれを渡すためにここに来たのさ』
そう言って懐から一つの封筒を取り出しそれを彼女に渡す。
彼女はその封筒と俺の顔を交互に見てから封を開ける。
「拝啓、親愛なるシガーロス＝ステファンスドッティル殿。この度は合衆国魔道魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと心よりお喜び申し上げます……って、え、え、……ど、どういうことですか!?」
『まあまあ、……ほら、続きを読んで』
「え、え～と、……これなんて書いてあるんですか？」
〝魔女〟が此方に聞きかけてくる。
読めない字でもあったのだろうか？
彼女の持っている手紙を覗いてみるとあちらこちらに文字がばらばらに散らばっているのが見えた。
ああ、そう言えばさっきここに来るまでにこんなギミックも織り込んだっけ……
『ん？……おっとこれは……。ここら辺に息をそっと吹きかけてごらん』
「……？」
彼女は言われたとおりに息を吹きかける。
すると、バラバラに散らばっていた文字は紙の上を滑り今度は一つの文章を作り出した。
「わぁ!!すごい!!魔法使いってこんなこともできるんだ!!……
えっと……新学期は４月１日より開始いたします。２月２１日までに同封筒を用いてお返事ください。……これは何と読むんですか？」
あれ、まだ分からないところがあったのか？

もう一度覗いてみると彼女が指で指示しているところにはちゃんと文字があった。
今度は普通に読めなかった様だ。
『それは敬具って読むのさ』
「あ、そうなんですか！ありがとうございます!!敬具……合衆国魔道魔術学校校長アッボンディオ＝ロッシ……え？このおなまえって……」
『どうも、シガーロス。現合衆国魔道魔術学校校長アッボンディオ＝ロッシ……改めて入学許可、おめでとう』
それを聞いた彼女はしばらくの間呆けた後にその眼に大粒の涙を浮かべた。
……って、えええええええええええ!?!?!?
ちょっとその反応は予想外過ぎるんですけどぉオオオ!?!?
ああ、もうほら泣かないで……。
「……わ、私は……」
ん？
「私は、……学校に、通っても……いいんですか……？……私は、……やっちゃ、ダメな、魔法を使って……」
あ～、なんかそんなこと報告書にもあったな。
まあ、でもそれは此処に来るときに確認している。
その質問に対しても予想済みだ。
『なに、シガーロス。君がその魔法を使ったのは11歳以下の年齢だ。つまり君はその規定に引っかからない』
「き、規定……ですか？」
『ああ、そうだとも。魔法界における規則、え～と、第何条だったかな……まあいいとにかく、11歳になるまでの間に本来特別な資格なしに使ってはいけない魔術であったとしても使ってしまうことを大目に見られている。……まあ、また君が同じことをしようとするなら君は11歳だからこの規則は適応外になるけどね』
「で、でも!!財団の先生達が……」
『あ～、それはたぶん何かの伝達ミスだろう。本来であればよほどの

事じゃない限り大目に見られるし、よほどの事であったとしても魔法省から通達が君に直接届くだろうからね』
「そ、そうなんだ!!……ところでその魔法省って言うのは？」
『まあ、その辺は追々学校の方で習うことになると思うよ？』
「あっ、そうなんだ……」
『そうさ、……学校での楽しみを此処で奪う訳にはいかないだろう？……それよりもあそこで固まっている彼らに言う事があるんじゃないかな？彼等は君が健やかに育ってくれるように色々と衝突していたようだけどそれでも君の為を思って行動していたんだから。だったら、迷惑を掛けたらどうするか、わかるね？』
「……はい」
『よろしい。……では行ってらっしゃい』
彼女はそのまま固まっている彼らの元へ向かう。
……もういいだろう、捕縛を解除してやろう。
……あれ？何か大事なことを忘れている様な……。
「クレフ先生、コンドラキ先生、約束を破ってつかっちゃいけない魔法を使ってごめんなさい。……そのせいで迷惑かけてごめんなさい……」
そういって彼女はぺこりと頭を下げる。
その姿を見ていたクレフ博士が近寄り……ん？クレフ博士？
……。
あああああああ！あの人最初に〝魔女〟を殺そうとしてた人じゃん!!!!
ヤベェ!!今すぐ止め――――――
「はぁ……。俺の方こそ怖い思いをさせて悪かったな。……その～、なんだ……お前はまだガキなんだから迷惑かけるくらいがちょうどいいってのにな……一々怒ってた俺の方が大人げなかったよ……ごめんな」
あれ？……殺そうとしてない？
どういうことだ？
「そうそう!!シガーロス、悪いのはぜ～んぶクレフのせいだって!!気

にすんな！俺はそんなに怒って無かったろ？」
「んだとぉ!?おい、コンドラキ!!お前それどういう事だ!?……怒らないから言ってみろ!?」
「……僕、実は空気だった……？」
う～ん、……どういうことだ？
さっきまでの殺伐とした空気は一体どこへ？
「ああ、ロッシ博士……ちょ～っとこっちに来ようか？」
『怒？』
クレフ博士にいきなり腕をつかまれ隅っこの方へと連れていかれる。
そして、肩を組んでコッソリとこちらに話しかけてきた。
「ロッシ博士、アンタがＳＣＰ―２３９……シガーロスを管理下に置くってんならそれでもいいが少しでも彼女を〝壊す〟ような真似をしてみろ。……例えそこが極秘の場所だったとしてもお前を見つけ出してその仮面のど真ん中に風穴を開ける。……いいな？」
『……それについてはしっかりと責任を持つつもりだ。……それはそうと先程のは？てっきり貴方は彼女を殺したいものかと』
彼はそれを聞いた途端とても言いにくそうに頭を掻き再び肩を組んできた。
「それについては、まあ、……あんな〝封印〟紛いのことをするよりもいっそのこと楽にしてやった方がいいと思ったのさ」
『……嘘ではないな』
本当のことも言ってないだろうが……。
「そうそう、嘘ではない。……いい勘持ってんじゃねぇか。ま、そう言う事さ」
そう言い残して彼は再び何処かに去って行った。
……気になる点は幾つかあるがそれは今考えてもどうしようもない。
さて、……彼女を連れて帰る前にこの部屋を直しておかなくてはいけないな。

<side out>

# 第三十九話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

《サイト１７》からこんにちは。

どうも、クラフ……アッボンディオ＝ロッシです。

……とまあ、こんな冗談は置いておこう。

それよりも何故未だに俺がサイト―１７に居るのかと言うと……まあ、簡単に言うと《小さな魔女》を収容するための部屋がサイト―３４１には存在しなかったためである。

と言うのも元々サイト―３４１に関してはＳＣＰ―■■■■を収容するためだけに作られた施設である。

つまりは、俺に関係するＳＣｉＰオブジェクトを管理する部屋、システムは揃っているのに俺以外のＳＣｉＰオブジェクトを収容しようとすると既に埋まっている収容室を開けなければならない。

……まあ、そうは言ってもその収容室に置くのは〝絵画〟になるんだけどな。

だが、絵画世界を創るために必要な情報量を〝絵画〟に描く場合世界を描く訳であるため当然必要な面積は大きくなる。

そして、その巨大な〝絵画〟を設置するわけなのだから必要な部屋は大きいものでなければならないのだ。

つまるところ〝増設〟である。

そしてその〝増設〟をしている期間、〝魔女〟を監視しておくのが先日監督権の移った俺と言う訳だ。

だから今、〝絵画〟を描くことができる時間は彼女が寝ている間……つまり深夜帯しかない。

……それを連日とかブラック企業も真っ青なくらいだよ……

まあ、《疲労無効の指輪》は付けてるけども。

と言うか付けてないとやばい。

今の俺は〝人化〟している状態……つまりは、疲れれば睡眠欲求も出て来る訳だ。

だったら〝人化〟を解除すればいいじゃないかって？

それができれば苦労はしない……再度言わせてもらうがここはサイト—17であってサイト—341ではない。

つまりは、俺がSCP—■■■■であること、また〝公式〟の文書以外のSCP—■■■■に関する情報の一切を知ることが許されていないと言う事でもある。

だからこそ、〝人化〟は解除できないし人化した際の顔も隠さないといけないため仮面も外すことができない。

……だから本当に困るのだ……俺の付けているこの仮面を誰が最初に取ることができるかと言う賭け事をされるのは。

……一体誰だそんなことしてる奴。

おっと……考えがそれていたな。

やはり、如何に《疲労無効の指輪》を付けているとは言え精神的な疲れもあるのだろうか？

しかし、絵画世界に関してはその大部分が既に描き終わっている。

……他に必要なものは最後の教師役（ピース）……それ以外の事は、〝絵画〟の中の住民が上手く世界観を演出してくれることだろう。

だからこそ、今急がねばならないのはクラスィーが選出した職員に〝学校〟が始まるまでの期間にどれだけのことを教え込むことができるかである。

彼女を監視するのはいいが、それは〝教員〟としての立場で監視しなければいけない。

何故ならば彼女を監視する際同学年であったとしても確実に仲がいい関係に慣れるとは限らない……そして、同学年として監視するとなると〝魔法〟を本当に覚えないといけなくなる。

そんなことをしていると今度は彼女の監視ができなくなる。

だったら何か一つのことを覚えさせてそれを専門としていると思わせた方が遥かに監視しやすいし、もし彼女が卒業したとしてもその教師が持つ彼女とのパイプは今後に活用できるだろう。

あと二か月と少し……か。

例えたった一つ分野に絞って教えたとしても1ヶ月は研修……もとい教習の時間が欲しい。

最悪、専門を《森祭司(ドルイド)》とするのならば基礎だけでも知っておけば大事には至らない。
……まあ、かなり危なっかしい教師にはなるが……。
しかし、ないものを強請っても仕方がｎ――――――――
「……んぅう……。……先生？」
『おっと……。まだ起きていたのかい？シガーロス。……もうすっかり寝ていたのかと思ったよ。でも、もう遅い時間だから早くベットにお帰り……』
「……うん。……でも、何だか目が覚めちゃった……」
『ん？……そうか……目が覚めちゃったのか。……なら、君が眠るまでの間何かお話でも聞かせようか？』
「お話？……なら、他の魔法使いのお話がいい！私、他の魔法使いさんの話も聞きたい!!」
『他の魔法使いの話かぁ……。なら、先生の話でもいいかな？』
「先生の？……例えばどんな話ですか？」
『例えば……おっとその前に、このロケットを身に付けておきなさい。君は他の子よりも魔力が強いから何が切っ掛けで魔法を使ってしまうか分からないから』
「はぁい。……で、どんな話なんですか？」
一応は《魔術無効化(アンチ・マジック)》を付与してあるロケットを身に付けさせたからこれで彼女が何かの拍子に能力を使う事なんてないだろう。
う～ん、しかし……どんな話をしよう。
……正直考えてなかった。
……ならいっそのこと、あれを話してあげようかな……。
『う～ん、……なら、先生が今よりももっと若かった時の話をしよう』
「……先生はまだ若いですよ？」
『ハハ……まあ、見た目だけは若いからね？』
「え……じ、じゃあ、実際は？」
『さあ？……まあ、そんなことより話を戻すとしよう。今から話すのは先生が今よりもっと若かかった時、《氷の谷の白い遺跡》を探しに冒険したときの話だ――――――――』

俺は、聞き手であるシガーロスに此処とは違う別の世界で起きた冒険談を話した。
それは、かつて《ユグドラシル》で仲間と供に過ごした日々の思いでであった。
それを、この世界線から逸脱しすぎないように、そしてかつての日々から離れすぎないように彼女に話した。
彼女は聞き手上手だった。
話の合間に相槌を打ったり所々質問を投げかけてきたり。
その瞬間だけは今はもう戻ることもできない……かつての日々にまるで戻ったかのような気持ちになれた。
「それでそれで!?……その遺跡を乗っ取った氷の巨人を倒した後先生たちはどうしたの?」
『それは勿論、最っっっ高のお宝を見つけたさ』
「え!?最高のお宝!?!?……それってどんなものだったの!?」
『お宝がどんなものかって?……それは私にとっては一瞬しか持つことが許されなかった。だが、この世に存在する他の如何なる宝石や黄金よりも美しいモノさ』
「え〜!!それは答えになってないよ、先生!」
『アハハ!……まあ、君もいつかは見つけることができるだろうさ』
「も〜、教えてくれるつもりはないのね。……まあ、いつかは見つけれるんだったらその時また答えを教えてよね!」
『ああ、……勿論さ』
「約束よ!」
『分かった分かった……。ほら、今度こそ寝なさい……よい子はもうとっくに寝る時間だぞ?』
「もう、子ども扱いしないでよね!!……まあでも、おやすみなさい。お話ありがとう」
『ハハ……君も大分態度が砕けてきたな。……お休み』
君ならきっと見つかるさ……君だけの最高の仲間(タカラモノ)が。
例え、この世界が君にとって過酷な時間を作ろうが君の仲間(タカラモノ)だけは君と一緒にいてくれるだろうから。

……俺もそうであったように。
『はぁ……。駄目だな……どうも昔のことを思い出すと最後には湿っぽくなる』
「これは、驚いた。アンタにもそんな風になるだけの感情があるんだな、ロッシ博士」
ん？いつから居たの？
俺は後ろからかけられた声に言葉に振り向く。
そこには一人の男が背中を壁にかけてこちらを見ていた。
『驚いたとは心外だな、クレフ博士。私にも感情位ある』
「へぇ……。本名、アッボンディオ＝ロッシ。唯一ＳＣＰ―００１を任された男。しかし、その一方その職員は書類上の……いや、形式的にしか存在していない人物。……俺なりにアンタのことは調べさせてもらった。シガーロスを〝兵器〟にするような人物かどうかってな」
『……それで？』
「……まあ、あんたの予想通り記録には何にもなかった。アンタの過去の詳しい記録、どうしてＳＣＰ―００１を任せられるようになったのかという経歴さえもな。……なあ、アンタ教えちゃくれないか？……アンタ、何者だ？」
マジかよこの人……あれからほんの数日しかたってないってのにもうそんなに調べ上げたのか。
……まあ、それが子供の為って理由なら疑う事はしないが。
『……その質問に回答するためには、俺の権限では足りていない』
「ふぅん……まあ、いいけどさ」
だが、……
『だが、俺の名前はアッボンディオ＝ロッシ。それが回答だ……クレフ博士。これ以上は答えることはできない』
これくらいなら答えよう。
と言ってもこれくらいしか答えられないんだけども……俺、色々と制限がかかってるし。
「……俺が言うのもなんだが、アンタ意外に人間だね」

『誉め言葉として受け取っておこう』
「まあ、聞きたいことは聞いたからさっきのことは聞かなかったことにするよ」
意外に人間ってなんだ？
訳の分からないことを言って帰って行ったぞ、あの人。
……なんだか俺も疲れたな……精神的に。
起床時刻までまだ４時間ほどある……今日は久々に休もう。
ここ数日はずっと人化してる状態で起きてたから精神的に疲れてんだわ、きっと。
そう思い俺も久方ぶりのベットに潜った。
＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第四十話

＜ｓｉｄｅ　???＞

私は、初めはただ生きていると思った……思っていた。
だがそれは幻想で私は死んでいた。
でも、それでも生きていた……あの子を助けたその時までは……。
無理だと思った……間に合う訳がないと思った……だが違った。
私の手は届かずとも私の意志は届いていた。
……そして私は理解した……私は異常なのだと。
だから私は願った……せめて既に死んでしまった私を殺してくれる場所を……。
だというのに……だというのに、私は財団に来た。
……自分でも本当は気付いているんだ……私は死にたくなんかないと言う事に……。
私は……私は……私は、……一体どうすればいい？

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

再びサイト―１７からこんにちわ。
最近になって渡された端末を確認したらメールが１０００件を超えていたロッシ博士です。
……１０００件はな……流石に多いんよ。
だから勘弁してくれ……《ＭＥＫＨＡＮＥ》……。
と言うか何処で俺の連絡先を知ったんだ？
……。
うん、きっと考えちゃいけないことだな、きっと。
まあ、そんなことよりもだ。
今回は何と日本出身のＳＣｉＰの調査……もとい、実験のようなも

のをするとのこと。
　そしてその仕事を俺に押し付けてきた〝ブライト博士〟によるとそのＳＣｉＰは本来であれば別のサイトに収容されているとのことであったがＳＣＰ―２３９が移動するに伴いサイト―１７に収容されることとなったらしい。
　……まだ、〝魔女〟がこのサイトにいると言う事を気に掛けてはいけない、と言うのはブライト博士の談。
　まあ、シガーロスについてはロケットを付けている限り〝能力〟を使う事なんてできないから問題はさしてないだろうが……。
［ロッシ博士、……時間です。只今よりＳＣＰ―６５０―ＪＰとの会話を開始してください］
『ああ、了解したよ。……で、君が《ＳＣＰ―６５０―ＪＰ》だね？……まあ、色々と話したいこともあるんだが先ずはこれかな？……私は君を何と呼べばいい？』
　そう言って俺は目の前に座る男に声をかける。
　その男の格好は茶色いコートに長袖のシャツ、ジーパンを履いていて靴は革製、そして首には赤いマフラーを巻いている。
「……私については資料にある通りＳＣＰ―６５０―ＪＰと呼んでもらえれば……」
『……いやいや、それは君に与えられた型番であって君の名前じゃないだろう？』
「それについては……ただ私が名前を教えたくないだけです」
『あれ……？もしかしてだけど私の事嫌いだけだったりする？』
「いえ、……そう言う訳ではないので……」
　あ、よかった。
　俺のことが嫌いなのかなと思たぜ。
　何で初対面の段階で嫌われてんのかと思ったが俺の早とちりか……。
『それを聞いて安心したよ。……もしかして嫌われちゃったのかと思ったからね』
「それは何と言うか……すいません」

う～ん、……何と言うか、この人本当にＳＣｉＰ？
余りにも普通過ぎる気がするんですけど……。
『ああ、別にいいよ。嫌われてないと言う事が知れただけでも幸いだ。……ところで今回私は君との会話を任された身ではあるんだけど恥ずかしいことに何を会話すべきか分からないんだ。……だから、君の悩みや相談事……何かあれば聞くつもりだよ？』
「はあ……」
うぐっ!?
呆れられちゃったよ。
……だって仕方ないじゃないか!!俺だってこんなことする予定はなかったんだから!!
クソッ、ブライト博士め……今朝の段階になっていきなり仕事を押し付けて来るとは……。
でも、何か相談事とかないかなぁ？
だってそれが何にもなかったらこの人と会話するために与えられた時間ずっと無言のまま終わることになるぞ……。
「でも、……相談事と言うなら少しだけ……」
『ん？……何かな？』
「私は一体どうすればいいのでしょう？」
???
どう言う事ぞ？
『すまない……君がそこに行きつくまでの経緯と事情を詳しく教えてくれないか？流石にそれだけ言われてもさっぱり分らん』
「ああ、……そうでした。てっきり私に関しての報告書には目を通しているのかと……」
だーかーらー、それはブライト博士のせい……っていたところで分からんか……。
『ハハハ……それに関しては本当に申し訳ないな。実のところ君との会話をする担当が私になったと言う事を昨日知ったところなんだ。……だから、まだ君に関しての資料をすべて読み終わっていないんだよ』

「なるほど……そう言う事でしたか」
そうだよ……。
まあ、嘘だけどね……。
実際にこの話が来たのは今朝、そして空き時間を使って何とかこの人の資料は読み切った。
……まあ、理解しずらいところもあったが。
特にこの人を勧誘しようとした謎の組織とか……。
そんなことを考えながらも彼の話を聞いていく。
小さいころから違和感自体は感じていたがそれが何か分からなかった事、それに気付いたのは自身の娘を助けようとした時だと言う事、その時に自身が既に死んでいたと気づいたこと、自身を殺してほしいために財団に来た事、そしてもしかしたら自身は死にたくないと思ってしまったろくでなしだと言う事。
俺は彼が話したそれをただじっと静かに聞いていた。
だが、そのおかげで分かったことだが資料と少し違う点があるように思える。
『なあ、君……本当はもう気付いているんじゃないか？』
「何にですか？」
『……君、死にたいとか思っていないんじゃないかな？』
「……」
『その沈黙は肯定と捉えるぞ。……そのうえであえて言おう……君は決してろくでなしではない』
その言葉に対して彼が反応する。
まるでお前に何が分かる、とでも言うかのように此方を強く睨んでくる。
「言葉だけでは何とでも言える。……君みたいに甘い言葉をかけて相手を喜ばせる。……その後のことなど考えずに」
『まるで、既に経験済みみたいに言うな……。だがしかし今の言葉は決して君を喜ばせようとしたわけじゃない』
「先ほども言ったぞ？……言葉では何とでも言える」
あ～、さっきの発言は地雷だったかぁ……。

まあ、こういう相手との接触は前世で慣れてるし別に構わないんだけどね。
『まあ、そうカッカするな。……そうだなぁ……先ずは君は自分のことを〝ろくでなし〟と言ったがそれは少し違うんじゃないか？』
「……どういうことだ？」
お、食いついた。
『簡単なことだ。……もし君が本当に〝ろくでなし〟ならその時娘を救ったりなんかしなかっただろう？』
「それは親として当然のことだ」
『そう！当然の事。だがな、その当然の事すらはなから諦めて言い訳ばかりする奴のことをろくでなしと言うんだよ。……まあ、これはあくまで私の持論ではあるがな』
まあ、娘を救っておいて自分のことをろくでなしとかちょっと自分に厳し過ぎると思うんだよなぁ。
まあ、そう言う人なのかもしれないけども。
「……ああ、そうだとも。私は私の娘を救ったさ……。それについては今も誇りに思っている。だが、私が私をろくでなしと言うのはそれが理由じゃない！私は自分を殺したいと思ったはずなんだ！なのに財団に来た！殺し屋の家でも戦場でもなく私を保護してくれる場所へ来た!!私は自分が生きていてはいけない存在だというのに、本当は殺されることが怖くて、自分を守ってくれそうな所をいつの間にか選んで飛んできてしまった、意気地なしで……
……人でなしなんだ」
ふむ……。
つまりは、死ぬことが怖くなったから人でなしと……。
『お前は馬鹿か？……そんな答えのないものに悩んでも何もないだろうに』
「な、に……。人が真剣に悩んでいるのに、それを馬鹿!?馬鹿だと!?!?ふざけるのも大概にしろ!!!」
『ふざけてなどいない。髪の毛が良く跳ねる、体臭がきつい、声がひび割れている、……これらは全てその人の特徴に過ぎない』

「なに、が言いたい……？」
『お前のそれも〝特徴〟だよ。たかが死体が動く？それがどうした？お前の〝特徴〟だろ』
「だが、私は殺されることが怖くて――――――――――」
『それの何がおかしい？……人なら誰もが死ぬことを恐れる。……それを恐れないのは一部の例外を除く〝狂人〟だ』
「だが、……だが、私は既に死んでいる筈の人間なんだ……。私は、私が怖いんだ。私は、生まれた時に既に死んでいる筈だった……だとすれば何が私を動かしている？……教えてくれ……何故私は……生きている？」
何故私は生きている？……か……。
難しい……難しい、が簡単だ。
『なぁ……お前は、人がいつ死ぬか知っているか？』
「……」
『まぁ、知らんでも無理はない。……ナイフで刺されたとき？違う。心臓が止まった時？違う。生物学的に死んだ時？違う!!……人は、忘れられた時に初めて死ぬ!!お前は、お前のことを親に忘れられたのか!?お前は、娘や妻に忘れられたのか!?どうだ!?!?!?』
「まだ、……忘れられていない」
『なんだって!?声が小さい!!』
「まだ、忘れられていない!!!!」
『なら、……お前は、まだ生きている。お前は、〝ろくでなし〟などではない……〝人〟だ。少し変わった〝特徴〟を持っただけの〝人〟だ』
そう俺が言った途端彼は泣き崩れた。
色々と限界だったのだろう。
確かに色々と言ったが彼の抱えていた悩みは一人では解決できるような問題ではない。
そして何より薄々気付いていたがこの男はいろんな意味で〝普通〟過ぎる。
俺みたいなやつからしたら馬鹿げた悩みかもしれないが確かに此

奴からしてみればとても大きすぎる悩みであったことも想像しやすい。
それらが一気に吹っ切れたのならそれはどれだけ喜ばしい事か。
ふと俺は懐から真っ白なメモ帳とボールペンを取り出し彼の前に置く。
『ほら、そんなとこで一人泣きしていてもしょうがないだろう？お前にはまだやるべきことが残っている筈だ』
俺に渡された記録では此奴は1度だけだが、家族に会っている。
そして財団側もそれを許可していた。
だが、家族に会ったのはそれっきりの筈……それ以降は本人が頑なに家族と会う事を拒んでいた。
そして彼の家族もまた財団の監視下にある。
……と言ってもご近所的な設定で過度な干渉はしないようにしているようではあるが。
まあ、何が言いたいかと言えば彼が家族に会いたいと言えばそれなりに取り計らってくれると言う事だ。
『家族に会うんだろ？ならそれ迄に何を話すかとかそういったものをそれに書いてまとめておけよ。……いざと言うときに何も話せなかったらもったいないだろ？』
「……私は……家族に会う資格はもう……」
『やっぱりお前馬鹿だな。資格なんて要らないのさ。そこら辺進んでりゃぁ不思議と落ちてるものだよ……。……免許以外はな』
「だが、私はもう何年も妻と娘に会っていない。……会おうとしなかったんだ。そんな私が今更……」
『今更も何もあるか……。お前が娘や妻に会いたいか会いたくないか、それだけだろう？』
「私は……俺は……会いたい。もう一度だけでもいい……妻に……娘に……あ〝い〝だい〝」
おっと、やっぱりコイツ普通の人間だな。
何かと言いつつもやっぱり寂しがり屋で、それでも虚勢を張って、無理をして、でも本心じゃやっぱり寂しくて……本当にただの人間

だ。

『……今は存分に泣け。そして家族に会うときは存分に笑え。いつ頃通るか分からんが〝申請〟くらいは俺からしておこう』

「あ〝り〟がとう……。博士」

『どういたしまして』

さて、そろそろ時間か……。

早速彼の為に申請をしておこう。

一応、彼に関する資料の中で申請さえすれば家族に会うことができるとある。

一秒でも早く彼が再び家族に会うことができるように申請をしに行かなければ。

＜side out＞

# 第四十一話

〈Ｓｉｄｅ　クラスィー〉

「ふむ、……この報告書はアナンタシェーシャのものか。……やはり、倫理委員会からは許可が出なかった様だな」

オフィスで上げられた報告書を確認していたところとある物を見つけた。

《Ｓｃｐ―３０００／ｏｂｊｅｃｔ　ｃｌａｓｓ―Ｔｈａｕｍｉｅｌ／通称：アナンタシェーシャ》

……高品質の記憶処理素材《Ｙ―１０》を作り出すＳＣｉＰ。

しかし、その過程で人を食す事から前々より議題になってはいたな。

……そう言えばコイツも”神”の一種だったな。

人を愛す神（ＭＥＫＨＡＮＥ）、過ちを正す神（ＳＣＰ―２０００）、崩壊を招く神（ヤルダバオート）、……そして、忘れられる神（アナンタシェーシャ）。

そう考えると”神”という輩も一様に面倒とは限らんな。

まあ、ＳＣＰ―００１（ＭＥＫＨＡＮＥ）に関しては最近不安になって来たが……いや、自ら面倒を起こそうとしない辺り此方としては嬉しいが。

如何せん、何分クラフターが優秀過ぎた。

……なるほど、そう言えば奴（クラフター）も異界では《創造主》だったな。

そう考えれば”神”とか言う輩の一端ではあるのか。

「……いっそのこと”神”と呼ばれるＳＣｉＰを一括りに纏めるか？」

……。

いや、それは良策とは言いがたいな。

「せめてもう少しでもクラフターについての情報があればな……」

確かに彼は我々に対して協力してくれてはいるが……何処まで協力してくるかなどというのは分からない。

「あまりに優秀すぎると言うのも考えものだな」

贅沢すぎる悩みでもあるが。

「待てよ、……そう言えばアナンタシェーシャの監視に使っていた潜水艦もそろそろ退役だったな」
……これはバカな考えなのだろうか？
合理的ではある。
……。
「まぁ、計画だけでも立てておくか」
クラフターに新型の潜水艦を建造して貰う……此処だけ文面を切り抜けばまだまともな様に感じる。
しかし、実際はこちら側の勝手な解釈ではあるが異界の”神”の様なもの……いくら我々に協力的だったとしてもそこは変わらない。
「それに問題はそれだけでもない、か。……上に立つと言うのも考えものだな」
我々が彼奴に頼りすぎれば奴も大抵はそれに答えてくれるだろう。
しかし、本当に問題になってくるのは《壊れた神の教会》だ。
彼等からすれば我々のことを”神”を利用する不敬者と捉えかねられん。
ただでさえ”対《サーキック・カルト》”では彼等の助力が必要だと言うのに我々とまで関係が悪くなられては困る。
「とは言いつつも頼らなければならないのが現状か……」
”人類は恐怖から逃げ隠れしていた時代に逆戻りしてはならない”
”管理者”が放ったその言葉。
我々にはそれを全うする義務があり責任がある。
「……そう言ったところで今の現状をどうにか出きる訳ではないのだがな」
それをなす為の力が目の前にあると言うのにそれを易々と使うことができない。
……所詮私もまだまだ人間の範疇か。
「まぁ、先ずはクラフターをこちらに戻すか」
そろそろこちらに返してもらはなければこのサイトがある意味がない。

……本当に優秀すぎると言うのも考えものだな。
サイト―17には悪いが彼を長居させることは端から無理なことなのだから。
「だが、〝魔女〟の事もある……いや、それはなんとかなるか？」
言い訳のようだがあくまでも彼奴は学生を勧誘しに行っただけだ。
……。
まぁ、〝教師〟の選別、訓練は順調だ……顔合わせはしておいた方がいいだろうからな。
「それに、奴が創る物、と言うのも気にはなるが」
今の技術ではアナンタシェーシャを監視するのには心もとない……。
奴が創った物を模倣させると言う事をするのならば話しは……いや、待てよ。
模倣させる、か……。
〝教会〟の協力の元ならばあるいは……。
いや、そもそも原本を奪われる可能性の方が高いな……。
「まあ、先ずは奴をこちらに戻さねば話は進まんか」
色々とやらなければいけない事もあるが先ずは一つ終わらせていくとしよう。
＜side out＞

# 第四十二話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

サイト―３４１

……ペラ……ペラ……

「うぅぅむ……これはどうしたものか……」

たった今俺はかなり頭を悩ませている問題がある。

まぁ、此処まで悩むことになった経緯を話したいが、詳しく話していると時間がかかってしまうので大まかに纏めると、近日中に退役を迎える潜水艦の代わりを造ってほしい、とのこと。

此処までなら何の苦にもならなかった……と言うか、今迄使用されていた潜水艦ならまた新たに新造すれば良いだけなので、そこを俺に頼る必要はない。

……と言うか俺なんかに頼まずとも用意できるくらいの財力がありそうだしな。

だから当初俺は少しハイスペックな程度の潜水艦を作るぐらいだと思っていた。

だがそこで待ったがかかってしまった。

……ジョークじゃないからな？

ま、まぁ、そんな話は……やめるんだそんな目で私を見るな。

オ、オホン……まあ、兎に角待ったがかかった訳だがそれにもいろいろと事情があるようだった。

今回俺が設計したものを基礎として他の軍艦、工作船、潜水艦等に設計を流用したいとのことだった。

……俺は専門家でないので詳しいことは分からないが流用できる場所があるのだろう。

しかし、そうなるとこちらとしてもオーパーツとして設計するわけにもいかずどの程度の設備であれば今の時点で再現可能であるのかを調べているところだ。

まぁ、調べていると言ってももう既にアタリは付けているのだが。

皆は、《テスラコイル》と言うものをご存じだろうか？

知らなくても聞いたことぐらいはあるだろう。
かつて存在した世紀の大発明家〝ニコラ＝テスラ〟が考え出した発明品の一つである。
そして、これを用いた実験に《フィラデルフィア計画》と言うもがある。
……まぁ、あると言ってもこれは元々軍事関係者から話された内容ではなく元商船員のカール＝Ｍ＝アレンと言う男性が目撃したと言う話があっただけである。
と言うのも、この《フィラデルフィア計画》と言うのは元々護衛駆逐艦〝エルドリッチ〟に強力なテスラコイルを装備させ目視、レーダー探知機ともに確認できない状態にする……つまりは《俺の考えた最強のステルス性能》的な実験だった。
当時ニコラ・テスラはこの実験に参加することを拒絶した。
しかし、実験自体は順調に進み１９４３年１０月２８日この《フィラデルフィア計画》は実施されることとなった。
さて、此処からが問題だ……この計画、すべてを信用していいならの話ではあるが、不可視化すると言う意味でなら失敗した。
しかしこの話には続きがある。
確かに当初予想されていたステルス性能はなかった。
では護衛駆逐艦〝エルドリッチ〟に何が起こっていたのか……。

護衛駆逐艦〝エルドリッチ〟は消えたのだ

そう消えていた……もっと詳しく言うとその場所には存在しなかった。
当初実験が行われていたのは、アメリカ合衆国ペンシルベニア州《フィラデルフィア沖》での実験だった。
しかし《テスラコイル》のスイッチを入れたとたん〝エルドリッチ〟はその場から姿を消した。
次に〝エルドリッチ〟が現れた場所はヴァージニア州《ノーフォー

ク沖》《フィラデルフィア沖》から《ノーフォーク沖》までの距離は約２５００ｋｍ以上……この間実に数秒となかった。
そして、〝エルドリッチ〟内の《テスラコイル》のスイッチを切ったとたん、再び《フィラデルフィア沖》に再びその姿を現した。
つまりは事実上の瞬間移動（テレポート）である。
この実験にも色々と謎や課題が多く残っている。
この時代では明らかなオーパーツ……しかし、だ……俺が元々いた時代を思い出してほしい。
まぁ、少なくともこの時代よりはずっと技術の進歩が進んでいた。
何が言いたいかと言うと俺の居た時代では既に実用化されていた。
高々、百年二百年先の未来で実用化までこぎつけたのかと言うと……ま、必要は発明の母、ってやつだな。
人口が爆発的に増加した未来では、人々が生活するのに必要な物資を運ぶことが困難になった。
海は荒れ、空路では高の知れた量しか運ぶことができない。
そこで各国が目を付けたのが瞬間移動（テレポート）技術だ。
まだ各国の関係がそこそこよかったころ、各国は協力しこの技術の革新を急がせた……と、当時うちのギルドに居た瞬間移動（テレポート）装置の技師が言っていた。
造形的に昔から映画に登場したものの再現などの為にとっておいた資料と一緒に設計図や取扱書……そして何らかの契約書までもがギルドの図書館の肥やしになっていたと言う訳だ。
……なんで、こんな契約書まであるのかは知らん。
まぁ、此処まで行ってしまえばもう察しは付くだろう……。
俺はこの技術を取り入れようと考えている。
潜水艦の大きさ的には原潜原子力潜水艦。大きいもので１８４ｍくらいの大きさになるのサイズもあれば十分だろう。
その他にも武装を考えんとならんし。
取り合えず今のところの段階ではメインはあくまで瞬間移動（テレポート）装置で良いだろう。
下手に武装も考えていると予算的な意味合いで空想の産物となり

かねない。
それに、この潜水艦の主な使用目的はあくまでも監視……俺が言うのもなんだがこの世界には訳な分からないものが多すぎる。
もしもの事があるといけないのでこの装置の意味合いはもしもの時の《脱出装置》だ。
まぁ、このくらいであればオーパーツにもならないのではないかと思う。
「さて、……やるか」
そう言いながら俺は潜水艦の設計図を仕立てて行った。
＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第四十三話

＜ｓｉｄｅ　クラフター＞

ふぅ……。

ようやく潜水艦の設計も大詰めになってきた。

まぁ、少し特別な事情から人化した状態なので僅かながらの疲労感が存在するが大して問題にもならない。

但し

「なるほど……なるほど!!確かにこの理論ならば瞬間移動(テレポート)も可能だ！」

お前(クソ犬)が居なけりゃな!!

何なんだ此奴は!?いきなり助っ人として呼ばれた時は協力者が来たことで有難いだのなんだのと思ったものだが実際に作業に取り掛かればこれは凄いこれはどうだのとずっと質問ばかりでまともに作業できるどころか作業スピードが大幅にずれ込んでしまう始末だ。

何故、俺がこんな犬(厄介者)クロウ博士。本名《ケイン＝”パトス”＝クロウ》学際的な天才科学者で、特に生化学およびロボット工学を専門としている。公に出ることがあったとしても、稀にしか見られない。とある異常事態の結果として、恒久的に犬のような体に変化した可能性がある。に潜水艦の設計と同時に個別授業を設けてやらんといかんのだ!?

しかもこの犬完全なＭＡＤだ。

何故かって？此奴俺の観察(スクラン)及び研究責任者(トン博士)と同じ匂いがしやがる!!

面白半分で安請け合いした過去の俺を殴りたい。

勿論助走ありの全力の右ストレートだ。

……まぁ、そんなことはゴミ箱にでも捨てておこう。

そんなことよりも、だ。

そんなに嫌なら追い出せばいいだろうって？

それができればどれだけよかったか……。

「しかし、これではやはり《フィラデルフィア計画》と同じ結末になる

のではないのかね？」
　有能なんだよな～……。
「まぁ、何と言うかな……適切な振動であれば少ない振動でも莫大なエネルギーを生むことができる」
「……《ニコラ＝テスラ》だね。この計画の仕様書と言い君の考え方と言い君は彼にどこか似ているのかもしれないな。いや、似ていると言うよりは近いのかな？……しかし……そう言う事なら納得だ。何せ僕もただ出力を大きくしただけでこの問題が解決するとは思っていない。でどうするんだい？」
「……もうそこまで言ったなら予想は付いているだろう」
「〝周波数〟だね」
「その通りだ。昔のことなどさほど興味もないが船に使われる電気系統の周波数は６０Ｈｚ（ヘルツ）これはインバータ交流の周波数を変える装置のこととそう変わらない。そして船で周波数を変換する装置はまだその時代普及していないそもそも１９４３年にそんな代物があるとは思えん。……もしも、この計画に《ニコラ＝テスラ》が参加していたのならば真っ先に気付いていただろうな」
「しかし、史実では彼は参加を拒否し計画は強引に進行した。当時交流電流は世間的にも軍事的にもそんなに理解度が深かったわけでもない。軍部の強引な計画が凄惨な悲劇を生んだ。……まぁ、貴重な（面白い）データではあったけどね♪」
……。
　やっぱコイツＭＡＤの臭いがするわ……。
「ま、話を戻すがその時〝エルドリッチ〟で使っていた周波数をそのまま使ったのだろう。そのせいで悲惨な運命を辿ることとなった〝エルドリッチ〟の職員には本当に災難だったがな。……まぁ、いまさら言ったところで何になるともならないが」
「となると、やはり問題は周波数をどうするかだが……此処に記載している通りだと君はこの答えにたどり着いているようだが。しかし、盲点だったよこのように周波数や電圧等の調整率をずらすことでＸ・Ｙ・Ｚ軸方向に物体を飛ばせるとは……。しかし、これは危険性をか

なり伴っているように見える。もし、この調整率から大きく外れすぎる……調和性が消えたとたん　　」
「《フィラデルフィア計画》の再来、あるいはやき回し……まぁ、結果は同じか」
「その通り、……しかし、此処まで理論だてられている上に今僕らが進めている計画の根幹でもある。それをいまさら更地にし直そうとは考えてないけど」
「まぁ、先程と似たような会話になるが結局は高周波により物体をA地点からB・Cと過程を置かずにいきなりZ地点まで飛ばしてやろうと言う内容だ。そして、何よりも《フィラデルフィア計画》と違う点はここだ。物体を隠そうとした結果瞬間移動（ワープ）したのと、最初から瞬間移動（テレポート）を前提として理論を構築したものでは〝畑〟が違う」
「〝畑〟が違う……まぁ、そうだろうね。だが、結局は同じ周波数だ。君が先ほどからいくらか使っている《ニコラ・テスラ》の言葉を用いるならば〝宇宙を理解するにはエネルギー、周波数、振動を考えなさい〟……つまりは根本的な原理は同じなのさ。ま、言ってる僕がなんだけどこれは屁理屈かな？」
　……う～ん
　これは、質問と言うよりは試している、と言う感じなのかな？
「屁理屈と捉えることもできるが……観点の違いとも考えられる」
「観点の違い？……時間的観測者の違いなら当てはまるかもしれないが……」
「いや、そんな複雑な話ではない。要するに……そうだな俺が料理人（シェフ）だとしよう。俺が得意とする理論（料理）は瞬間移動（ジャンクフード）に関してだ。そんな奴がいきなりステルス（和食）を作ろうなんて考えないだろう？それは立場が逆でも同じなのさ。しかし、もしまれに相手が失敗した料理でも俺からすれば傑作なものがあるとしよう。それはステルス（和食）ではないが瞬間移動（ジャンクフード）ではあるわけだ」
「ほぉ……それが君の言う〝観点の違い〟あるいは〝畑〟違いか」
「そうだ」
　さぁ、どう出る？

「クフフ……ハハハハハハ!!やはりここに来てよかった！非常に良かった!!君とこの様な会話ができる事に感謝しかないよ財団には。新たな視点、新たな考え方や理論の構築、全てが他とは一線を画す！実に有意義だ」

俺にとっては不利益だがな。

だがしかし、この感じでは認めてくれたようではあるが。

と言うか認めてなかったらこの時間が無駄になる。

「ｉｎ「クロウ博士だ」……クロウ博士ところで進捗状況は？」

「おっと失礼そろそろ本気で急ぐとするよ」

コイツ……俺と話してばかりで何もやってなかったな？

「そうしてください」

本当に……何でこんなＭＡＤが手伝いに来たんだ？

「ところでロッシ博士、この研究の成果だが私のウォーカーに勝手に取り組もうとしてたりなんかしてると言ったら怒るかい？」

「本当に何しに来たんだお前……？」

＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞

# 第四十四話

＜ｓｉｄｅ　クラスター＞

様々な道具が置かれた部屋。

そこは本来財団の設備などの資料が置かれていたが今はそれらを一旦別の部屋に移してある。

そして今その部屋には大量の計画書に設計図が都会のビル街のごとく積みあがっていた。

まぁ、此処まで色々と大掛かりな作業になったのにも色々と理由があったのだ。

「なぁクロウ博士、俺達は確か潜水艦を作ってたんだよな？」

「その通りだよ？」

「〝普通の〟潜水艦を作ろうとしてたんだよな？」

「テレポートできる時点で普通かどうか怪しいけどその通りだよ？」

「じゃぁ今俺達が創ってるのは何なんだろうな？」

「何って潜水艦じゃないか」

「ああ、潜水艦だ。しかし、その前に〝揚陸〟ってのが付くけどな？なんなんだ？揚陸型潜水艦ってなんだ？」

「さぁ？……でもまぁ昔日本が潜水空母なんて大それたものを作ってたしできるんじゃない？と言うかもうほとんど完成してるんでしょ、それ？」

と言って顎で俺が先ほど書き上げた仕様書を指す。

そうだ、確かに彼の言っている通り大まかな仕様書を作り上げはした。

しかし、しかしだ。

それはあくまで元々の潜水艦であってこんなゲテモノ臭が漂う代物じゃない。

確かに言いたいことは分かる。

海底の水底深くを潜って目的地で浮上しそのまま陸上部隊を下したい。

目的用途はよく分かる。

むしろ、水底を進む分敵に発見されにくくなる。
そしてテレポートを含めると接近する時間も労力も少なくなって合理的だと言う事も分かる。
しかしだ、それでもいきなりこんな大きな変更を要求してくるとは技術屋泣かせにもほどがあるじゃないか。
……まぁ、出来ますけど。
流石にこの所業にはイカレ具合が最高潮だった駄犬（クロウ博士）も遠い目をしている。
本当によくここの職員は頑張っているよ……こんな無茶ぶりにも慣れた手つきで対応している。
「それにしてもなぁ……まぁ、言ってても始まらないか」
変更は既にされた。
なら私は仕事としてそれに励まなければならない。
「あ、設計案なんだけど……これぶっちゃけ元の構想からさらに長くなるよね？」
「ああ、長く成るどころじゃない。少なくとも要望には戦車八両、輸送車四両、戦術指揮車両一両、そして予備に偵察用のバイクを三両を運ばなければならない。この時点で縦方向には積めんだろうから二列か三列に分けなければならんだろうな」
「でも武装と推進力、それに居住区や指揮所も考えると二列になるんじゃないか？」
「そうか、それもあったんだな。と言うか本当にこれどうするんだ？」
「さぁ？」
さぁ？って
でもまぁ、請け負ったからにはやらんといかんのだろうけども。
「さて、設計も基本構想も誰がやったこともない未開拓領域だ。全くいかれてると思わないか、ロッシ博士？」
「ああ最高にイカレてる」
「そう言う割にはもう設計図を作ったんだ？」
「まだ設計図じゃない初期段階のスケッチだ」
「なるほど、……ふむ……何と言うか平べったいね？」

む、仕方ないだろう。
なんせ揚陸潜水艦なのだから。
揚陸とある以上下部装甲と前面の装甲にかなりの比重が寄ってしまう。
だがそうすれば勿論操縦性能は格段に落ちてしまう。
それはもうまっすぐ進むことすら怪しいほどに。
であれば潜水艦の中部に持ってきていたテスラコイル等のテレポート設備を後ろに持ってきて中部に機関系を持ってきさえすればいい。
居住区？
機関の上のフロアにでも持っていけばいいだろう。
生憎とこの潜水艦には対地攻撃用のミサイルを積んでいない。
積んでいる余裕がない。
そしてそうなると今度は全体的に負荷がかかる。
主に揚陸した際の船体下部とかはもろにその負荷を受けることになり最悪の場合ドカン!!だ。
何せ機関があるからな。
だからこそ負荷を分散するには平たくしなければならない。
「しかし、潜水艦で揚陸作戦なんて良く思いついたね。これ出してるの0—5かそこらなんだろう？公言はしなくていいけど。彼らについては職員の間でいろんな憶測が飛び交うけど彼等はイギリス人なのかな？紅茶を決めてるからこんなものを思いつくんだろうね、きっと」
「さぁな、……しかし確かに紅茶を決めてそうな発想だ。それこそ氷山空母とかを考えた連中と大して変わらんだろうさ」
全く、無茶ぶりを受けるこちらの身にもなってほしいものである。
流石にこの所業にはこの駄犬も皮肉を言っている。
元々再現可能と言う事を除けばすぐにでも造ってやるのに。
「はぁ～、まさか先に決まった決まり事が此処まで足かせになるとは……」
「足かせ？」

「いや、何でもない」
しまった、駄犬に聞かれてしまっていたか。
まぁ、今の内容だけじゃ推理の材料が足りないから別に構わないだろう。
それにこういう縛りプレイと言うのも楽しいのも確かではあるしな。
「じゃあもう初期のスケッチはこれでいいか？」
「あ～、うん。まぁ、横転はしないだろうしね。ちょっと操縦性能が劣るかもだけどそこはテレポートで補えるだろう」
「それはＯＫってことか？」
「そうだね。デザインは少しあれだが面白そうだ」
じゃあこれで決まりってことで良いんすかね？
俺自身も此処まで来て言う事じゃないが本来は全く専門としてたわけじゃないからここの所この駄犬の意見が大切だった。
まぁ、乗り気になってくれてよかったよ。
「では、……始めようか」
＜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＞